# 紀　要

## 第 2 号

浅口市竹林寺天文台遺跡の確認調査－岡山県南西部の弥生集落－・・・・・・・小林　利晴
岡山県における弥生時代の墳墓の列石について・・・・・・・・・・・・・・・氏平　昭則
集落から出土する弥生～古墳時代の紡錘車について－岡山県の事例から－
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・團　　奈歩
総社市一丁坦38号墳の発掘調査　・・・・・・・・・渡邉恵里子・四田　寛人・柴田　英樹
周匝茶臼山城跡と大仙山城跡－宇喜多氏による改修、築城の可能性を巡って－
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・和田　　剛
岡山藩重臣の儒葬墓－岡山市大岩墓所－・・・・・・・・・・・・・・・・・・・亀山　行雄

2022年 3 月
岡山県古代吉備文化財センター

# 目　　次

浅口市竹林寺天文台遺跡の確認調査－岡山県南西部の弥生集落－・・・・・・・・・・・・・・ 1

岡山県における弥生時代の墳墓の列石について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13

集落から出土する弥生～古墳時代の紡錘車について－岡山県の事例から－・・・・・・・・ 25

総社市一丁坂38号墳の発掘調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37

周匝茶臼山城跡と大仙山城跡－宇喜多氏による改修、築城の可能性を巡って－・・・・・・ 57

岡山藩重臣の儒葬墓－岡山市大岩墓所－・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 69

# 浅口市竹林寺天文台遺跡の確認調査－岡山県南西部の弥生集落－

小　林　利　晴

## 1　地理的歴史的環境

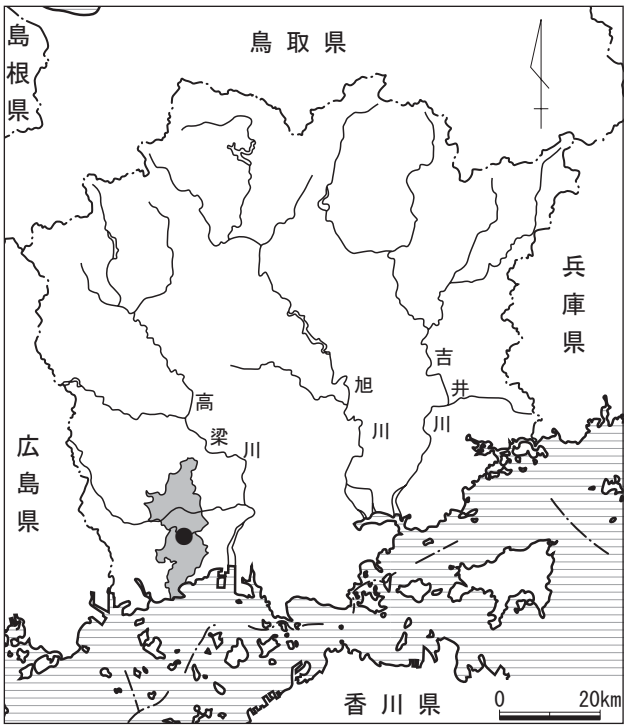
今回、ここに報告するのは、平成15年に岡山県教育委員会が、国立天文台岡山天体物理観測所新望遠鏡施設建設に伴って実施した、竹林寺天文台遺跡確認調査の成果である。この遺跡は標高372mの竹林寺山山頂付近に位置し、埋蔵文化財包蔵地として周知されている範囲の大半は現在、自然科学研究機構国立天文台岡山天体物理観測所（以後、国立天文台と呼ぶ）の敷地内にある。天文台が存在することからも分かるとおり、遺跡は平地からの比高差が約300mもある高所に位置し、東に標高405mの遙照山、西に標高364mの阿部山などが連なる遥照山山地の一画を占める。この山頂は現在、北側の小田郡矢掛町と南側の浅口市との境界となっており、かつても備中国小田郡と浅口郡の郡境をなしていた。北側の矢掛町では、西から東に向けて流れる小田川に沿って旧山陽道が走っていた。南側の浅口市では現在、山陽新幹線や山陽自動車道、国道２号線などの幹線道路が東西に走っている。遺跡地の眺望はよく、南は瀬戸内海を越えて四国、東は岡山市、西は広島県福山市、北は吉備高原の山々が一望に見渡せる。

高所であるにも関わらず、竹林寺山周辺ではかねてから遺跡の所在が知られていた。阿部山付近では、弥生時代の土器・石器のほか、銅鏃も出土している。また遙照山山頂付近は寺跡として周知されている。今回の調査地点である竹林寺山山頂付近においても、クーデ型太陽望遠鏡施設建設（後述する第２地点のすぐ南側）に際して箱式石棺が見つかり、弥生時代の土器・石器も出土している。第３・４図に示したのはこの時の出土遺物である[1]。１～３は弥生時代中期、４～12は弥生後期前葉の土器である。このうち10の鉢は、他の土器と胎土に違いがあり、備後産の可能性があるという[2]。13～19は弥生後期後葉の土器である。18の鉢と19の壺は、土器棺として用いられていた可能性がある。Ｓ１・２は石包丁で、Ｓ３は楔か。Ｓ４はスクレーパーである。また、山頂東側に横穴式石室が現存するほか、山頂から下った尾根筋にも多くの遺跡が存在している。北側の矢掛町では、地蔵岩付近で弥生時代中期の土器が見つかっている。さらに下った裾野付近には、圃場整備に伴い確認調査が行われた神之脇遺跡と上山遺跡があり、前者からは弥生時代中期の竪穴住居が確認された[3]。南側の浅口市では、地蔵峠付近や竹林寺山南の中腹で弥生時代の土器が見つかっている。段林遺跡、道面遺跡はかつて発掘調査が行われ、両遺跡とも弥生時代後期の竪穴住居が見つかった[4]。裾野にある和田遺跡では、旧石器や縄文土器が見つかっているほか、弥生時代後期の土坑墓群から特殊器台形土器・高杯などが出土して注目された[5]。さらに南側にある寄島山地の裾部には、弥生時代の遺跡として森山遺跡[6]、和田谷遺跡などの集落や城殿山遺跡[7]などの墳墓群が存在する。

## 2　調査の経緯と経過

### （1）調査の経緯と経過

岡山県浅口市本庄に所在する国立天文台で、新望遠鏡

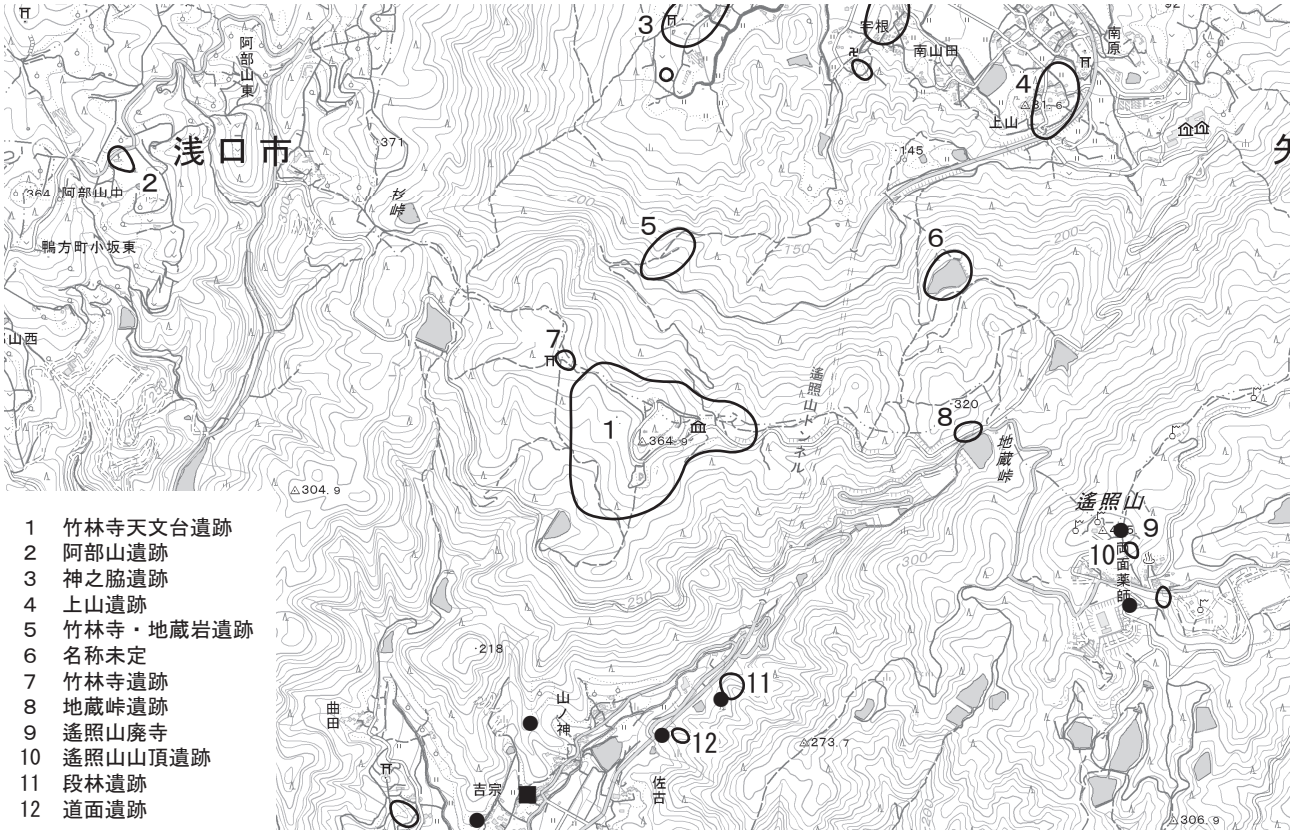



第１図　遺跡位置図（1/1,500,000）

施設の建設が計画された。その敷地は全域が埋蔵文化財包蔵地として周知されていたため、平成13年から国立天文台と岡山県教育委員会の間で埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行い、平成15年度に岡山県教育委員会が確認調査を実施することとなった。なお、この確認調査に先立つ平成15年２月３日には、50㎝反射望遠鏡施設の基礎工事に伴って、敷地内の急斜面地を事前に掘削し（５×５ｍ）、遺構・遺物とも存在しない状況を確認している。

確認調査は、京都大学と広島大学が新望遠鏡を１基ずつ建設する予定であったため、その２か所について実施することとなった。調査地点は、現在188㎝反射望遠鏡が建っている南側の緩斜面（以後、第１地点と呼ぶ）と65㎝クーデ型太陽望遠鏡が建っている緩斜面（以後、第２地点と呼ぶ）で、調査期間は平成15年７月14日～28日、調査面積は195㎡である。調査の結果、両地点とも弥生時代の竪穴住居をはじめとする遺構の広がりが判明し[8]、その成果をまとめた埋蔵文化財確認調査の報告を、平成15年８月７日付け、岡吉調第161号で提出した。これにより、県教育委員会が両地点の本発掘調査を実施することが決まった。

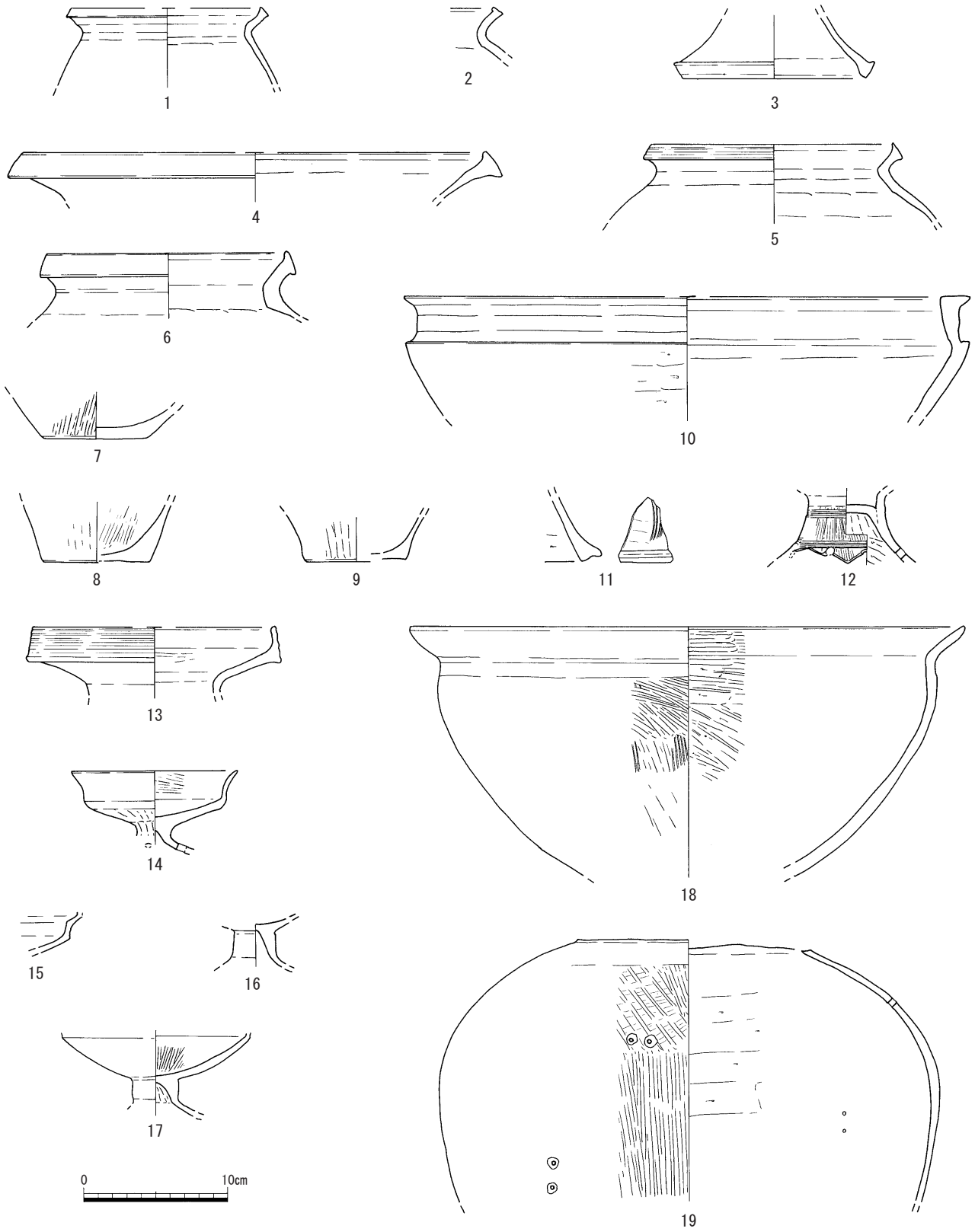
ところが、広島大学は新望遠鏡の建設を変更したため計画が一時中止となり、京都大学も建設予定地を竹林寺山山頂の東尾根に変更した。京都大学の新しい建設予定地は、遺跡近接地であったため、平成17年に県教育委員会が試掘調査を行うこととなった。調査の結果、この地点においても弥生時代の遺構・遺物を確認し、遺跡範囲が東尾根まで広がることが判明した[9]。そのため県教育委員会が、新たに周知の範囲となった東尾根頂部について平成19年度に本発掘調査を実施することとなった。その後、新望遠鏡の建設計画は、事業主体が数回代わり、それに伴って発掘調査の実施機関も県教育委員会から浅口市教育委員会へ移るなど紆余曲折したが、その間の事情は『浅口市埋蔵文化財調査報告』２に詳しい[10]。本発掘調査は、浅口市教育委員会によって平成20年と平成27年の２度にわたり実施され、その調査報告書も同市教育委員会から２冊刊行されている[11]。なお、京都大学の新望遠鏡は、平成30年に「せいめい」望遠鏡として完



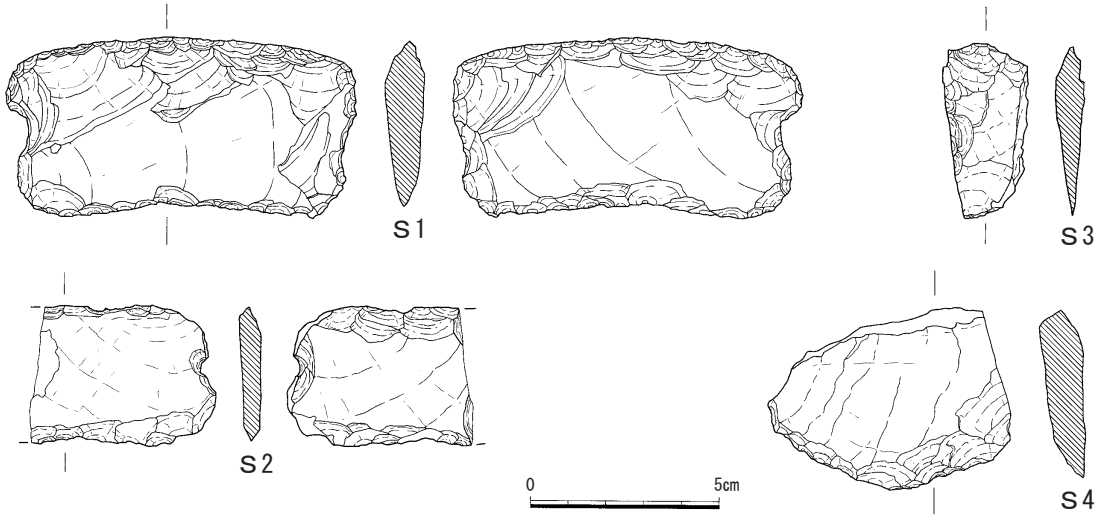

第２図　周辺遺跡分布図（1/25,000）

成した。

岡山県教育委員会が実施した平成17年度の確認調査成果については、その後、浅口市教育委員会が実施した本発掘調査の成果とあわせて同市教育委員会により刊行された。しかし、平成15年度の確認調査成果については、本発掘調査が別地点で行われ、事業主体や調査機関も変




第３図　クーデ型太陽望遠鏡建設時出土遺物１（浅口市所有、1/4）




第４図　クーデ型太陽望遠鏡建設時出土遺物２（浅口市所有、1/3）

わったことから、未報告のままとなっていた。今回、ようやく報告の機会を得て、調査担当者としての責を果たす次第である。

（２）調査の体制

平成15年度

岡山県教育委員会

教 育 長　　宮野　正司

岡山県教育庁

教育次長　　三浦　一男

文化財課

課　　長　　西山　　猛

課長代理　　田村　啓介

課長補佐（埋蔵文化財係長）

平井　泰男

古代吉備文化財センター

所　　長　　正岡　睦夫

次　　長　　藤川　洋二

文化財保護参事　　松本　和男

〈総　務　課〉

課　　長　　中田　哲雄

課長補佐　　笏本　弘忠

主　　任　　小坂　文男

〈調査第一課〉

課　　長　　岡田　　博

課長補佐（第一係長）　光永　真一

文化財保護主事　　小林　利晴（調査担当）

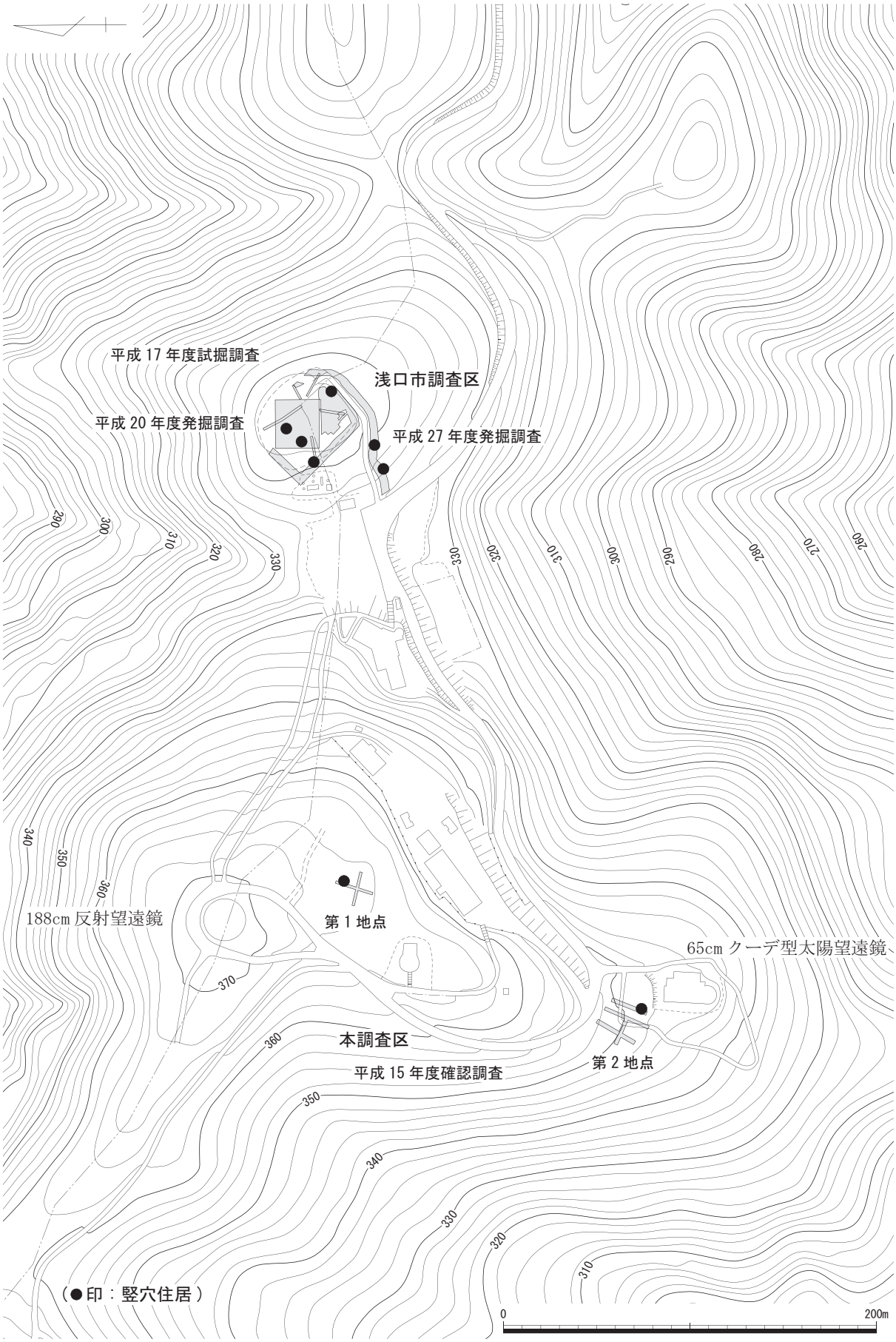
## ３　調査の概要

### 第１地点（第６・７図）

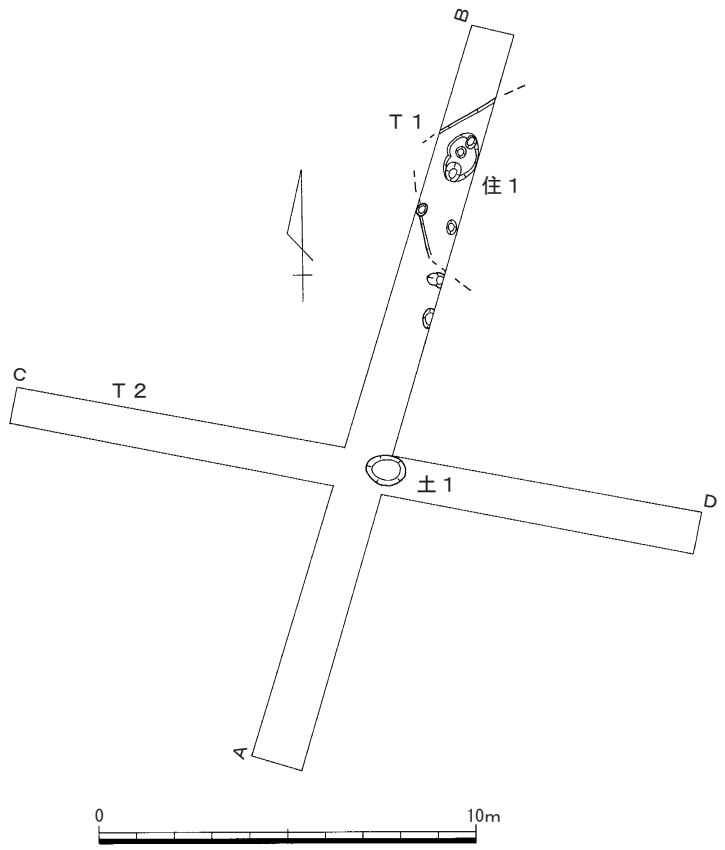
188㎝反射望遠鏡の南側に広がる緩斜面に、長さ約20ｍのトレンチ２本（南北方向にＴ１、東西方向にＴ２）を十字に設定して調査を実施した。第１地点は、南北約100m、東西約50mを測る緩斜面の中央よりやや北側に位置する。Ｔ１・Ｔ２とも地表下20～30㎝で明黄褐色の地山となるが、Ｔ１の北端は岩質基盤に変わる。検出した遺構には、Ｔ１の竪穴住居１軒、柱穴状遺構２基、Ｔ１とＴ２が交差する付近の土坑１基がある。また、Ｔ２の東側に弥生土器を出土する地点が存在した。これらは地山が岩質へ変わる付近にまとまっていた。遺物の大半は竪穴住居１の覆土中から出土した。

### 第２地点（第８・９図）

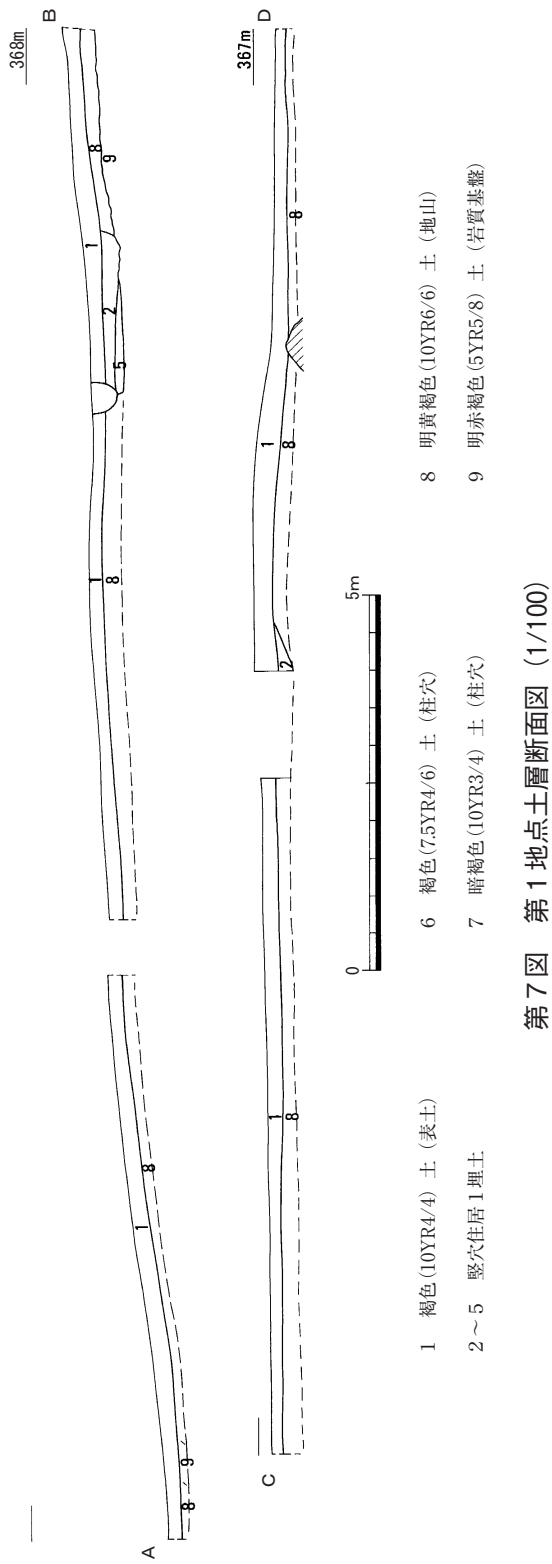
クーデ型太陽望遠鏡の北西側に広がる緩斜面に、南北方向のＴ３（23×２ｍ）・Ｔ４（27×２ｍ）・Ｔ５（20×２ｍ）、Ｔ４・Ｔ５と直交するＴ６（15×２ｍ）のトレンチ４本を設定して調査を行った。この第２地点は、望遠鏡が建っている箇所も含めて南北約50m、東西約30mの範囲に広がる緩斜面の北西端に位置している。調査前は、標高350m付近でほぼ平坦な地形を呈していた。しかし、Ｔ３～Ｔ５の北側は表土直下が地山となるのに対し南側は造成土が厚さ１～２ｍほど堆積することから、望遠鏡建設の際に北側を削平してその土を南側に盛ったことが判明した。そのため遺構は、造成土下に旧




第５図　竹林寺天文台遺跡調査位置図（1/3,000）




第６図　第１地点遺構配置図（1/200）




第７図　第１地点土層断面図（1/100）

表土が残る南側に集中していた。検出した遺構には、Ｔ３南側の竪穴住居１軒、Ｔ５南側の溝１条、Ｔ４・Ｔ６の柱穴状遺構がある。

なお、平成15年に立会調査を行ったのは、第１地点と第２地点の間にある比較的傾斜の急な斜面地である。

竪穴住居１（第10図）

第１地点のＴ１の北側端付近で検出した竪穴住居で、全体の西側を調査したものと考えている。また、これに隣接して柱穴１基を検出した。

住居の規模は検出長458cmを測り、検出面からの深さは中央付近で約30cm、北端で約20cmある。床面は、海抜366.8m付近で水平となるが、岩質の基盤を掘り残した北側では10cmほど浅くなっている。多角形ないし不整形に復元される平面形は、岩盤の制約を受けた結果と考えられる。検出長から復元した床面積は推定で約18㎡であり、竪穴住居２よりやや大きい。検出した５本の柱穴は、全てが平面円形を呈し、径35～40cmの規模である。深さは全て約40cmである。北側には浅い凹みが存在し、規模は幅約100cm、深さ約12cmを測る。

出土遺物のうち、図化したものは全て弥生土器である。20は壺の口縁部で、外面に施した５条の凹線に３条の刻線を加える。21～24は甕で、口縁部21・23・24と底部22がある。21・23の口縁部外面には、数条の擬凹線が施される。25・26は高杯で、25は杯部と脚部の接合部に円盤充填が認められる。26は脚部であるが、施文、透かし孔などは見られない。これらの特徴は、弥生時代後

期前葉を示している。

竪穴住居２（第11図）

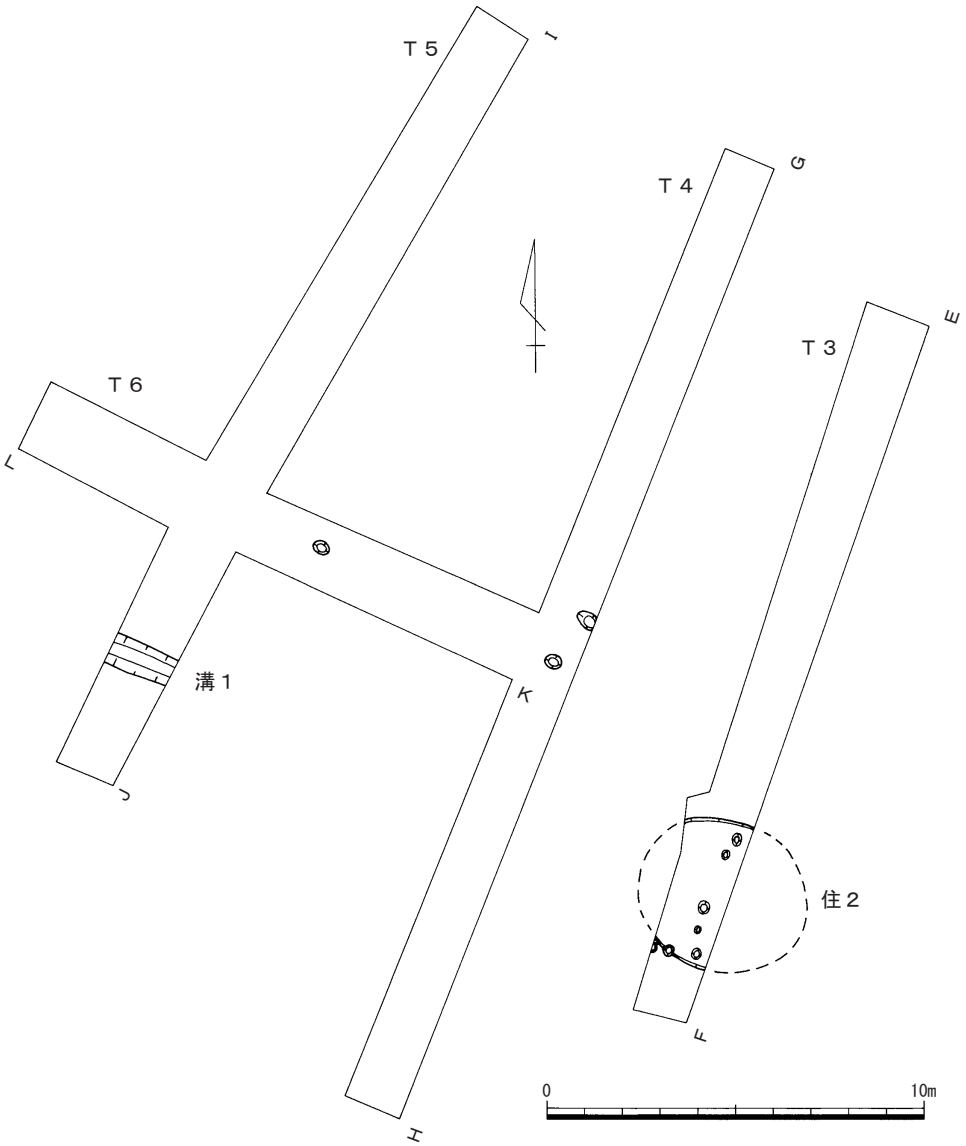
第２地点Ｔ３の南端付近で検出した竪穴住居で、全形の中央西側部分を調査したものと考えている。周辺には他の遺構が存在しない。

住居の規模は、検出した最大長404㎝で、検出面からの深さは35㎝を測る。平面形は円形になることが予想され、検出長から復元した床面積は推定で約14㎡である。床面は、海抜348.8m付近で水平となる。壁体溝などは見つかっていない。数本検出した柱穴は、全てが平面円形を呈し、径20～30㎝の規模である。深さは全て20～30㎝である。住居覆土の２層には、多量の炭化物が含まれており、焼失住居と考えられる。

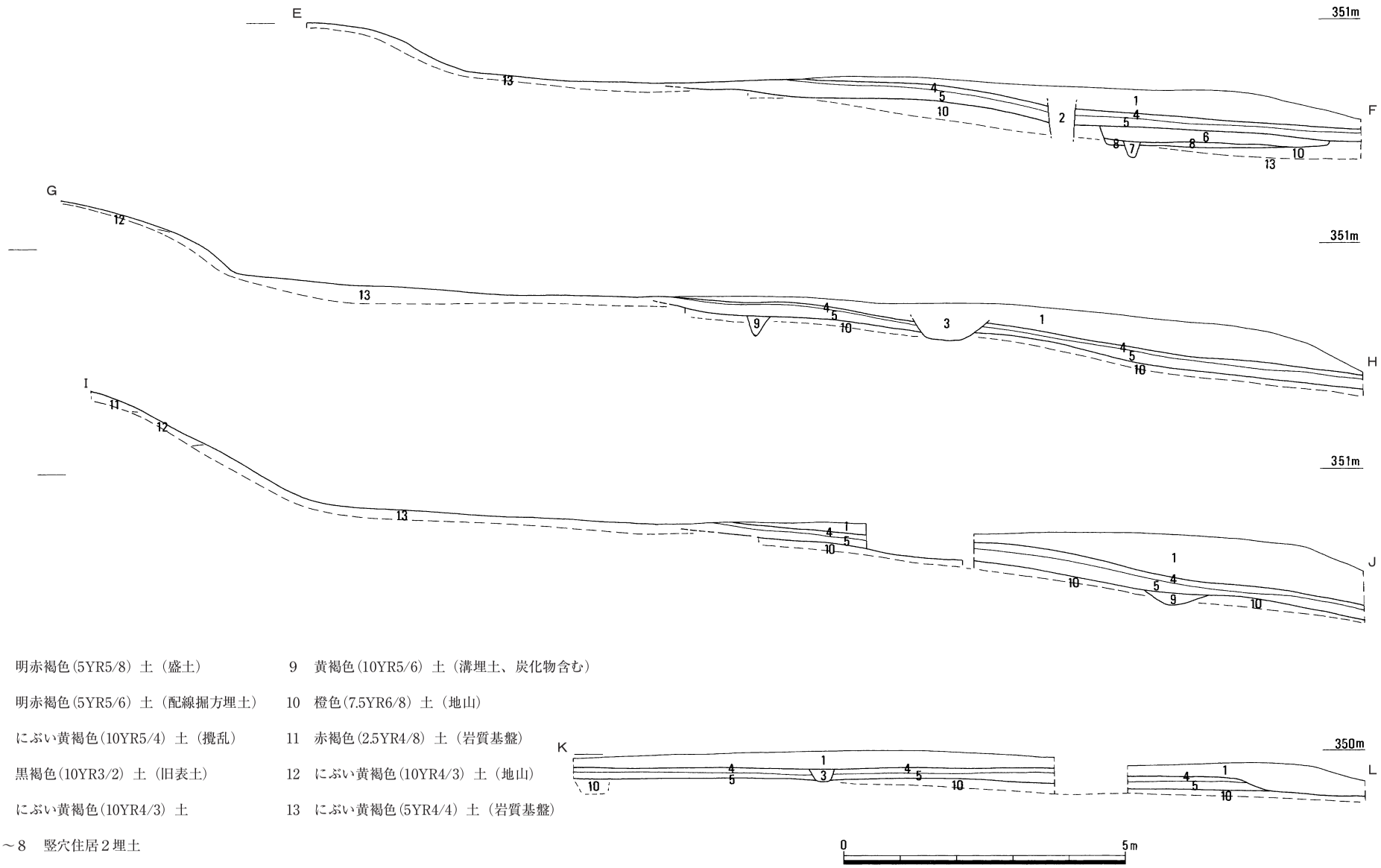
出土遺物には、以下のものがある。27～29は全て弥生土器である。27･28は壺口縁部、29は甕口縁部である。27の口縁は、外側に水平気味に広がり、端部に面を作る。28の口縁は、外側に短く広がり端部は丸く収まる。29の口縁部は、内傾する端部に数条の擬凹線を施す。これらの特徴は弥生時代後期前葉の様相を示しており、竪穴住居２は竪穴住居１と同時期になるが、やや先行する可能性がある。

土坑１（第12図）

Ｔ１とＴ２が交わる箇所で検出した。規模は長軸長110㎝、短軸長85㎝で、平面は楕円形である。検出面からの深さは約20㎝で、断面は皿形を呈する。出土遺物は存在しないが、覆土が竪穴住居１の１層と類似するため、

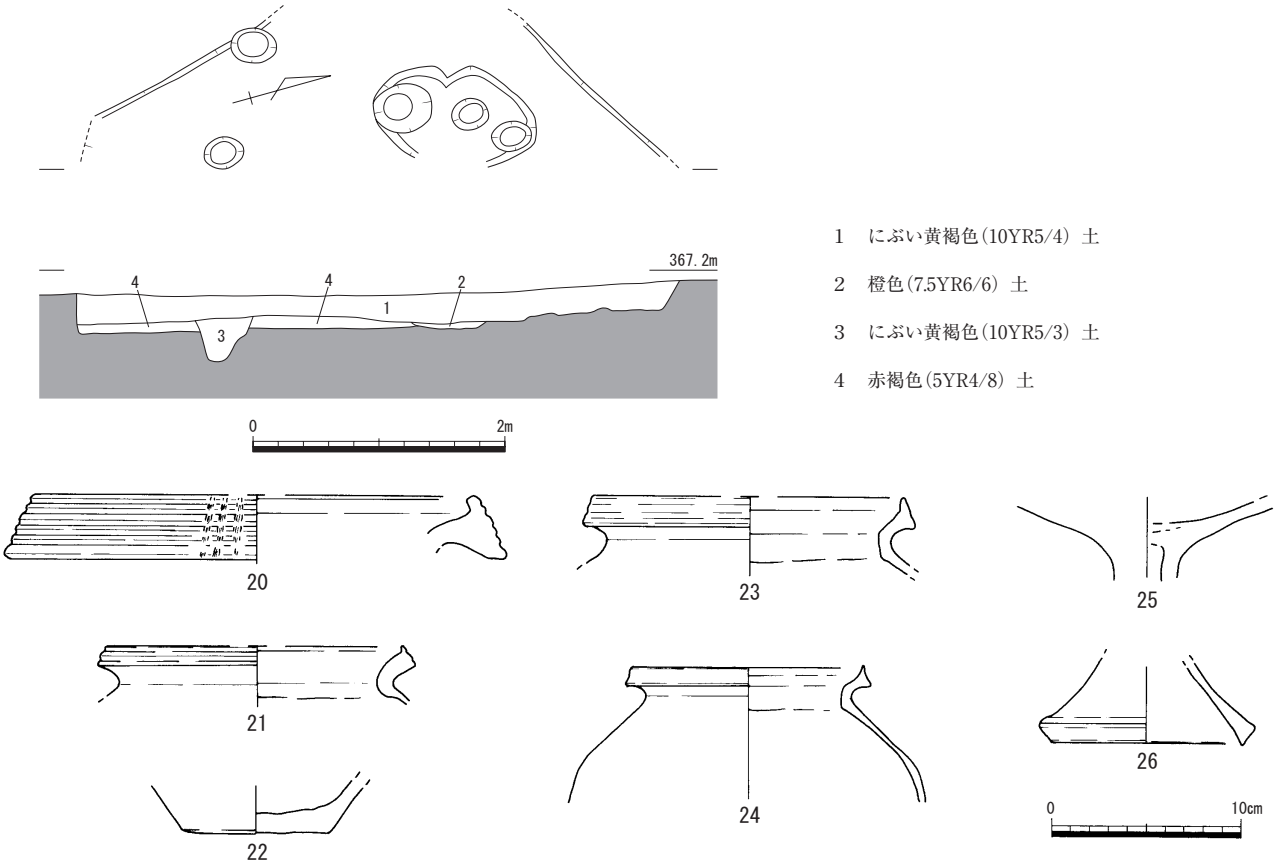



第８図　第２地点遺構配置図（1/200）

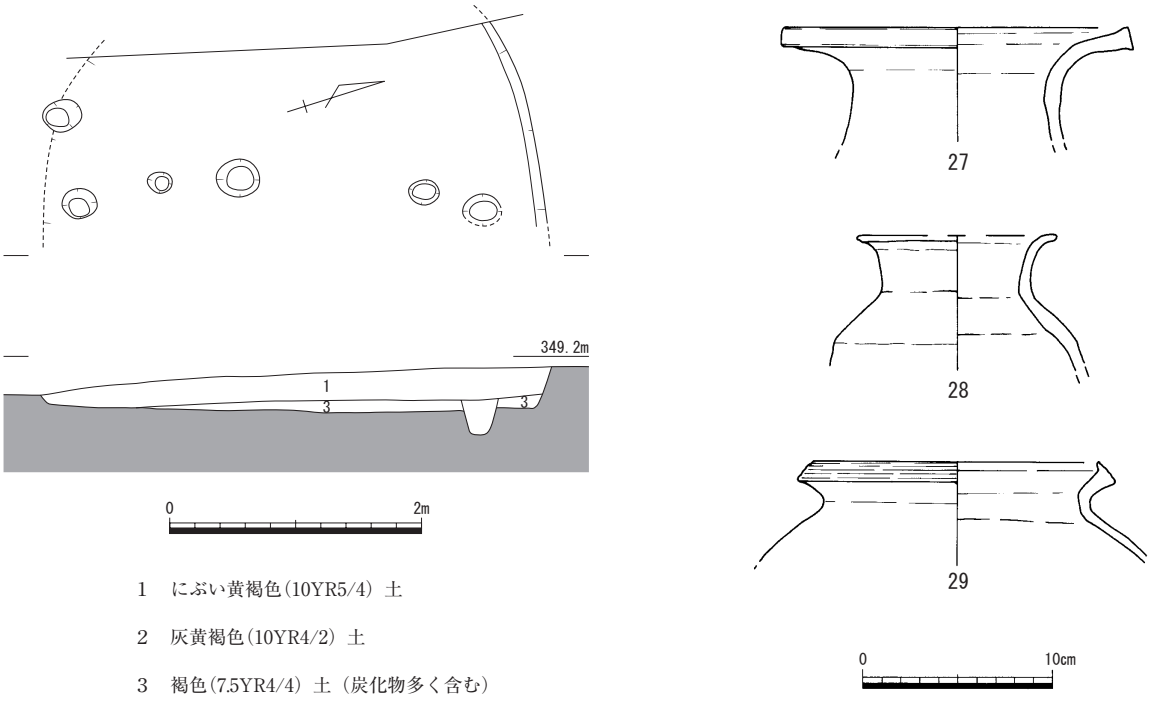



1　明赤褐色(5YR5/8) 土（盛土）
2　明赤褐色(5YR5/6) 土（配線掘方埋土）
3　にぶい黄褐色(10YR5/4) 土（攪乱）
4　黒褐色(10YR3/2) 土（旧表土）
5　にぶい黄褐色(10YR4/3) 土
6～8　竪穴住居２埋土
9　黄褐色(10YR5/6) 土（溝埋土、炭化物含む）
10　橙色(7.5YR6/8) 土（地山）
11　赤褐色(2.5YR4/8) 土（岩質基盤）
12　にぶい黄褐色(10YR4/3) 土（地山）
13　にぶい黄褐色(5YR4/4) 土（岩質基盤）

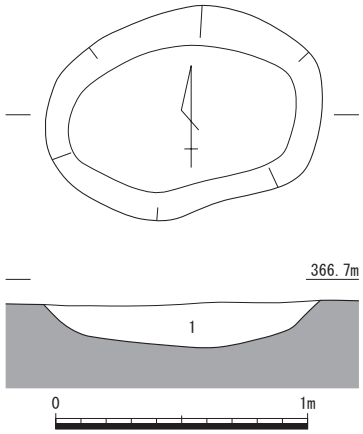
第９図　第２地点土層断面図（1/100）




第10図　竪穴住居１（1/60）・出土遺物（1/4）




第11図　竪穴住居２（1/60）・出土遺物（1/4）




1　にぶい黄褐色(10YR5/4) 土

第12図　土坑１（1/30）

この土坑も同時期と考えられる。

溝１（第13図）

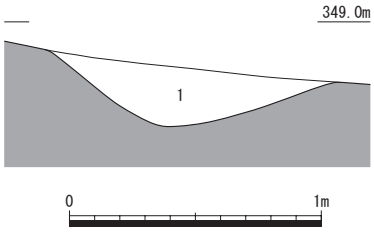
第２地点のＴ５の南側端付近で検出した。南東側から北西側方向に向けて流れていたものと考えている。規模は、上面幅が110cmで、深さは約20cmである。断面は皿形を呈する。この溝は、東側のＴ４において検出されておらず、遺跡内をどのように走流するのか不明である。

遺物は出土していないが、覆土が竪穴住居２の１層と類似するため、同時期と推測される。

柱穴状遺構

第１地点では、柱穴と思われる遺構が２基見つかっている。２基ともＴ１の北側にあり、竪穴住居１の南側に近接している。２つとも規模は30～50cm前後で、深さは約20～30cmである。出土遺物は存在しないが覆土が竪穴住居１の１層を類似するため、どの柱穴も住居１と同一の時期になることが予想される。

第２地点では、柱穴と思われる遺構が３基見つかっている。Ｔ６中央付近とＴ４のＴ６が交わる付近の２ヶ所である。３基とも規模は20～30cm前後で、深さは約20cmである。遺物は存在しないが覆土が竪穴住居２の１層を類似するため、どの柱穴も住居２と同一の時期になることが予想される。




1　にぶい黄褐色(10YR5/4)土

第13図　溝１（東壁、1/30）

## ４　総括

竹林寺天文台遺跡は、本稿の調査地点（以後、本調査区と呼ぶ）と浅口市教育委員会の調査地点（以後、浅口市調査区と呼ぶ）を併せると、遙照山山頂部の２か所に営まれた弥生後期前葉･後葉の高地性集落と考えられる。２つの調査区から検出された遺構は、竪穴住居８軒・建物５棟、段状遺構１基・土坑164基・溝11条を数える。このうち竪穴住居は弥生後期前葉が４軒、後期後葉が５軒（重複あり）あり、掘立柱建物は時期が分かるものが後期後葉であるため、多くがその時期と推定できる。さらに本調査区の西側頂部でも弥生時代後期の高杯が表採されており、遺跡は山頂部に点在すると考えられる。またクーデ型太陽望遠鏡建設時に中期の土器も出土していることから、集落経営期間が遡る可能性もある。後期前葉の竪穴住居は、本調査区住居１などのように形がいびつで壁体溝を持たないなど構造が単純であり、柱穴も浅い。出土する土器は住居覆土のみで、遺構面上層に包含層が存在しておらず長期的な居住を考えたものではない可能性がある。これに比べ、後期後葉の竪穴住居は、平面形が整った円形であり、壁体溝が幾重にも巡っているものもあることから、建て替えが繰り返されたと考えられる。またこれらの竪穴住居には掘立柱建物の大半も付随していたと思われ、ある程度長期的な滞在を意図した集落であった可能性がある。竪穴住居が床面積を増していく傾向からも、地域の主要な集落の１つと考えて良いのではないか。

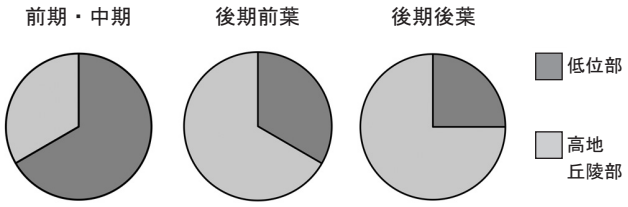
このような様相を、岡山県南西部、とりわけ高梁川以西（小田川流域付近）の集落遺跡と比較するとどうであろうか。この地域における集落遺跡の消長については、水田氏が詳しく述べている[(12)]。弥生時代前期の集落は、遺物の散布する箇所が少ないため、かなり限定的な存在であったと思われる。唯一の発掘調査例である矢掛町清水谷遺跡[(13)]は、小田川の氾濫原に営まれた環濠集落である。検出された竪穴住居の床面積は20㎡以内に収まる

ものがほとんどである。低地に営まれる立地は、総社市南溝手遺跡、岡山市田益田中遺跡・津島遺跡・百間川沢田遺跡などと同じである。

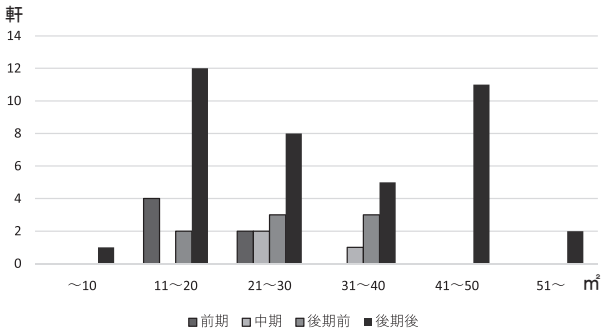
弥生時代中期の集落は調査例が少ないが、丘陵裾部などで土器が採集される箇所が多数あり、遺跡数は前期よりも増加したと思われる。発掘調査が行われた森山遺跡と神之脇遺跡では、竪穴住居の床面積が20㎡前後となり、前期のものとあまり大差ないが、倉敷市蚊蜂遺跡では約40㎡のものもある[14]。

弥生時代後期前葉になると、竹林寺天文台遺跡や内平遺跡[15]のように高所に集落が数多く営まれ始める。岡山県南部に位置する足守川流域や砂川流域では、前段階の中期後葉に大規模な集落が丘陵上に営まれ、後期になると低地に移ることが指摘されているが[16]、この地域では、１段階遅れて高所に集落遺跡が営まれるようである。竹林寺天文台遺跡で検出された竪穴住居の床面積は20㎡前後と推定されるが、この大きさは前期・中期の竪穴住居と大差ない。このように後期前葉の集落は、立地を除けば中期段階と違いがなく、その規模もそれほど大きくなかったことが考えられる。

弥生時代後期後葉になると、竹林寺天文台遺跡以外にも井原市高越遺跡[17]・五万原遺跡[18]、矢掛町中池ノ内遺跡[19]、倉敷市西山遺跡[20]・蚊蜂遺跡、浅口市段林遺跡・道面遺跡などの調査例がある。これらの遺跡の多くは高所や山腹に営まれているが、高所に位置する集落の比率は、弥生時代を通じて最も高く、７割を超える（第14図）。検出された竪穴住居の数は前時期より格段に増加し、床面積も40㎡を超えるものが多数を占めるようになる（第15図）。それまでの集落とは、質・量とも違った様相が見られるのである。高越遺跡の調査を担当した高田氏は、「この地域の弥生時代中期から後期にかけての集落は、小規模なものが丘陵上に営まれるのが一般的」と述べた上で、同遺跡を「小規模な丘陵上の集落にも関わらず有力な集団」と評価している[21]。ただ、この時期に丘陵裾部へ営まれた矢掛町白江遺跡[22]では、竪穴住居こそ検出されていないものの多量の弥生後期土器が出土しており、大規模な集落遺跡の可能性もある。また、特殊器台を伴う弥生墳丘墓が複数存在する倉敷市真備地区では、調査例こそ丘陵にある遺跡しかないが、低地や丘陵裾部に集落遺跡が存在していてもおかしくない。このように全ての集落遺跡が高所にあるわけではないだろうが、高越遺跡のような主要な遺跡が多く存在していた。筆者は竹林寺天文台遺跡もこの時期、この地域における主要な集落遺跡の１つと考えている[23]。




第14図　岡山県南西部集落遺跡の立地




第15図　岡山県南西部竪穴住居の面積

このように県南西部（特に小田川流域を見渡せる地域）の集落遺跡は、後期後葉になると急激に発展することが読み取れた。この時期、吉備の中枢地域（足守川流域と高梁川東岸）では楯築墳丘墓[24]が築かれ、また立坂型の特殊壺・特殊器台（特殊器台の最初期型式）が各地で出土している。この遺物が出土する遺跡は、吉備中枢地域が最も多く、出雲地方がこれに次ぐ。県南西部地域では倉敷市黒宮大塚遺跡・黒宮大塚北方[25]・立坂遺跡[26]、矢掛町芋岡山遺跡[27]、井原市高越遺跡・木之子長法寺[28]などが知られているが、さらに西の備後にも出土例があって、その数は吉備中枢と出雲に次いで多い。特殊器台という遺物が、吉備中枢の勢力と関わりの深い地域にもたらされたと推定するならば、この地域は吉備中枢にとって重要な位置付けがなされていたと考えられよう。その最大の理由は、後の山陽道が象徴するように、交通の要衝であったことが考えられる。吉備の中枢を担った楯築墳丘墓、雲山鳥打墳丘墓[29]などの有力首長は、瀬戸内海の水路や河川沿いの陸路を通じて各地との交流を展開していたものと考えられ、備後へと通じるこの地域の重要性も増していったものと思われる。ただし、立坂

型特殊器台は竹林寺山の北側（小田川流域）から出土していて、南側の地域に現れるのは次の向木見型（和田遺跡出土）からである。

竹林寺天文台遺跡は、後期前葉の頃までは小地域における短期間の集落だったかもしれないが、後期後葉になると交通の要衝を見渡す地域の主要な集落に発展したのであろう。

## 註

（１）第３・４図は、クーデ型太陽望遠鏡施設建設時に見つかり浅口市教育委員会が所有している遺物である。本報告に関連が深い遺物であるため、同教育委員会から許可を得てここに掲載した。

（２）河合忍氏の御教授による。

（３）岡山県教育委員会「神之脇遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』169　2002年

神之脇遺跡で検出した溝２は、比較的低い位置で見つかり、また底面が川原石を含む層であったため当時溝と判断した。しかし底面付近が比較的水平だったことと、その箇所に柱穴が見つかっている事実から、竪穴住居であった可能性が高いと考えている。

（４）岡山県教育委員会「段林遺跡・段林古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』132　1998年

岡山県教育委員会「道面遺跡・塚地古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』147　1999年

（５）岡山県教育委員会「山陽自動車道建設に伴う発掘調査２」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』42　1981年

（６）浅口市教育委員会「森山遺跡」『浅口市埋蔵文化財発掘調査報告』１　2008年

（７）2022年３月に刊行予定である。

（８）岡山県教育委員会『岡山県埋蔵文化財報告』34　2004年

（９）岡山県教育委員会『岡山県埋蔵文化財報告』36　2006年

(10) 浅口市教育委員会「竹林寺天文台遺跡２」『浅口市埋蔵文化財発掘調査報告』３　2016年

(11) a　浅口市教育委員会「竹林寺天文台遺跡」『浅口市埋蔵文化財発掘調査報告』２　2009年

b　註10文献

(12) 註11a文献

(13) 矢掛町教育委員会「清水谷遺跡」『矢掛町埋蔵文化財発掘調査報告』１　2001年

(14) 真備町教育委員会「蚊蜂遺跡」『真備町埋蔵文化財発掘調査報告』１　1999年

(15) 岡山県教育委員会「内平遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』22　1992年

岡山県教育委員会「内平遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』26　1996年

(16) 平井勝「岡山における弥生時代のムラとクニ－投馬国から吉備国へ－」『古代吉備』第21・23集　1999年・2001年

宇垣匡雅「吉備弥生社会の諸問題」『論争　吉備』考古学研究会岡山例会シンポジウム記録１　考古学研究会　1999年

重根弘和「岡山県南部の弥生時代集落遺跡」『環瀬戸内海の考古学』　古代吉備研究会　2002年

河合忍「吉備弥生社会の特質を考える–墓・集落の検討から–」『弥生墓が語る吉備』考古学研究会岡山例会シンポジウム記録９　考古学研究会　2013年

(17) 井原市教育委員会「高越遺跡」『井原市埋蔵文化財発掘調査報告』２　2004年

(18) 財団法人倉敷考古館「岡山県美星町五万原遺跡」『倉敷考古館研究集報』第５号　1968年

(19) 岡山県教育委員会「中池ノ内遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』108　1996年

(20) 真備町教育委員会『西山遺跡』　1979年

(21) 註17文献

(22) 財団法人倉敷考古館「岡山県矢掛町白江遺跡」『倉敷考古館研究集報』第１号　1966年

(23) 本遺跡に近く弥生後期後葉の時期になる段林遺跡は、一つの尾根上全てを発掘調査したが竪穴住居が１軒のみしか検出されなかった。その事実と比較して、本遺跡評価の根拠の１つとした。

(24) 楯築刊行会『楯築弥生墳丘墓の研究』　1992年

(25) 財団法人倉敷考古館「岡山県真備町黒宮大塚古墳」『倉敷考古館研究集報』第13号　1977年

(26) 総社市文化振興財団『新本立坂』　1996年

(27) 財団法人倉敷考古館「岡山県矢掛町芋岡山遺跡調査報告」『倉敷考古館研究集報』第３号　1967年

(28) 財団法人倉敷考古館「岡山県井原市木之子町長法寺出土の壺」『倉敷考古館研究集報』第３号　1967年

(29) 岡山県『岡山県史』第十八巻考古資料　岡山県史編纂委員会　1986年

# 岡山県における弥生時代の墳墓の列石について

氏　平　昭　則

## 1　はじめに

近藤義郎氏は『前方後円墳の時代』(1) で、吉備地域において弥生時代中期後半に集団墓地から特別に区画された一群の埋葬が現れ、さらに後期中－後葉になり盛土をもって墓域を画す弥生墳丘墓が出現、その諸要素が前方後円墳に継承されると説いた。外表施設については、弥生墳丘墓では「墳端に、あるいはそれに近く列石あるいは石垣状の石列を配していることが多」く、その配置は「周囲ぐるり」、「一辺あるいは相対する二辺だけ」、「二列（二段）」の場合があるとし、これを「霊域としての墳域を画する役割を持ったもの」と規定した。さらに、列石が「霊域区画＝隔絶の形式的徹底の産物」である古墳の葺石へ転化すると考えた。

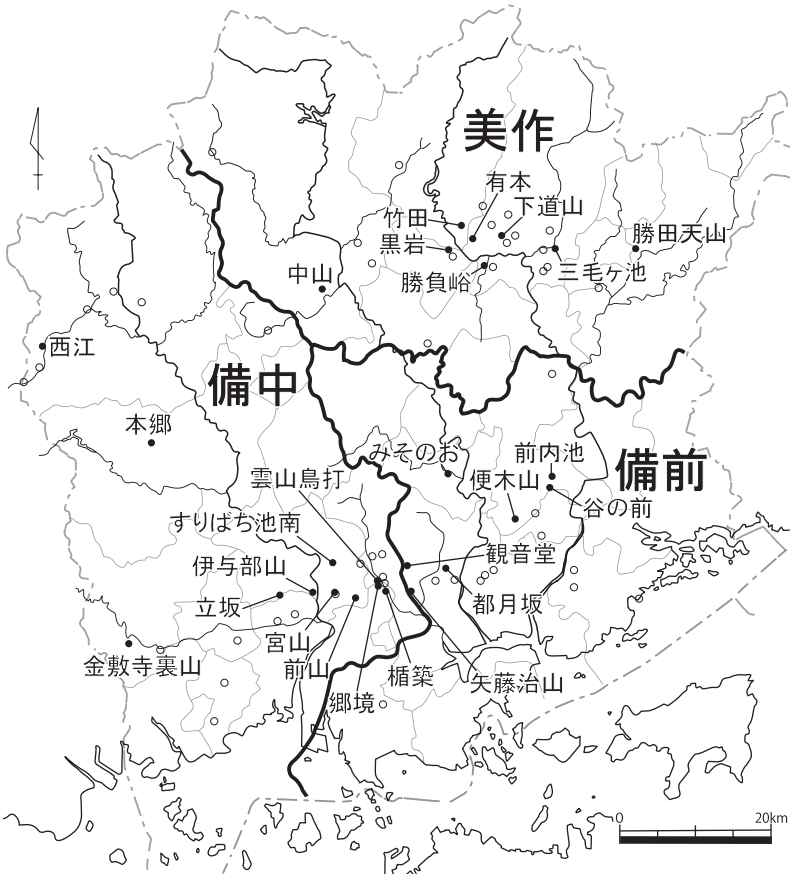
その後、記録保存調査などによって墳墓の発掘例は増加したが、岡山県下において弥生時代墳墓の外表施設について注目されることはあまりなかった。そうした中、宇垣匡雅氏は「吉備南部の弥生墳丘墓の斜面施設」(2) を著した。吉備南部の弥生墳丘墓に共通する要素として、墳丘外表の列石に注目し、斜面施設として墳丘肩部型列石と斜面下方型列石を提示した。弥生時代後期前半は墳丘肩部型列石のみが見られるが、後期後半に弥生墳丘墓の墳丘の大形化に伴って斜面下方型列石が出現する。垂直の石壁となること、石材の置き方が基本縦置き（石材の長軸を垂直方向にするもの）であることは共通で、この地域の墳墓に共通する要素と評価できる、とした。弥生時代墳墓の主要な外表施設として列石を取り上げ、その位置・時期変化とともに吉備南部という地域に限定して共通要素と規定した。

筆者は岡山市北区御津に所在したみそのお遺跡墳墓群の調査に参加し、弥生時代の墳墓で列石が重要な要素であると確信したが、爾来30年にわたり評価できないまま時を過ごしてしまった。本稿ではみそのお遺跡墳墓群の列石の特徴を各期ごとに抽出、共通点と相違点をまとめる。さらに岡山県内の類例と比較し、列石の変遷を追求したい。

なお、「列石」は主に弥生時代の墳墓に存在し、石材を直線あるいは弧状に配した外表施設である。これまで弥生時代墳墓の報告書や研究上で使用されてきた用語であり、今後の研究の進展で改める必要もあるかと思われるが、今回は宇垣論文同様この語を使用する。

## 2　みそのお墳墓群の列石

**各期の列石**　列石を持つ弥生時代の墳墓遺跡の代表例として、みそのお遺跡 (3) を取り上げる。みそのお遺跡




第１図　岡山県における弥生期中期～後期の墳墓（○）と列石を持つ墳墓（●）（1/1,000,000）

の墳墓群（以下、みそのお墳墓群）の特色は、南北に長い尾根上に弥生時代後期初頭から古墳時代前期まで切り合いをほとんど持たずに連綿と墳墓が築造され、弥生墳墓から古墳への変遷が１遺跡で完結していることである。区画墓として39基が認められ、そのうち列石は26基に存在する。報告書のまとめに基づいて表１を、代表的な区画墓の平面と列石を第２図に示した。まず、みそのお墳墓群における列石の実態を、みそのお報告書の編年および津寺遺跡などの土器編年[(4)]に基づき追っていきたい。

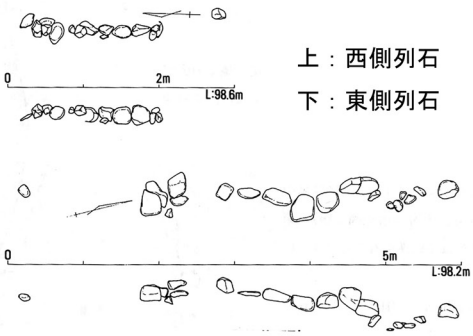
写真１　みそのお墳墓群の遠景（北西から）

みそのお墳墓群で列石を配する墳墓が出現するのは、弥・後・Ⅰ期でみそのお２期に当たる18号墳墓からである。弥・後・Ⅰ～Ⅱ期（みそのお３期）の16号墳墓では、第１～３主体の木棺墓からは遺物が出土せず、墳

表１　みそのお墳墓群の編年

| みそのお時期 | 1期 | 2期 | 3期 | | 4期 | | | 5期 | 6a期 | 6b期 | 6c期 | | 7期 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 土器編年（高橋護氏） | Ⅶ-a | Ⅶ-b | Ⅶ-c | Ⅶ-d | Ⅷ-a | Ⅷ-b | Ⅷ-c | Ⅷ-d | Ⅸ-a | Ⅸ-b | Ⅸ-c | Ⅹ-a | Ⅹ-b | Ⅹ-c |
| 県編年（津寺３など） | | 弥・後・Ⅰ | | 弥・後・Ⅱ | | | 弥・ | 後・Ⅲ | | 弥・後・Ⅳ | | | 古・前・Ⅰ | |
| 墳墓名 | 6～12号 | 18号 | 16・17号 | | 19・21～28号 | | | 29～32・47号 | 20・33～37・4号 | 40・41（1・2主体）・42号1次 | 38・39・41（3～9主体）・42号拡張 | | 5・43～46号 | |
| 列石の特徴 | 列石なし | 平面は尾根方向に平行・直交して直線、残存状況悪い　立面は地形に沿った形 | | | | | | 平面では尾根方向と異なる方向の列石出現　立面は石材間の隙間がなく並ぶ | | | | | 平面は尾根方向に平行・直交して直線、残存状況悪い | |
| 主体部数 | 70 | 27 | 34 | | 84 | | | 121 | 27 | 32 | | | 20 | |
| 棺形状 | 小口溝あり（側板で小口板を挟む） | → | | | | | | 小口溝あり（古層）、割竹形木棺（新相、短い） | 箱形木棺、割竹形木棺一部残る | 箱形木棺（側板で小口板を挟む） | | | 箱形木棺、割竹形木棺（長い） | |
| 棺内付属 | | | | | 赤色顔料（1基） | | | 赤色顔料・枕石 | → | | | | 赤色顔料・枕石、棺床・小口に石材 | |
| 出土土器（主体部上） | 高杯・取手付壺・甕 | → | | | 高杯・鉢 | | | 壺・高杯・直口壺 | 壺・直口壺・甕・器台・高杯・装飾高杯 | 特殊壺・甕・直口壺・台付直口壺・高杯・器台 | 壺・高杯 | | 高杯・小形器台 | |
| 出土土器（斜面・周溝） | | 壺・甕・高杯 | 甕・高杯 | | 甕・器台・装飾高杯・高杯 | | | 直口壺・壺・高杯 | 直口壺・甕・高杯 | 甕・高杯 | 直口壺・甕・高杯・器台 | | 壺・甕・高杯・小形坩・手焙形土器 | |
| 主体部内出土遺物・副葬品 | | 鉄鏃1（18号20主体） | 甕・土器棺（壺・甕・高杯） | | 土器棺（壺） | | | 管玉1・ガラス小玉1（47号20主体） | 鉄鏃1・ヤリガンナ1（35号1主体） | 管玉1（42号1主体）、管玉1・鉄剣1・刀子1（42号2主体） | 管玉1（38号1主体）、鉄剣1（38号6主体）、鉄鏃2（41号6主体）、鉄鏃1・ヤリガンナ1（42号4主体）、鉄剣1・鉄鏃2・ヤリガンナ1（42号5主体）、鉄鏃1（42号6主体） | | 管玉2・ガラス小玉3?・鉄斧1（43号1主体）、管玉1・刀子1（44号1主体）、ヤリガンナ1（44号2主体）、鉄斧1・鉄鏃2・刀子1（46号1主体）、ガラス小玉1・刀子1（46号2主体） | |
| 墳墓の特徴 | 尾根の加工、墳丘の存在 | 石敷きを上部に伴う主体部 | 主体部上土器少数、土器棺出現、多数 | | 古相が北側、新相が南側 | | | 大形（47号）と小形群、主体部から高杯が中心に出土 | 新規と尾根上に継続して造営、主体部数減少 | 主体部上に大量の土器 | 6a・b期に継続して増築 | | 増改築なし、別地点に移動 | |

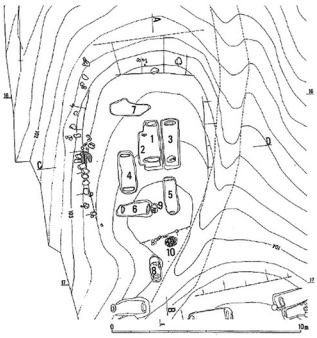
弥・後・Ⅰ～Ⅱ(みそのお３期)　16号

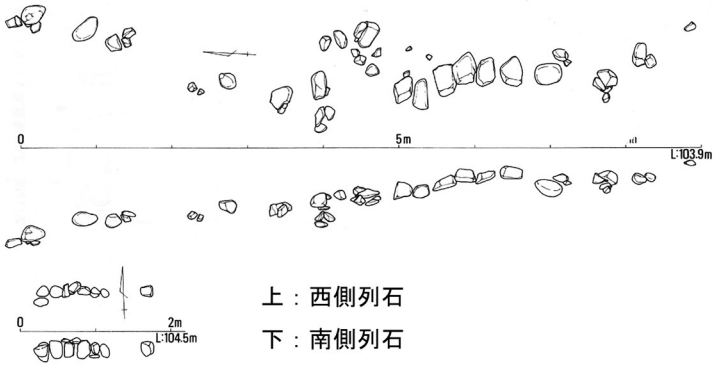



上：西側列石
下：東側列石

写真２　16号墳墓墳丘(南から)

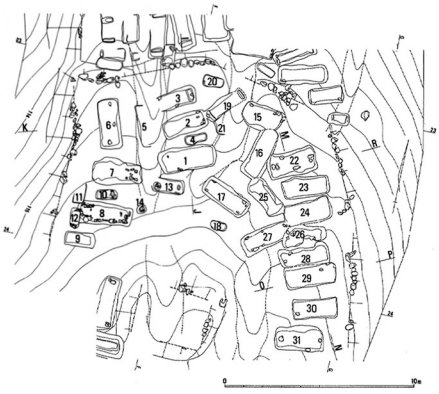
弥・後・Ⅱ～Ⅲ(みそのお４期)　23号

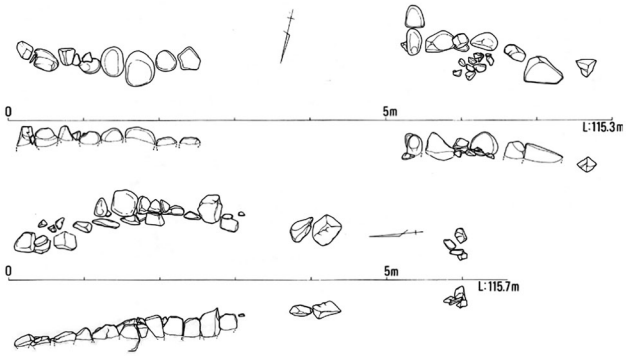





上：西側列石
下：南側列石

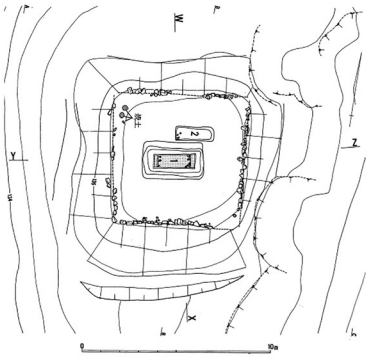
弥・後・Ⅲ(みそのお５期)　32号

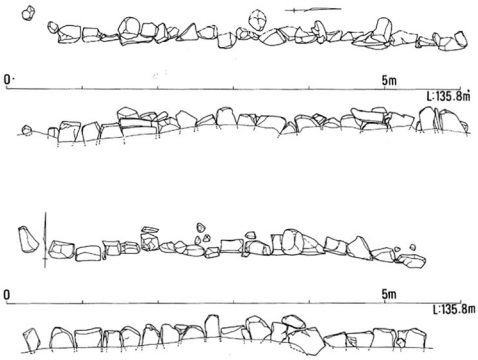





上：北側列石　　下：西側列石

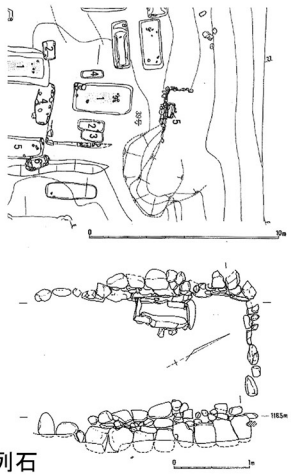
弥・後・Ⅳ～古・前・Ⅰ(みそのお６期)　４号






上：東側列石　　下：南側列石

39号



39号列石

第２図　みそのお墳墓群　時期別代表例(1/400)と列石平・立面(1/100)

写真３　みそのお４号墳墓　墳丘検出状況（南東から）

墓内外に土器棺８基が設けられるという特徴を持つ。列石は第１主体を中心にした長方形の範囲を囲み４周を巡る。東側列石の石材は主に30cm程度の平らな石材を用い、面の広い側が上を向くものが多い。西側は東側より小ぶりな20cm程度の大きさの石材で、面の広い側が墳丘の外側を向くものが多い。東側列石の検出状況は、列石の上部が墳丘外側へ傾いたもので、元来は面の広い側が外側を向き直立していたものと推測される。墳端と列石の比高差は、北側列石底部から墳丘北端までは高さ50cmを測るが、南側列石底部から南周溝底面までは10cm程度と少ない。

弥・後・Ⅱ～Ⅲ期（みそのお４期）の23号墳墓は、列石区画内に木棺墓７基と土器棺１基が配され、南側列石の外側にも木棺墓と土器棺が１基ずつ位置する。列石は山道に切られる東側を除いて３辺で確認された。西側列石の石材は40cm程度の平らな石材を用い、面の広い側が上を向くものが多い。墳丘の傾斜に沿って配置され、南側より北側が低くなる。南側列石は西側より小ぶりな20cm程度の大きさの石材を用い、面の広い側を墳丘外側へ向け直立して配置する。墳端と列石の比高差であるが、北側列石底部から墳丘北端までは高さ60cm、南側列石底部から南側墳端までは50cm程度と同じ程度の落差である。墳頂最高所と北側列石上部の比高差は60cmを測るが、周辺地形の観察から北側列石の上部に盛土がその高さまで存在した可能性は低い。

弥・後・Ⅲ期（みそのお５期）の32号墳墓は、当初の墓域は北側列石近くの木棺墓６基分だったが、南西・東側に４回程度拡張したとされる。北側・西側列石の石材は30～50cm程度の平らな石材を用い、面の広い側が墳丘外側を向いて直立するものが多い。東側列石は３辺に分かれ、いずれも石材の大きさ・配置は北側などと同じだが、１辺の長さが４ｍまでで、各辺の列石間には空間があり、平面の最終形は多角形状を呈する。３辺の列石の方向は、それぞれの西側に隣接する木棺墓群の長辺方向と直交するように見える。墳端と列石の比高差であるが、拡張部の東側列石底部から墳丘東端までは60cmで、西側石列底部と墳丘西端では30cmを測る。墳頂最高所と北側列石上部との比高差は40cmを測るが、西側石列とでは比高差はほとんどない。

弥・後・Ⅳ期（みそのお６ａ期）の４号墳墓は、墓坑が２基しかなく中心埋葬が卓越する。列石各辺の長さがほぼ同じで、囲まれた墳頂平坦面はほぼ正方形を呈する。石材間の抜けがあまりない状態で検出され、残存状況が良好である。列石を構成する石材は30～50cm程度の角礫で、面の広い側が墳丘外側を向く。墳端と列石の比高差であるが、北側列石底部から墳丘北端までは80cmで、南側石列底部と墳丘南端では40cmを測る。墳頂最高所と北・南側列石上部との比高差は10cmで、東・西側列石上部とでは比高差は25cmとなり、列石で囲まれる内側は見た目も平坦である。

みそのお６ｃ期の39号墳墓は37・38号墳墓を南東へ拡張する形で設けられた墓域で、列石は木棺墓群の東側をＬ字形に区切って作られている。この列石は、最下段に縦長の石材の広い面を墳丘の外側へ向けて直立させ１列に並べ、その上に石材を３段程度小口積みしたものである。この列石の東側には列石に接して長さ約80cmの箱式石棺が配置されるが、他に墓坑は存在しない。

古・前・Ⅰ期に当たるみそのお７期の43～45号墳墓の列石は、６期のものと比べ石材の大きさや並び方が不均等である。残存状況が悪く、墳丘が斜面部に立地するためかもしれない。みそのお８期（古・前・Ⅱ期）の13～15号墳墓では、列石は墳端に並び、傾斜もやや緩やかになる。最下段は大きさが均等なやや大きめの礫の平たい面を外側に向けて積み、その上に最下段より小ぶりの礫を積む６期と似た構築である。14・15号墳墓では墳丘が斜面下方の一部だけ２段築成になり、それに合わせて列石も２段に並ぶ。

**列石の特徴**　時期別の変化を要約する。弥・後・Ⅱ期までの列石は、平面形では尾根方向に平行・直交して直

## 表２　岡山県内の列石を有する墳墓一覧

| 遺跡番号 | 墳墓番号 | 名　　称 | 所在地 | 時期 | 種別 | 墓坑数 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 1 | みそのお５号墳墓 | 岡山市北区御津高津 | 弥後Ⅳ | 墳丘墓 | 2 | 中心埋葬から鉄器３、赤色顔料 |
| 1 | 2 | みそのお16号墳墓 | 岡山市北区御津高津 | 弥後Ⅰ～Ⅱ | 墳丘墓 | 13 | 墳丘内木棺墓4基・土器棺8基 |
| 1 | 3 | みそのお18号墳墓 | 岡山市北区御津高津 | 弥後Ⅰ | 墳丘墓 | 27 | 列石残存2m　中心部の木棺墓上に集石 |
| 1 | 4 | みそのお20号墳墓 | 岡山市北区御津高津 | 弥後Ⅳ | 墳丘墓 | 2 | 墓坑上に壺などからなる土器溜まり |
| 1 | 5 | みそのお23号墳墓 | 岡山市北区御津高津 | 弥後Ⅱ～Ⅲ | 墳丘墓 | 9 | 墳丘内木棺墓7基・土器棺1基 |
| 1 | 6 | みそのお24号墳墓 | 岡山市北区御津高津 | 弥後Ⅱ～Ⅲ | 墳丘墓 | 10 | 墳丘斜面などから装飾高杯・直口壺・器台 |
| 1 | 7 | みそのお27号墳墓 | 岡山市北区御津高津 | 弥後Ⅱ～Ⅲ | 墳丘墓 | 15 | 列石残存2m 墓坑上から装飾高杯など |
| 1 | 8 | みそのお29号墳墓 | 岡山市北区御津高津 | 弥後Ⅲ | 墳丘墓 | 19 | 列石の石材残存少ない、墳形不明瞭 |
| 1 | 9 | みそのお30号墳墓 | 岡山市北区御津高津 | 弥後Ⅲ | 墳丘墓 | 12 | １つの墓坑を「コ」状に囲む列石がある |
| 1 | 10 | みそのお31号墳墓 | 岡山市北区御津高津 | 弥後Ⅲ | 墳丘墓 | 21 | 南西部へ木棺墓6基分拡張 |
| 1 | 11 | みそのお32号墳墓 | 岡山市北区御津高津 | 弥後Ⅲ | 墳丘墓 | 14 | １回の拡張、後に東拡張部追加 |
| 1 | 12 | みそのお32号墳墓東拡張部 | 岡山市北区御津高津 | 弥後Ⅲ | 墳丘墓 | 17 | ３回の拡張、列石もそれぞれに伴う |
| 1 | 13 | みそのお33号墳墓 | 岡山市北区御津高津 | | 墳丘墓 | 0 | 墓坑未検出 |
| 1 | 14 | みそのお35号墳墓 | 岡山市北区御津高津 | 弥後Ⅳ | 墳丘墓 | 7 | 南へ１回拡張 |
| 1 | 15 | みそのお36号墳墓 | 岡山市北区御津高津 | 弥後Ⅳ | 墳丘墓 | 7 | 南へ１回拡張 |
| 1 | 16 | みそのお37号墳墓 | 岡山市北区御津高津 | 弥後Ⅳ | 墳丘墓 | 7 | 墳丘西・南側に周溝 |
| 1 | 17 | みそのお38号墳墓 | 岡山市北区御津高津 | 弥後Ⅳ～古前Ⅰ | 墳丘墓 | 6 | 墳丘を東に拡張、40号より新 |
| 1 | 18 | みそのお39号墳墓 | 岡山市北区御津高津 | 弥後Ⅳ～古前Ⅰ | 墳丘墓 | 5 | 37号東周溝を埋めて築造 |
| 1 | 19 | みそのお40号墳墓 | 岡山市北区御津高津 | 弥後Ⅳ～古前Ⅰ | 墳丘墓 | 2 | 東側墳端不明瞭　墓坑隅に柱穴 |
| 1 | 20 | みそのお41号墳墓 | 岡山市北区御津高津 | 弥後Ⅳ～古前Ⅰ | 墳丘墓 | 9 | 40号墳墓と連続するものか |
| 1 | 21 | みそのお42号墳墓 | 岡山市北区御津高津 | 弥後Ⅳ～古前Ⅰ | 墳丘墓 | 10 | 南へ３回拡張 |
| 1 | 22 | みそのお43号墳墓 | 岡山市北区御津高津 | 古前Ⅰ～Ⅱ | 墳丘墓 | 7 | 第1主体部から鉄斧1・玉類5 |
| 1 | 23 | みそのお44号墳墓 | 岡山市北区御津高津 | 古前Ⅰ～Ⅱ | 墳丘墓 | 5 | 第1主体部から刀子1・管玉1 |
| 1 | 24 | みそのお45号墳墓 | 岡山市北区御津高津 | 古前Ⅰ～Ⅱ | 墳丘墓 | 3 | 列石２辺残　土器少量 |
| 1 | 25 | みそのお47号墳墓 | 岡山市北区御津高津 | 弥後Ⅲ | 墳丘墓 | 38 | 第12・15・16・22・24・25・36主体部から朱 |
| 1 | 26 | みそのお4号墳墓 | 岡山市北区御津高津 | 弥後Ⅳ | 墳丘墓 | 2 | 列石４辺残存状況良好　第１主体赤色顔料 |
| 2 | 27 | 前内池遺跡シダガ鼻調査区中央区 | 赤磐市可真下 | 弥後Ⅰ～Ⅳ | 区画墓 | 85 | 列石は15m四方を囲むように配列　出入り口あり？　東辺列石下に柱穴列 |
| 3 | 28 | 谷の前遺跡墳丘墓 | 赤磐市可真上 | 弥後Ⅲ | 墳丘墓 | 6 | 列石３辺残　土坑墓５・土器棺墓1 |
| 4 | 29 | 便木山方形台状墓 | 赤磐市山陽 | 弥後Ⅳ | 墳丘墓 | 1 | 列石１辺残　墓坑数は未調査のため不明 |
| 5 | 30 | 都月坂2号弥生墳丘墓 | 岡山市北区津島本町 | 弥後Ⅳ | 墳丘墓 | 12 | 長辺２辺に最大４～５段の石垣状列石 |
| 6 | 31 | 観音堂弥生墳丘墓 | 岡山市北区辛川市場 | 弥後Ⅳ | 墳丘墓 | 3 | 列石2段、方形あるいは長方形の墳丘　埋葬3基、うち第一主体から管玉1・鉄剣1 |
| 7 | 32 | 矢藤治山弥生墳丘墓 | 岡山市北区東花尻 | 弥後Ⅳ | 墳丘墓 | 2 | 突出部前面、くびれ部、円丘部側面に葺石 |
| 8 | 33 | 雲山鳥打1号弥生墳丘墓 | 岡山市北区新庄下 | 弥後Ⅲ | 墳丘墓 | 3 | 列石は平面図より類推 |
| 8 | 34 | 雲山鳥打2号弥生墳丘墓 | 岡山市北区新庄下 | 弥後Ⅲ | 墳丘墓 | 3 | 墳端及び墳丘平坦面端に列石あり |
| 9 | 35 | 郷境２号墓 | 岡山市北区津寺 | 古前Ⅰ | 墳丘墓 | 1 | 方形、盛土厚0.5m、箱式木棺1、鉄剣出土 |
| 10 | 36 | 楯築弥生墳丘墓 | 倉敷市日畑 | 弥後Ⅲ | 墳丘墓 | 2 | 南西突出部先端に溝と弧を描く墳端列石　円丘部斜面に列石 |
| 11 | 37 | 女男岩遺跡 | 倉敷市庄新町 | 弥後Ⅳ | 無区画墓 | 4 | 溝状遺構にL字状列石 |
| 12 | 38 | 前山遺跡E群区画墓 | 総社市宿 | 弥後Ⅲ | 墳丘墓 | 1 | 周辺出土土器より時期決定 |
| 13 | 39 | すりばち池南墳墓群1号墳墓 | 総社市小寺 | 弥後Ⅳ | 墳丘墓 | 18 | 中心主体2.9×2.19m、赤色顔料　第4主体管玉1鉄剣1 |
| 14 | 40 | 宮山墳墓群墳丘墓 | 総社市三輪 | 弥後Ⅳ | 墳丘墓 | 10 | 後円部状円丘端とくびれ部に「葺石」 |
| 15 | 41 | 伊与部山弥生墳丘墓 | 総社市下原 | 弥後Ⅰ～Ⅳ | 墳丘墓 | 11 | 東側石垣状列石、南側屈折する２条列石の溝状構造 |

| 遺跡番号 | 墳墓番号 | 名　　称 | 所在地 | 時期 | 種別 | 墓坑数 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 16 | 42 | 新本立坂弥生墳丘墓 | 総社市新本 | 弥後Ⅲ | 墳丘墓 | 12 | 墳裾の一部に、板上の石を立て並べ、低い部分にはさらに小石を置いた列石 |
| 17 | 43 | 金敷寺裏山遺跡 | 井原市笹賀町 | 弥後Ⅲ | 墳丘墓 | 1 | 列石２段２条　平面図・写真あり |
| 18 | 44 | 本郷遺跡 | 高梁市宇治町本郷 | 弥後Ⅰ～Ⅳ | 墳丘墓 | | 列石1と土器群４か所検出 |
| 19 | 45 | 西江遺跡2号方形台状墓 | 新見市哲西町上神代 | 弥後Ⅲ | 墳丘墓 | 10 | 列石南北２辺、南側で最大３段を確認 |
| 20 | 46 | 中山遺跡A調査区第1区画 | 真庭市西河内 | 弥後Ⅳ | 墳丘墓 | 24 | 列石は北・西側に存在　北～西に溝、南に第2区画と共有する溝 |
| 20 | 47 | 中山遺跡A調査区第2区画 | 真庭市西河内 | 弥後Ⅳ | 墳丘墓 | 5 | 列石は写真より北・南側に存在か　南～東に溝、北に第1区画と共有する溝で構成 |
| 20 | 48 | 中山遺跡A調査区第3区画 | 真庭市西河内 | 弥後Ⅳ | 墳丘墓 | 17 | 第3・4区画は最終的に石列・溝を有した長方形のマウンドとなった、とされる |
| 20 | 49 | 中山遺跡A調査区第4区画 | 真庭市西河内 | 弥後Ⅳ | 墳丘墓 | 12 | 築造順序は南の第4区画から北の第3区画へ３段階が確認 |
| 20 | 50 | 中山遺跡C調査区集団墓 | 真庭市西河内 | 弥後Ⅳ | 無区画墓 | 73 | 列石は第1グループ1列、第2グループ1列、第4グループ2列あり |
| 21 | 51 | 黒岩遺跡方形台状墓1 | 津山市領家 | 弥後Ⅲ | 墳丘墓 | 34 | 溝１～４で区画される |
| 21 | 52 | 黒岩遺跡方形台状墓2 | 津山市領家 | 弥後Ⅲ | 墳丘墓 | 5 | 遺物は周溝出土 |
| 21 | 53 | 黒岩遺跡方形台状墓4 | 津山市領家 | 弥後Ⅲ | 墳丘墓 | 1 | 遺物は周溝出土 |
| 22 | 54 | 竹田８号弥生墳丘墓 | 苫田郡鏡野町竹田 | 弥後Ⅱ | 墳丘墓 | 16 | 土器棺4基(壺・甕)、高杯・鉢 |
| 23 | 55 | 有本遺跡Ｂ地区区画墓1 | 津山市下田邑 | 弥後Ⅲ～Ⅳ | 区画墓 | 29 | 平坦面列石1辺、溝２方向 |
| 24 | 56 | 有本遺跡Ｂ地区区画墓3 | 津山市下田邑 | 弥後Ⅲ～Ⅳ | 区画墓 | 13 | 土坑墓13基 |
| 25 | 57 | 勝負峪遺跡土坑墓群 | 津山市平福 | 弥中Ⅲ | 墳丘墓 | 20 | 列石は中Ⅱの段状遺構を切る |
| 26 | 58 | 下道山遺跡無区画墓 | 津山市総社 | 弥後Ⅰ～Ⅱ | 無区画墓 | 133 | 無区画墓の方に列石(写真のみ) |
| 27 | 59 | 三毛ヶ池１号上層墓 | 津山市河辺 | 弥後Ⅰ | 墳丘墓 | 6 | 墳丘に円礫２列からなる列石 |
| 28 | 60 | 勝田天山弥生墳丘墓 | 美作市河内・杉原 | 弥後Ⅱ | 墳丘墓 | | 現状保存のため埋葬主体未調査 |

線を呈し、立面では地形の傾斜に沿った形で配列される。このことは、墳丘は方形を志向するが築造に伴う原地形の削平は少ないためと考えられる。また、列石の上部が外面に倒れた状態で検出される例や、列石を構成する石材の一部が抜け落ちていると思われる例が多い。これらは、盛土の流出に伴い発生した現象と解釈できる。弥・後・Ⅲ期からでは、平面形では尾根方向に平行・直交して直線を呈するものに加え、尾根方向と異なる方向の列石が確認できる。立面では、石材が外面に広い面を向けて、石材間の隙間もなく並ぶことが多くなる。弥・後・Ⅱ期までの列石と比べ、残存状況が良好で、みそのお32号墳墓のように列石が墓域ごとに配置される例もあることから、地形の改変度と築成の度合いが高まり、墓域を平坦化してその端に列石を設置する段階へ進んだと考えられる。このことから、列石においては弥・後・Ⅱ期と後・Ⅲ期の間に画期を認められよう。

続いては、時期を通して共通する要素について述べてみたい。まず列石の平面位置であるが、列石で囲まれた内側は地形の傾斜が比較的緩やかで、外側は斜面あるいは溝で傾斜が急になる。また、内側には墓坑が掘削されることが多い。このことから、列石は墳墓における墳頂平坦面と埋葬領域の端を示すものと解釈できよう。図２の16・23・32・４号墳墓のように、この位置にある列石を「平坦面端列石」と呼ぶことにしたい。また、39号墳墓東側列石のように墳丘の端を表すものもあり、これを「墳端列石」と呼称したい。また、平面での列石の方向は、墓抗の長軸方向と並行・直交する。32号墳墓のように墓域を拡張する場合、その長軸方向に並行・直交する列石が構築される。このことから、列石は１つの墓域ごとに付与されると言えよう。

次に列石を構成する個々の石材に着目する。最下段になる石材は、墳丘外側から見通すと広い面を外側に向け、角度は垂直に近く、石材個々の方向を縦長になるよう設置する。さらに列の上の高さは同じ高さに揃える傾向が見て取れる。

## 3　その他の弥生時代墳墓の列石

岡山県内では、弥生時代中期から後期末まで約110か所の墳墓遺跡が存在し、区画墓（周溝墓・台状墓）104基、無区画墓61か所を数える。この中で列石が存在する60か所を今回の分析対象とした（表２）。

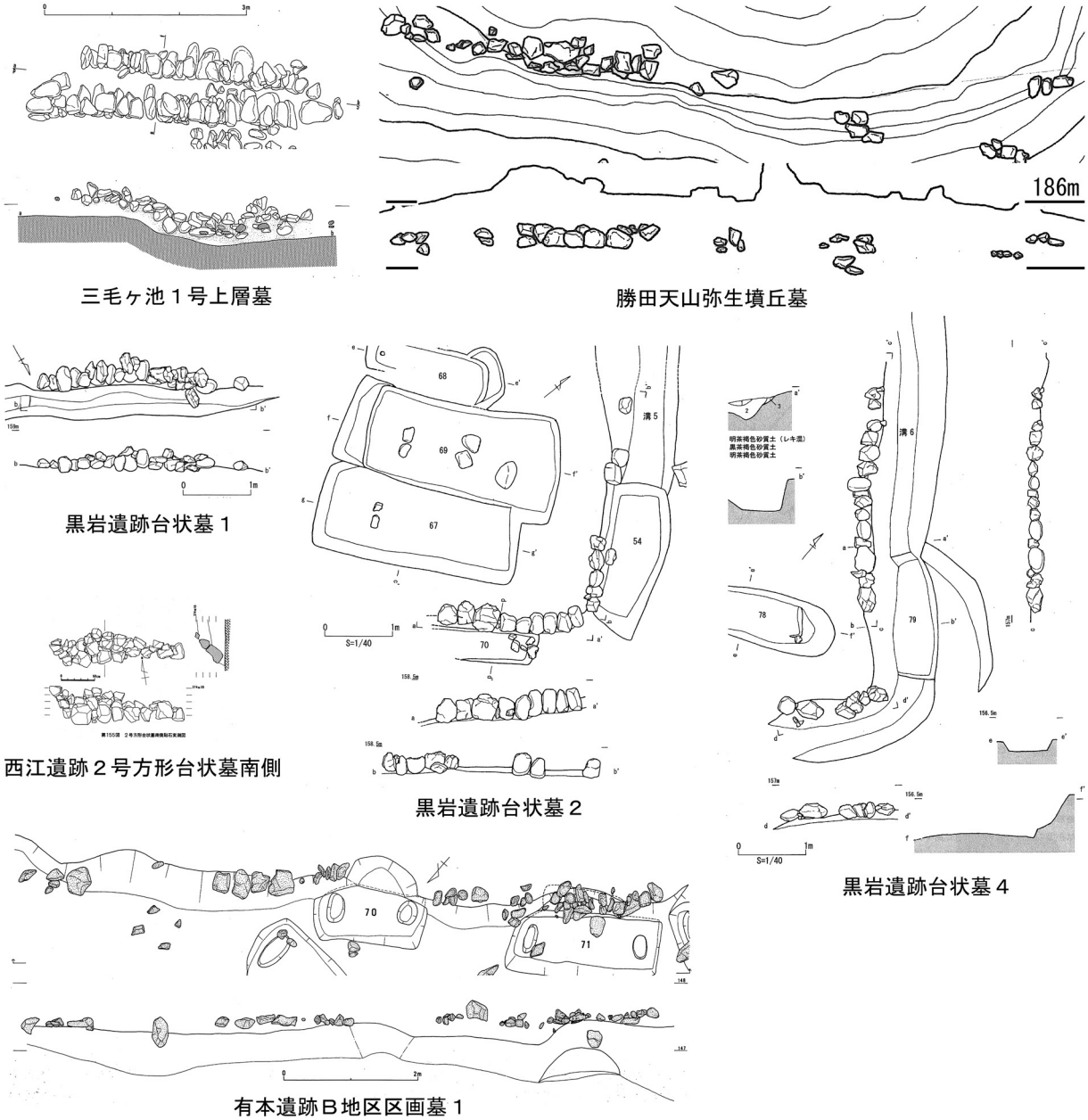
先に列石の墳丘上の位置を「平坦面端列石」と「墳端列石」に分けたが、平坦面端列石が44例の墳墓で、墳端列石が10例で存在した。そのうちみそのお墳墓群ではほとんどが平坦面端列石なので、これを除いても平坦面端20例、墳端９例である。このことから、平坦面端列石が多数を占めるといえる。

第３図　備中北部・美作地域の列石を持つ墳墓(1/400)

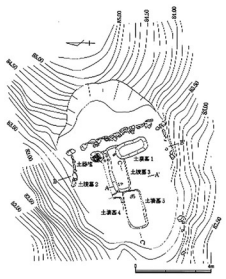
次に岡山県内における列石を持つ墳墓を時期別にみていくことにする。

まず列石の始まりであるが、現状では弥生中期末の可能性がある。津山市勝負峪遺跡の木棺墓群[5]に伴う列石は、20～50㎝大の角礫が散漫な分布で列をなしているもので、一部に２段以上に見える部分が残っていた。表土を含め周辺に石材が存在したので、複数段だった可能性もある。個々の石材は横長に並ぶものが多く、広い面は上を向いているが、墳丘の流失に伴い倒れたかどうかは不明である。木棺墓群との位置関係から、墳端列石の可能性が高い。

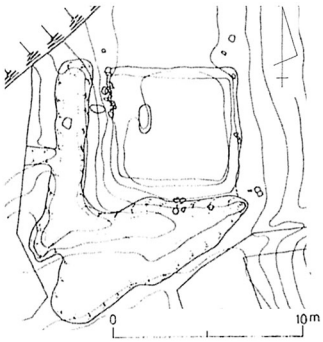
弥・後・Ⅰ～Ⅱ期の時期に入る墳墓は少数で、津山市下道山遺跡集団墓[6]・三毛ヶ池１号上層墓[7]（第３・４図）、鏡野町竹田８号弥生墳丘墓[8]（第３図）、美作市勝田天山弥生墳丘墓[9]（第３・４図）がある。三毛ヶ池１号上層墓は、木棺墓と関連しない場所に円礫を小口積みする列石が２列並ぶほか、貼石も見られるようだ。竹田８号弥生墳丘墓の南側列石は墳端部に位置し、最下



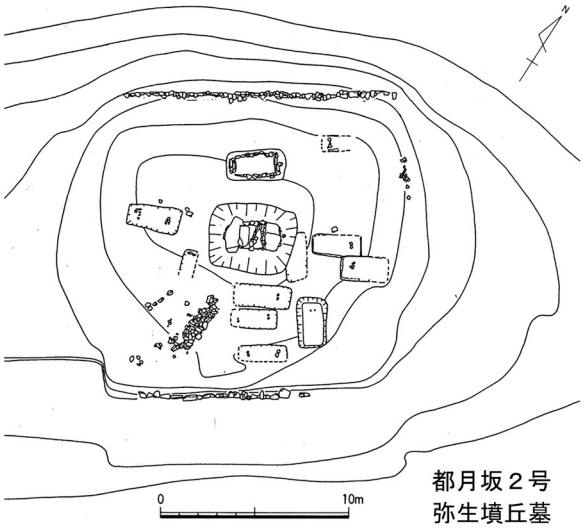

第４図　備中北部・美作地域の墳墓の列石(1/100)



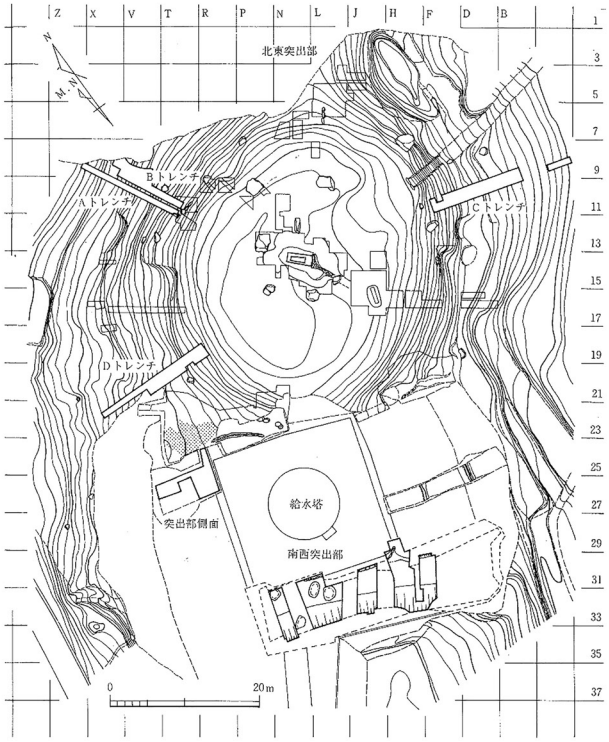
谷の前遺跡墳丘墓



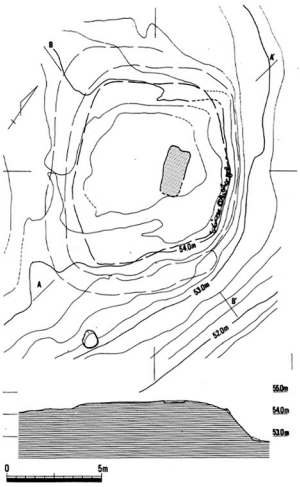

便木山方形台状墓



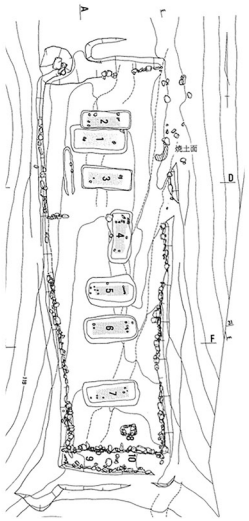

都月坂２号
弥生墳丘墓



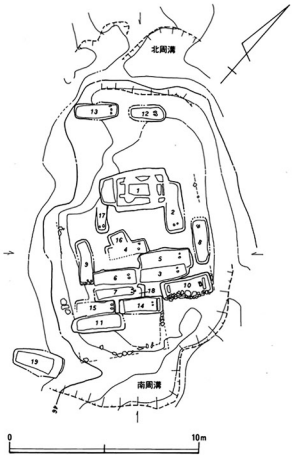

楯築弥生墳丘墓(1/1,000)



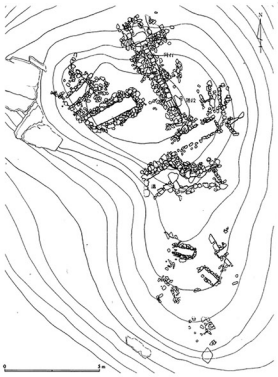

郷境２号墓



みそのお42号墓




すりばち池南1号墳墓



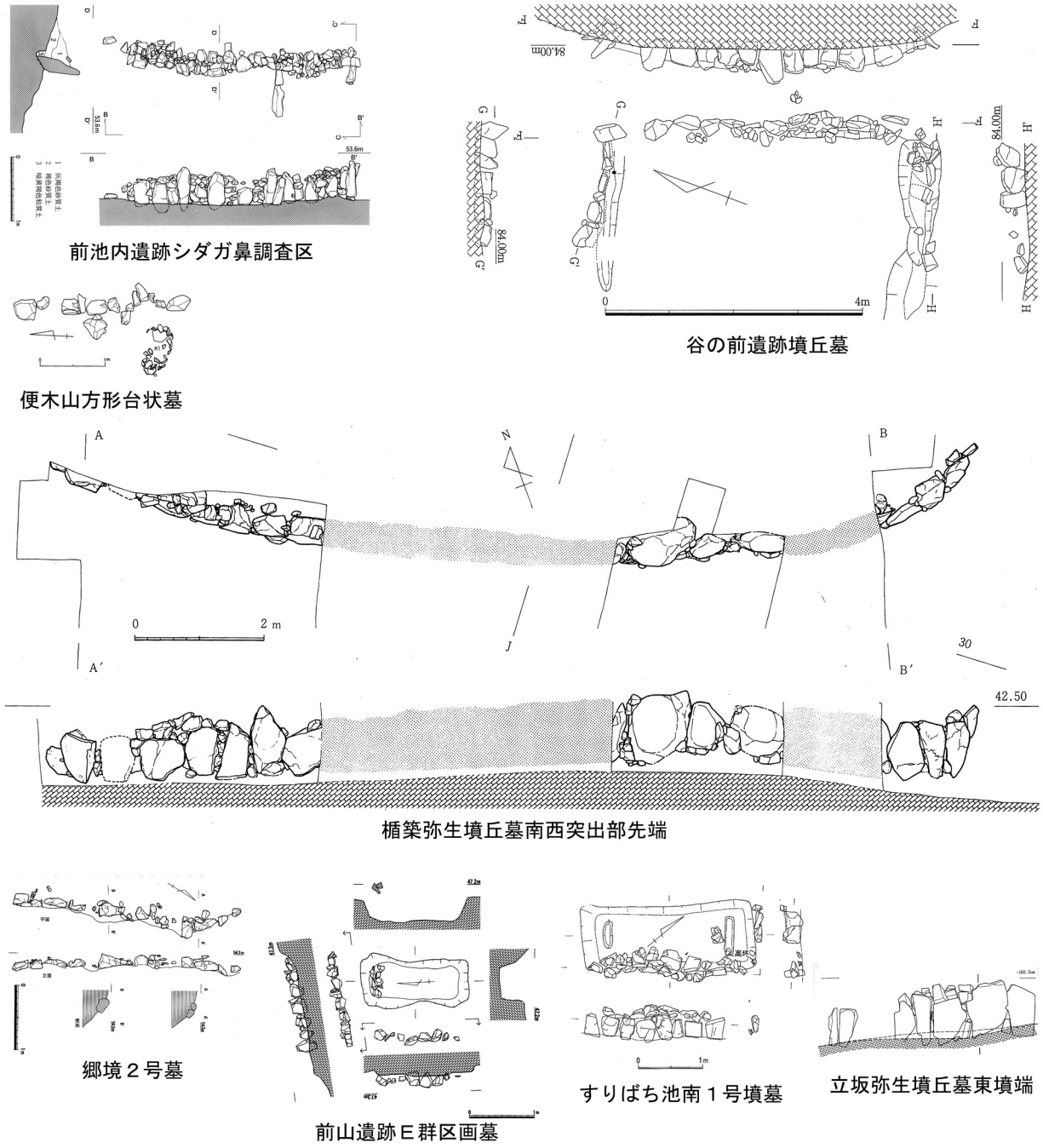
伊与部山弥生墳丘墓

立坂弥生墳丘墓

第５図　備前・備中南部地域の列石を持つ墳墓(楯築以外1/400)

段に円礫の広い面を外側に向けて直立して設置、その上に同じ大きさの円礫を２段程度小口積みしている。勝田天山弥生墳丘墓では、方形の墳丘の４周に列石と転石を確認し、転石が多いもののみそのお例と同様の築造と考えられる。この時期に該当する列石を持つ墳墓は主に美作地域に所在し、列石の位置や積み方、形状もそれぞれ異なっている。備中南部地域でいくつかこの時期に入る可能性がある墳墓が存在するが、列石周辺からの出土遺物が後・Ⅰ～Ⅱ期以降のものを含むため列石の構築時期を限定できなかった。

弥・後・Ⅲ期に入ると新見市西江遺跡２号方形台状墓[10]（第３・４図）、津山市有本遺跡Ｂ地区区画墓１[11]（第３・４図）、赤磐市谷の前遺跡墳丘墓[12]（第５・６図）、総社市新本立坂弥生墳丘墓[13]（第５・６図）・前山遺跡Ｅ群区画墓[14]（第６図）、倉敷市楯築弥生墳丘墓[15]（第５・６図）、などがある。谷の前・前山区画墓は平坦面




第６図　備前・備中南部地域の墳墓の列石(1/100)

端列石、立坂東墳端・楯築突出部先端は墳端列石の典型例であろう。これらの列石の平面・立面形は、規模の大小の差はあるがみそのお墳墓群の列石と類似している。例外としては西江２号方形台状墓例があり、墳端列石ではあるが角度が斜めになっている。この例については、遺跡の立地から備後地域との関連が考えられる。

弥・後・Ⅳ期は真庭市中山遺跡Ａ調査区第１～４区画[16]（第３図）、赤磐市便木山方形台状墓[17]（第５・６図）、岡山市都月坂２号弥生墳丘墓[18]（第５図）、総社市すりばち池南墳墓群１号墳墓[19]（第５・６図）などがある。構造が明確な例が少ないが、この時期も後・Ⅲと同様の構造の列石が作られている。

その後の列石はどのようなものだろうか。岡山市矢藤治山弥生墳丘墓[20]は、平面が前方後円形の墳墓である。くびれ部で検出したものは墳丘端基底部に縦長の石材を１列に並べてその上に３段の石材を積んだもので、みそのお15号墳墓のものと形態が似る。同じく平面前方後円形の総社市宮山墳墓群[21]の墳丘墓は、円礫をくびれ部など墳端付近に配しているが墳端列石に相当するものははっきりしない。これらを見る限り、区画墓と古墳の境界にある墳墓では外表施設に様々な形態が見られる。前期古墳の葺石を精査する必要があるが、少なくとも岡山県内では弥生時代後期の墳端列石が前期古墳の葺石基底部に転換した可能性は高いのではないだろうか。

## ４　まとめ

弥生時代後期の墳墓にみられる列石について、墳頂平坦面と埋葬領域の端を示すものを平坦面端列石、それ以外で墳端に位置するものを墳端列石と大きく２種類に分類して、みそのお墳墓群の変遷から岡山県内の類例を分析した。弥・後・Ⅱ期以前はみそのお16・23号墳墓のような平坦面端列石と竹田８号弥生墳丘墓のような墳端列石の両方が存在し、三毛ヶ池１号上層墓のような列石も見られるなど様々な形態の列石が作られた。弥・後・Ⅲ期の段階で平坦面端列石と墳端列石は墳墓の外表施設として定着、弥・後・Ⅳ期まで継続した状況も確認でき、みそのお墳墓群の変遷がほぼ県内全体に当てはまることが判明した。

これまでの検討から列石の意義について考えたことを述べてみたい。墳頂平坦面や墳端に列石を配することは、丘陵上の立地と相まって墳墓の範囲を視覚的に一目で認識させることとなった（写真２・３参照）。墳墓は造墓集団の構成員による共同作業の成果であり、造墓集団の紐帯を集団内の構成員はもとより、外部に対してもある程度の期間明示し続ける記念碑としての役割を果たしたと考えられる。列石は単に墳墓を構成する主要な要素であるだけでなく、記念碑という新たな価値の創造に一役買っていたのである。

最後ではあるが、先行研究の指摘について若干の評価をしてみたい。宇垣氏の墳丘肩部型列石と斜面下方型列石についてであるが、当論文の平坦面端列石が墳丘肩部型列石、墳端列石が斜面下方型列石に相当する。平坦面端列石は墳丘平坦面を、墳端列石は墳丘端部をそれぞれ明示するのが目的で構築されたと考え、それについては宇垣氏とほぼ同じ認識であるが、これまで見た例では両者の違いは位置であって時期差とは言いがたい。ともあれ、岡山県内の弥生時代後期の墳墓の共通要素であることは同意見である。

### 註

（１）近藤義郎『前方後円墳の時代』岩波書店　1983

（２）宇垣匡雅「吉備南部の弥生墳丘墓の斜面施設」『古代吉備』第25集　2013

（３）「みそのお遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』87　岡山県教育委員会　1993

（４）「津寺遺跡３」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』104　岡山県教育委員会　1996

（５）岡山県古代吉備文化財センターが一般国道53号（津山南道路）改築に伴い2020年に発掘調査を実施、現在本報告書を作成中である。

（６）「下道山遺跡緊急発掘調査概報」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』17　岡山県教育委員会　1977

（７）「三毛ヶ池遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第48集　津山市教育委員会　1993

（８）『竹田墳墓群』鏡野町教育委員会　1984

（９）「勝田天弥生山墳丘墓・河内遺跡」『美作市埋蔵文化財発掘調査報告』第５集　美作市教育委員会　2015

（10）「中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査10」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』20　岡山県教育委員会　1977

（11）「有本遺跡　男戸嶋古墳　上遠戸嶋遺跡」『津山市埋蔵文

化財発掘調査報告』第62集　津山市教育委員会　1998
(12)「土井遺跡　谷の前遺跡　慶運寺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』191　岡山県教育委員会　2005
(13)『新本立坂』総社市文化振興財団　1996
(14)「前山遺跡　鎌戸原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』115　岡山県教育委員会　1997
(15)『楯築弥生墳丘墓の研究』楯築刊行会　1992
(16)『中山遺跡』落合町教育委員会　1978
(17)「四辻土壙墓遺跡・四辻古墳群　他　方形台状墓発掘調査概報３編」『岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報』（３）　山陽団地埋蔵文化財発掘調査団　1973
(18)　近藤義郎「都月坂二号弥生墳丘墓」『岡山県史』第18巻考古資料　岡山県　1986
(19)「すりばち池南墳墓群」『総社市埋蔵文化財調査年報』７　総社市教育委員会　1997
(20)『矢藤治山弥生墳丘墓』矢藤治山弥生墳丘墓発掘調査団　1995
(21) 高橋 護　鎌木義昌　近藤義郎「宮山墳墓群」『岡山県史』第18巻考古資料　岡山県　1986

# 集落から出土する弥生～古墳時代の紡錘車について―岡山県の事例から―

團　　奈　歩

## 1　はじめに

紡錘車は植物繊維から糸を作るために欠かせない道具であるものの、県内の弥生～古墳時代の集落遺跡から出土する紡錘車の数はさほど多くなく、有機質の紡錘車の存在も想定されることから（文献58）、その実態については不明な部分が多い。

県内の弥生～古墳時代の集落遺跡から出土した紡錘車を概観したところ、出土状況や共伴遺物から、集落内での祭祀に用いられたと考えられるものが一定数存在することがわかった。仮器や祭祀具として位置付けられている紡錘車としては、古墳時代中～後期の鋸歯文を施す滑石製紡錘車があり（文献44・51・55）、県内の古墳出土例については、すでに整理が行われている（文献51）。そこで本稿では、弥生時代～古墳時代にかけての集落遺跡の遺構から出土する紡錘車を整理し、その性格について考えたいと思う。

なお、紡錘車は紡輪と紡茎からなるが、木製の紡茎は土中で失われ、紡輪のみが出土する。このため、紡輪を指して「紡錘車」と呼ぶことが一般的であることから、ここでもそれに倣いたい。

## 2　分析対象と各部名称

### 分析対象

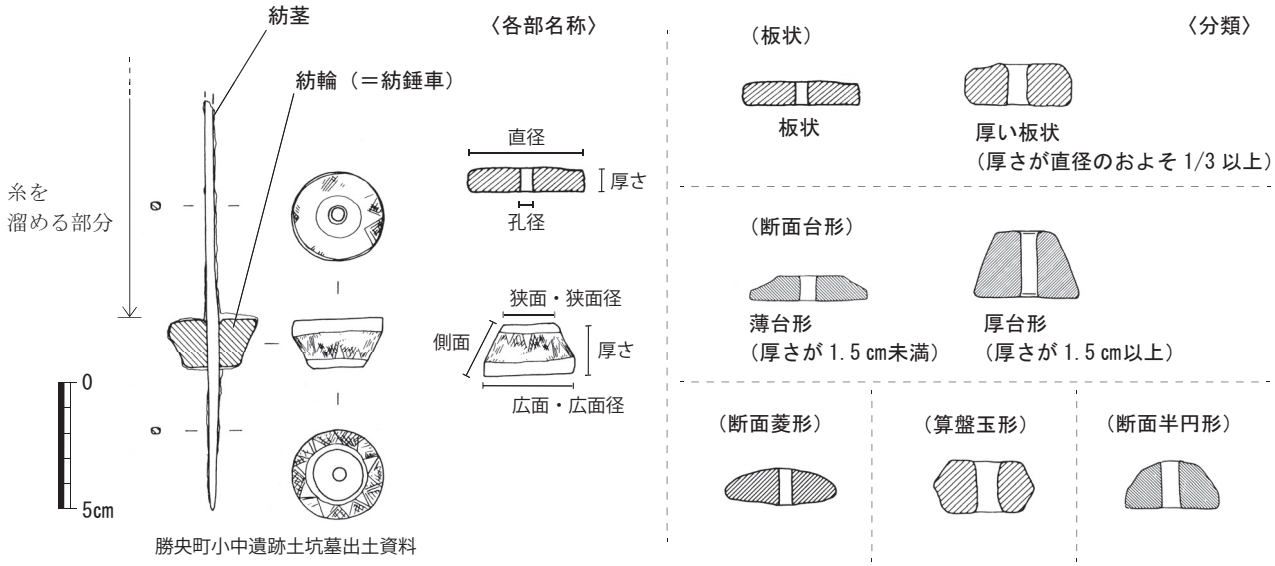
本稿で取り扱うのは、石製・土製・陶製・鉄製で[1]、平面形が正円を呈し、中央に直径0.5～0.9㎝の孔を持つ紡錘車である[2]。弥生～古墳時代前期には土器片転用有孔円板が出土する。このうち、円形に成形し、中央の孔が円筒形を呈するものは、紡錘車の可能性があるとされている（文献59）が、薄手の土器片を利用したものは判別が難しく、また出土状況の検討も必要であると考えたことから、本稿では専用に作られた紡錘車のみを扱う。

### 分類

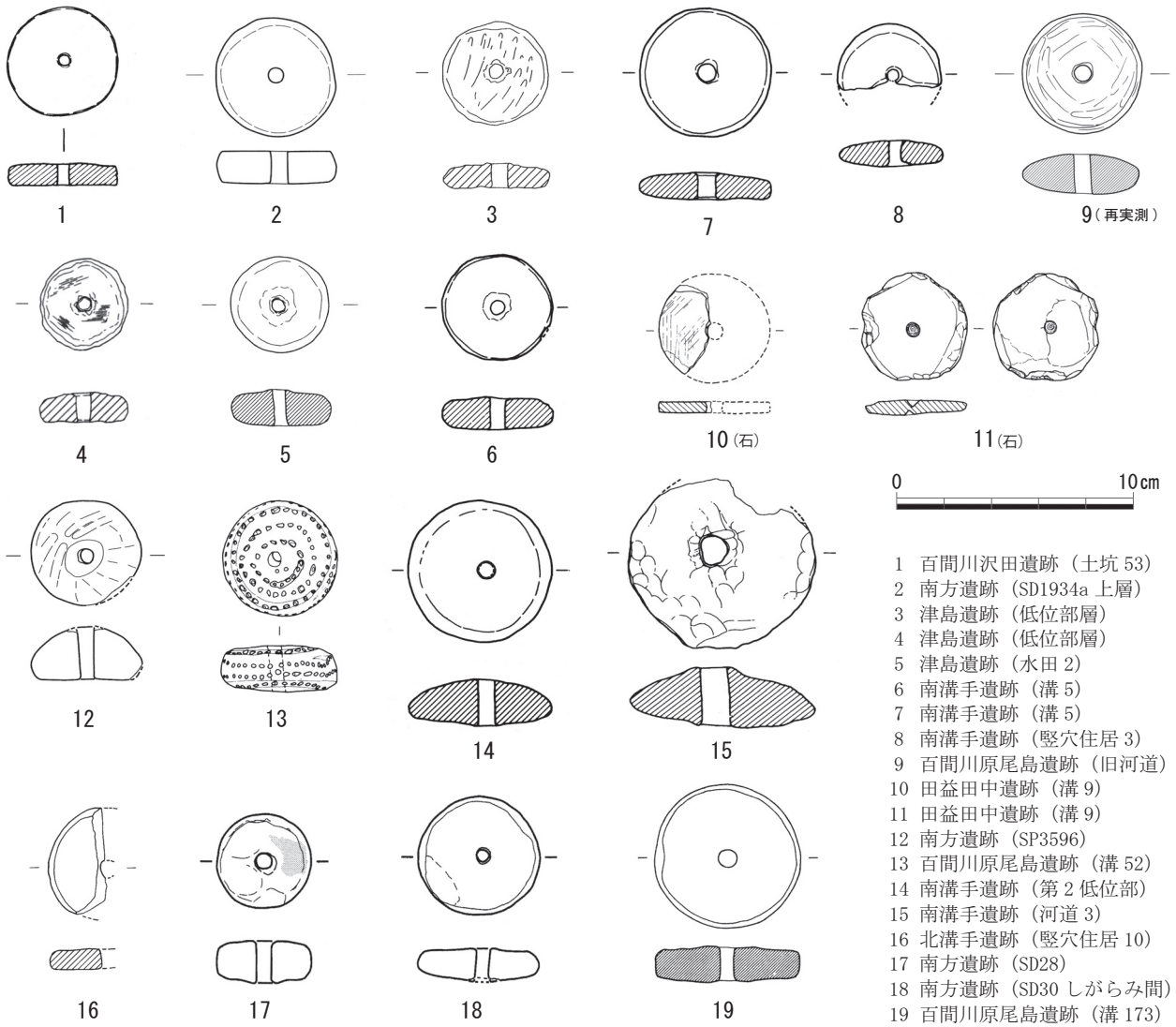
板状（厚さが直径のおよそ１/３以上のものを厚い板状とする）、断面菱形、算盤玉形、断面台形（薄台形：厚さ1.5㎝未満、厚台形：厚さ1.5㎝以上）、断面半円形と大きく５つに分類した。

### 各部名称

断面台形を呈する紡錘車は、施文などを考慮し、上部がすぼまる形に図示されることが多い。しかし、撚りをかけ終わった糸を巻き取る際には、すぼまる側を下に向けて使用されることから（第１図）、上・下を用いるこ




第１図　各部名称と分類




1　百間川沢田遺跡（土坑 53）
2　南方遺跡（SD1934a 上層）
3　津島遺跡（低位部層）
4　津島遺跡（低位部層）
5　津島遺跡（水田 2）
6　南溝手遺跡（溝 5）
7　南溝手遺跡（溝 5）
8　南溝手遺跡（竪穴住居 3）
9　百間川原尾島遺跡（旧河道）
10　田益田中遺跡（溝 9）
11　田益田中遺跡（溝 9）
12　南方遺跡（SP3596）
13　百間川原尾島遺跡（溝 52）
14　南溝手遺跡（第 2 低位部）
15　南溝手遺跡（河道 3）
16　北溝手遺跡（竪穴住居 10）
17　南方遺跡（SD28）
18　南方遺跡（SD30 しがらみ間）
19　百間川原尾島遺跡（溝 173）

第２図　１・２期の紡錘車（1/3）

とを避け、糸を溜める側を広面、すぼまる側を狭面と表記する。また、その他の形状の紡錘車における直径は、最大径を指す。

## ３　弥生時代の紡錘車の様相

### １期（弥生時代前期）

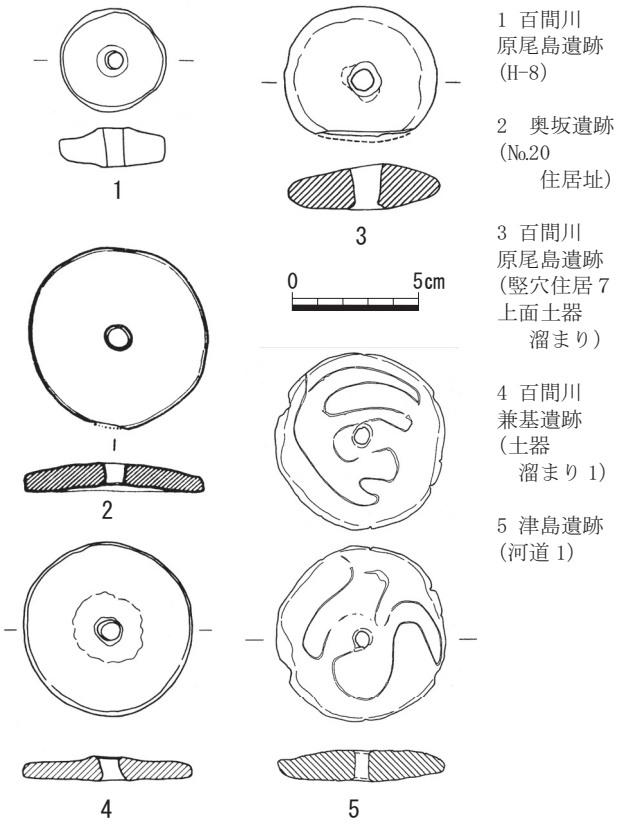
弥生時代前期の紡錘車は６遺跡16点あり、中期前葉にまたがる溝や低位部などから出土したものも加えると25点ある。最も古い時期の紡錘車は、前期前葉～中葉の土器と共伴する総社市南溝手遺跡出土例（第２図６・７）である。材質は、土製が多いが石製もある。形状は、板状のもの（第２図１～７・13）と、断面菱形を呈するもの（第２図８・９・14・15）がある。直径にはばらつきが見られ、調整はナデのみが多いが、ミガキを施す第２図３・９や、刺突文を施す第２図13もある。また、第２図15のように、成形時の指オサエが明瞭で直径7.9㎝、重量が100ｇを越えるものは、別の用途も想定される（文献44）。こうした土製紡錘車のうち、竪穴住居からの出土は南溝手遺跡の１点（第２図８）のみであり、半ばを欠損している。これに対し、溝・旧河道・低位部などからは完形で出土するものが多い。石製品のうち、時期の明瞭なものは岡山市田益田中遺跡の２点（第２図10・11）にすぎない。しかし、表１に挙げた他の４点は、いずれも板状で、直径は4.6～5.5㎝、厚さは土製のものと比べて薄く0.5～0.9㎝を測る。前期の土器が共伴することや、中・後期に石製の紡錘車が見られないことなどから、前期の可能性が考えられる。石材は砂岩、頁岩、黒色片岩、結晶片岩、流紋岩など様々である。

２期（弥生時代中期）

土製のみで、出土量は減少する。４遺跡６点あり、竪穴住居から１点、溝から５点出土している。形状は板状で、直径は４～５㎝前半に収まるものと、６㎝大のものがある。調整はナデのみで、一部に指オサエが残る。竪穴住居からの出土は、総社市北溝手遺跡竪穴住居10出土例（第２図16）のみであり、１期同様に欠損した状態で出土している。完形のものは、溝から出土した４点がある。岡山市南方（国体開発）遺跡では、中期中葉の河道に設けられたしがらみ１・２間の深みから出土した第２図18が、装飾性の高い把手状の土器や分銅形土製品などの特殊な遺物と共伴して出土している（第４図）。岡山市百間川原尾島遺跡溝173出土例（第２図19）は、中期の井堰が設けられた溝の下層から出土した。他と比べて大きく、丁寧に仕上げられている。

３期（弥生時代後期）

土製のみで、出土量は依然として少なく、共伴遺物から時期が明らかなものは４遺跡６点にとどまる。形状は薄い板状を呈するものと、中央部が厚く断面菱形を呈するものがあり、成形や調整などは様々である。直径は4.2㎝が１点、5.9～7.4㎝が５点あり、１・２期と比して大型のものが多い。出土遺構は、竪穴住居３点、土器溜まり２点、河道１点で、１点を除き完形で出土している。竪穴住居から出土したもののうち、百間川原尾島遺跡H-８出土例（第３図１）は小型で厚い板状を呈するのに対し、岡山市奥坂遺跡№20住居址出土例（第３図２）は大型で板状を呈し丁寧に成形される。２点がまとまって出土し、うち１点は完形である。いずれも共伴遺物に特記すべきものは見られない。土器溜まり出土例のうち、百間川原尾島遺跡竪穴住居７上面土器溜まりから出土した第３図３は断面菱形を呈し、成形時の指オサエが明瞭に残り、側縁部にひび割れが見られるなど全体の仕上げが粗い。淡路型甕や畿内系の土器が共伴する。また、岡山市百間川兼基遺跡土器溜まり１から出土した第３図４は、胎土が精緻で、表面をナデ調整で平滑に仕上げ、厚さも均一であるなど、丁寧な作りである。土器溜まり１は、樽形の装飾壺や装飾器台、人形土製品などが出土している土器溜まり３・４（第４図・文献23）と一連の遺構とされている。岡山市津島遺跡河道１出土例（第３図５）は、断面は薄い板状を呈し、成形時の指オサエが残るなど端部の作りに粗さが見られる一方で、両面に抽象的な弧状の線刻を有する。河道１から出土した多量の建築部材の一部は、祭殿に用いられた可能性も指摘されている（文献61）。また、胎土中に籾などを混和した特殊な壺と特殊な器台、弧帯文をあしらった装飾板や赤彩が施された木製盾、卜骨や骨鏃、人物を描いた絵画土器の他、2000点を超える桃核などが出土している（第４図）。このように３期の紡錘車は、その出土状況に特異性が見られる。



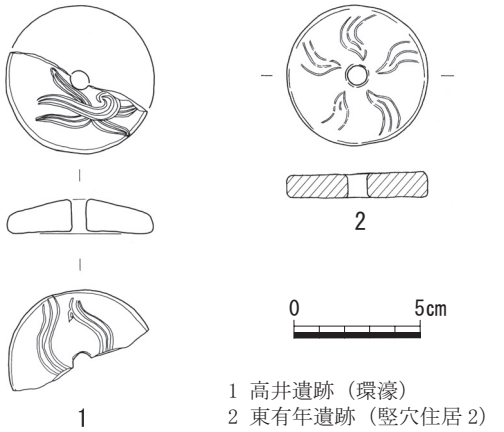

第３図　３期の紡錘車（1/3）

## ４　弥生時代の紡錘車の特徴

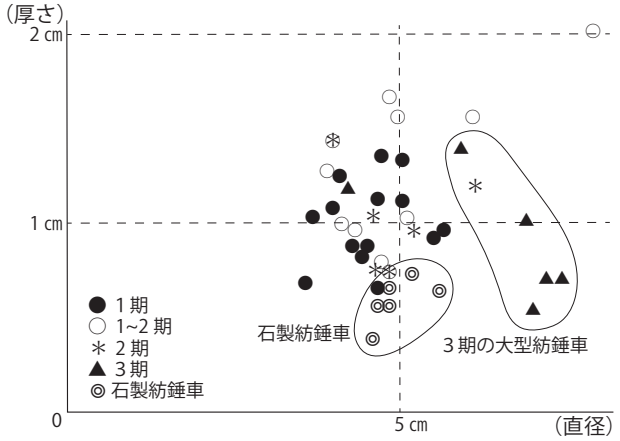
１期には、土製と石製の紡錘車が一定量見られるが、溝や低位部などからの出土が多い。溝や低位部からは完形品が出土することは多いが、その出土状況や共伴遺物に特異性は見られない。しかし、竪穴住居と土坑からの出土品が大きく欠損していることから、1期の紡錘車は日常に使用されていた可能性が考えられる。２期になると、百間川原尾島遺跡溝173や南方（国体開発）遺跡しがらみ間のように井堰に関連する遺構から完形の紡錘車が出土する例や、南方（国体開発）遺跡のように特殊な

第４図　１・２期の紡錘車と共伴する祭祀具

遺物と共伴する例が見られるようになる。３期になると、大型の紡錘車が集落でのマツリの道具立ての一つとして用いられたことが端的に示される出土状況を呈し、２期以降、集落内でのマツリに用いられる傾向が看て取れる。３期の紡錘車のうち大型のものは成形や調整などが様々であり、百間川兼基遺跡の土器溜まりから出土した人形土製品や樽形の装飾壺、津島遺跡の河道から出土した特殊な器台と特殊な壺などと同様に、各集落でのマツリのために作られた専用品であったことを示唆している。県内ではこの期の木製紡錘車の出土はないが、鳥取県鳥取市青谷上寺地遺跡から出土した中期後葉～後期の木製紡錘車は薄い板状を呈し、直径5.0～8.4cmと大型のものも見られる（文献48・49）。比重の関係から、木製の紡錘車は土製の紡錘車よりも大きいことが指摘されており




第５図　線刻を有する紡錘車の類例（1/3）




第６図　弥生時代の紡錘車の規格

（文献57）３期の大型紡錘車がこうした木製紡錘車を模したものであるならば、土製品は祭祀具として、木製品は日常品として作られたとも考えられる。

また、津島遺跡河道１出土例のような線刻を有する紡錘車の類例として、愛知県豊橋市高井遺跡の後期後半の環濠出土例（第５図１・文献52)、兵庫県赤穂市東有年遺跡の後期中葉の直径12mを測る竪穴住居２出土例（第５図２･文献１）が挙げられる。高井遺跡例では両面に、東有年遺跡例では片面に線刻が見られるが、いずれも龍と考えられている（文献56)。こうした特殊な紡錘車は各地で見られるようである。

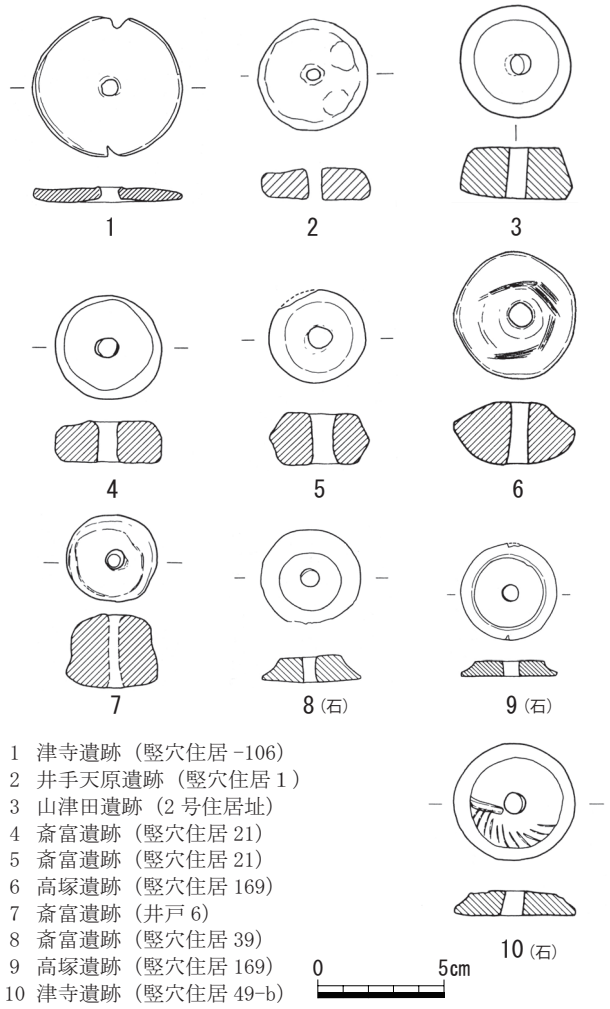
## 5　古墳時代の紡錘車の様相

### ４期（古墳時代前期）

土製のみで出土量は少なく、３遺跡３点の出土をみる（第７図１～３)。形状はいずれも板状を呈するが、３期

表１　岡山県から出土した弥生時代の主な紡錘車

| 図 | 番号 | 遺跡名 | 遺構名 | 遺物番号 | 材質 | 残存状況 | 形状 | 直径 | 厚さ | 重さ | 孔径 | 時期 | 文献 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 2 | 1 | 百間川沢田遺跡 | 土壙-53 | 14 | 土 | 完形か | 板状 | 4.8 | 0.8 | 40.1 | 0.6 | 前期中葉 | 10 |
| 2 | 2 | 南方遺跡 | SD1934a上層 | 0813 | 土 | 完形 | 板状 | 5.0 | 1.4 | 42.6 | 0.6 | 前期中葉 | 42 |
| 2 | 3 | 津島遺跡 | 低位部層 | C4 | 土 | 完形 | 板状 | 4.5 | 1.1 | 24.6 | 0.7 | 前期 | 36 |
| 2 | 4 | 津島遺跡 | 低位部層 | C5 | 土 | 完形 | 板状 | 3.7 | 1.3 | 20.0 | 0.6 | 前期 | 36 |
| 2 | 5 | 津島遺跡 | 水田2 | C1 | 土 | 完形 | 板状 | 4.1 | 1.6 | 29.8 | 0.5 | 前期 | 34 |
| 2 | 6 | 南溝手遺跡 | 溝5 | C48 | 土 | 完形 | 板状 | 4.7 | 1.4 | 30.5 | 0.6 | 前期前～中葉 | 18 |
| 2 | 7 | 南溝手遺跡 | 溝5 | C49 | 土 | 完形 | 板状 | 5.5 | 1.2 | 34.8 | 0.7 | 前期前～中葉 | 18 |
| 2 | 8 | 南溝手遺跡 | 竪穴住居3 | C18 | 土 | 欠損 | 断面菱形 | 4.3 | 1.1 | (11.8) | 0.6 | 前期前～中葉 | 18 |
| 2 | 9 | 百間川原尾島遺跡 | 旧河道 | C2 | 土 | 完形 | 断面菱形 | 5.0 | 1.7 | 42.2 | 0.7 | 前期 | 35 |
| 2 | 10 | 田益田中遺跡 | 溝9 | S95 | 流紋岩 | 欠損 | 板状 | (4.6) | 0.5 | (6.9) | (0.6) | 前期中～後葉 | 29 |
| 2 | 11 | 田益田中遺跡 | 溝9 | S96 | 流紋岩 | 未成品 | 板状 | 4.7 | 0.7 | 19.4 | (0.6) | 前期中～後葉 | 29 |
| | | 百間川沢田遺跡 | 土壙-46 | 13 | 土 | 欠損 | 板状 | (4.5) | 1.1 | (13.7) | (0.6) | 前期中葉 | 10 |
| | | 津島遺跡 | 低位部層 | C1 | 土 | 完形 | 板状 | 4.7 | 1.7 | 43.3 | 0.7 | 前期 | 36 |
| | | 津島遺跡 | 低位部層 | C3 | 土 | 完形 | 板状 | 4.0 | 1.4 | 22.8 | 0.7 | 前期 | 36 |
| | | 田益田中遺跡 | 土壙38 | C2 | 土 | 欠損(残1/2) | 板状 | (3.6) | 0.9 | (5.6) | (0.7) | 前期中葉 | 29 |
| | | 南溝手遺跡 | 溝6 | C50 | 土 | 完形 | 板状 | 5.6 | 1.2 | 39.2 | 0.7 | 前期前～中葉 | 18 |
| 2 | 12 | 南方遺跡 | SP3596（土壙） | 0643 | 土 | 完形 | 断面半円形 | 4.5 | 2.1 | 45.1 | 0.6 | 前期後葉～中期中葉 | 42 |
| 2 | 13 | 百間川原尾島遺跡 | 溝52 | C43 | 土 | 完形 | 板状 | 5.0 | 2.0 | 58.1 | 0.7 | 前期後葉～中期前葉 | 21 |
| 2 | 14 | 南溝手遺跡 | 第2低位部 | C68 | 土 | 完形 | 断面菱形 | 6.1 | 2.0 | 66.5 | 0.7 | 前期～中期前葉 | 18 |
| 2 | 15 | 南溝手遺跡 | 河道3 | C129 | 土 | 完形 | 断面菱形 | 7.9 | 2.5 | 118.9 | 0.9 | 前期後葉～中期前葉 | 22 |
| | | 南溝手遺跡 | 溝148 | C128 | 土 | 完形 | 板状 | 4.1 | 1.2 | 23.7 | 0.6 | 前期後葉～中期前葉 | 22 |
| | | 百間川原尾島遺跡 | 溝12 | C5 | 土 | 完形 | 板状 | 4.3 | 1.2 | 26.8 | 0.7 | 前期後葉～中期前葉 | 41 |
| | | 百間川原尾島遺跡 | 溝127 | C109 | 土 | 完形 | 板状 | 4.7 | 1.0 | 28.4 | 0.6 | 前期後葉～中期 | 16 |
| | | 南溝手遺跡 | 溝4 | C43 | 土 | 欠損 | 断面菱形 | (3.9) | 1.6 | (12.7) | 0.7 | 前期中葉～中期前葉 | 18 |
| | | 南溝手遺跡 | 溝4 | C47 | 土 | ほぼ完形 | 板状 | 5.1 | 1.3 | 33.0 | 0.7 | 前期中葉～中期前葉 | 18 |
| 2 | 16 | 北溝手遺跡 | 竪穴住居10 | C9 | 土 | 欠損(残1/2) | 板状 | (4.8) | 0.9 | (10.6) | (0.6) | 中期中葉 | 40 |
| 2 | 17 | 南方(国体開発)遺跡 | SD28 | 150 | 土 | ほぼ完形 | 厚い板状 | 4.0 | 1.6 | 30.4 | 0.6 | 中期前～中葉 | 43 |
| 2 | | 南方(国体開発)遺跡 | SD30 | 357 | 土 | 完形 | 厚い板状 | 4.6 | 1.6 | 44.3 | 0.5 | 中期 | 43 |
| 2 | 18 | 南方(国体開発)遺跡 | SD30<br>しがらみ間深場 | 348 | 土 | ほぼ完形 | 板状 | 5.0 | 1.3 | 38.9 | 0.6 | 中期中葉 | 43 |
| 2 | 19 | 百間川原尾島遺跡 | 溝173 | 166 | 土 | ほぼ完形 | 板状 | 6.1 | 1.5 | 67.8 | 0.7 | 中期か | 9 |
| | | 雄町遺跡 | O-4　溝 | 12 | 土 | 欠損(残1/2) | 板状 | 4.6 | 0.9 | (13.2) | (0.7) | 中期 | 2 |
| 3 | 1 | 百間川原尾島遺跡 | H-8 | 1 | 土 | 完形 | 厚い板状 | 4.2 | 1.5 | 24.7 | 0.7 | 後期前半 | 7 |
| 3 | 2 | 奥坂遺跡 | №20住居址 | 3 | 土 | ほぼ完形 | 板状 | 7.2 | 0.9 | 47.5 | 0.9 | 後期後半 | 8 |
| | | 奥坂遺跡 | №20住居址 | 4 | 土 | 一部欠損 | 板状 | 7.4 | 0.9 | (36.0) | 0.9 | 後期後半 | 8 |
| 3 | 3 | 百間川原尾島遺跡 | 竪穴住居７<br>上面土器溜まり | C9 | 土 | 完形 | 断面菱形 | 5.9 | 1.8 | 50.7 | 0.8 | 後期末 | 35 |
| 3 | 4 | 百間川兼基遺跡 | 土器溜まり１ | C2 | 土 | 完形 | 板状 | 7.0 | 0.7 | 45.6 | 0.9 | 後期前半 | 25 |
| 3 | 5 | 津島遺跡 | 河道1 | C11 | 土 | 完形 | 板状 | 6.9 | 1.3 | 50.8 | 0.6 | 後期後半 | 34 |
| | | 津島遺跡 | 包含層 | S73 | 頁岩 | 完形 | 板状 | 4.9 | 0.9 | 34.4 | 0.7 | 前期か | 31 |
| | | 津島遺跡 | 包含層 | S64 | 黒色片岩 | 完形か | 板状 | 4.8 | 0.7 | 31.2 | 0.7 | 前期か | 32 |
| | | 天神原遺跡 | A地点 | ― | 硬質砂岩 | 欠損(表面剥離) | 板状 | 5.4 | 0.9 | 30.2 | 0.6 | 前期か | 4 |
| | | 南方遺跡 | 南東低位部 | S433 | 結晶片岩 | ほぼ完形 | 板状 | 5.5 | 0.7 | 36.7 | 0.7 | 前期か | 42 |




第７図　４・５期の紡錘車（1/3）

のものと似る大型で薄手の板状を呈するもの（第７図１）と、小型で板状を呈するもの（第７図２・３）がある。いずれも竪穴住居からの出土で、完形である[(3)]。このうち岡山市津寺遺跡竪穴住居-106は長軸７ｍを超える大型住居で、東海系や西部瀬戸内系の土器を出土するなど、集落における中核的存在と推測されている。

５期（古墳時代中期前半）

土製に再び石製が加わる時期である。出土量は増加に転じ、３遺跡７点がある。竪穴住居から６点、井戸から１点が出土し、いずれも完形である。土製のものは４期同様の板状（第７図４）の他、算盤玉形（第７図５・６）、厚台形（第７図７）がある。このうち算盤玉形のものは、いわゆる渡来系遺物である。直径または広面径は3.9～5.0㎝で、厚みと重量が増している。石製は薄台形を呈し（第７図８～10）、狭面に線刻するものが１点あるが、無文のものが多い。広面径は3.8～4.7㎝で薄手なことから軽量である。いずれも手擦れによる摩滅が見られる。

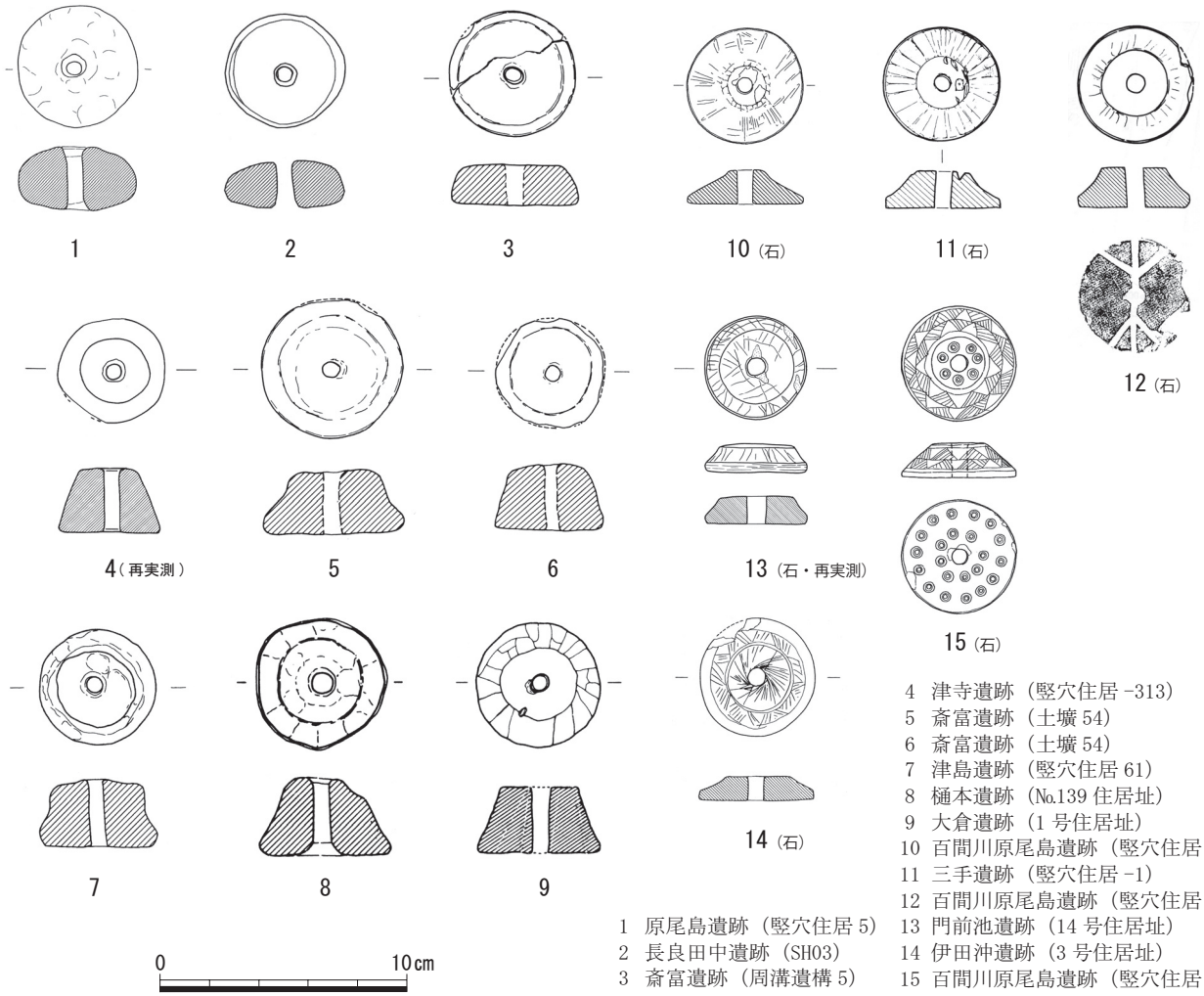
津寺遺跡竪穴住居49-ｂは焼失住居で、炭化材の上面から多くの土器とともに石製紡錘車（第７図10）が出土し、住居廃絶後の祭祀に関わるものと見られる。赤磐市斎富遺跡竪穴住居39出土例（第７図８）は滑石製で、手捏ね土器と小型壺が共伴する。岡山市高塚遺跡竪穴住居169と斎富遺跡竪穴住居21からは、各２点の紡錘車が出土している。高塚遺跡では算盤玉形の土製紡錘車（第７図６）と石製紡錘車（第７図９）、斎富遺跡では算盤玉形（第７図５）と板状（第７図４）の土製紡錘車というように、双方とも渡来系の算盤玉形紡錘車と組み合って出土している。高塚遺跡竪穴住居169出土例は手捏ね土器と、斎富遺跡井戸６出土例（第７図７）は土製勾玉、手捏ね土器２点と共伴する。

６期（古墳時代中期後半～後期前半）

土製と石製のものがある。11遺跡19点の出土をみる。土製品は、形状が断面楕円形を呈するもの（第８図１・２）、厚台形（第８図３～９）があり、後者が多数を占める。断面楕円形のものは、算盤玉形の稜線が甘くなったものと考えられる。直径または広面径は4.4～5.7㎝で、さらに厚さが増して重くなる。石製も同様に厚さを増し、広面の端部に面取りが施されるものもある。薄台形（第８図10・13～15）と厚台形（第８図11・12）があり、鋸歯文や竹管文を施すものと無文のものがある。広面径は4.1～4.7㎝と土製より一回り小さいが、厚さを増して重くなる傾向は同様である。土製・石製を合わせた19点中12点が、竪穴住居から1点ずつ完形で出土している。その他、土坑や溝、周溝遺構からの出土がある。

土製紡錘車が出土する遺構のうち、岡山市原尾島遺跡竪穴住居５出土例（第８図１）は滑石製臼玉２点とともに鹿顎骨[(4)]が共伴する。主柱の抜き取り後に土師器甕が埋められていた津寺遺跡竪穴住居-313出土例（第８図４）は滑石製剣形模造品と共伴する。斎富遺跡土壙54からは２点（第８図５・６）が、土玉１点とともに出土する。

石製のものは、６軒の竪穴住居から１点ずつ出土する。赤磐市門前池遺跡の第８図13は、焼失住居である14号住居址からの出土である。百間川原尾島遺跡では３軒の竪穴住居から出土した。竪穴住居18出土例（第８図15）は石製双孔円板１点、焼失住居で集落最大規模の竪穴住




1 原尾島遺跡（竪穴住居５）
2 長良田中遺跡（SH03）
3 斎富遺跡（周溝遺構５）
4 津寺遺跡（竪穴住居 -313）
5 斎富遺跡（土壙 54）
6 斎富遺跡（土壙 54）
7 津島遺跡（竪穴住居 61）
8 樋本遺跡（№139 住居址）
9 大倉遺跡（1 号住居址）
10 百間川原尾島遺跡（竪穴住居 19）
11 三手遺跡（竪穴住居 -1）
12 百間川原尾島遺跡（竪穴住居 21）
13 門前池遺跡（14 号住居址）
14 伊田沖遺跡（3 号住居址）
15 百間川原尾島遺跡（竪穴住居 18）

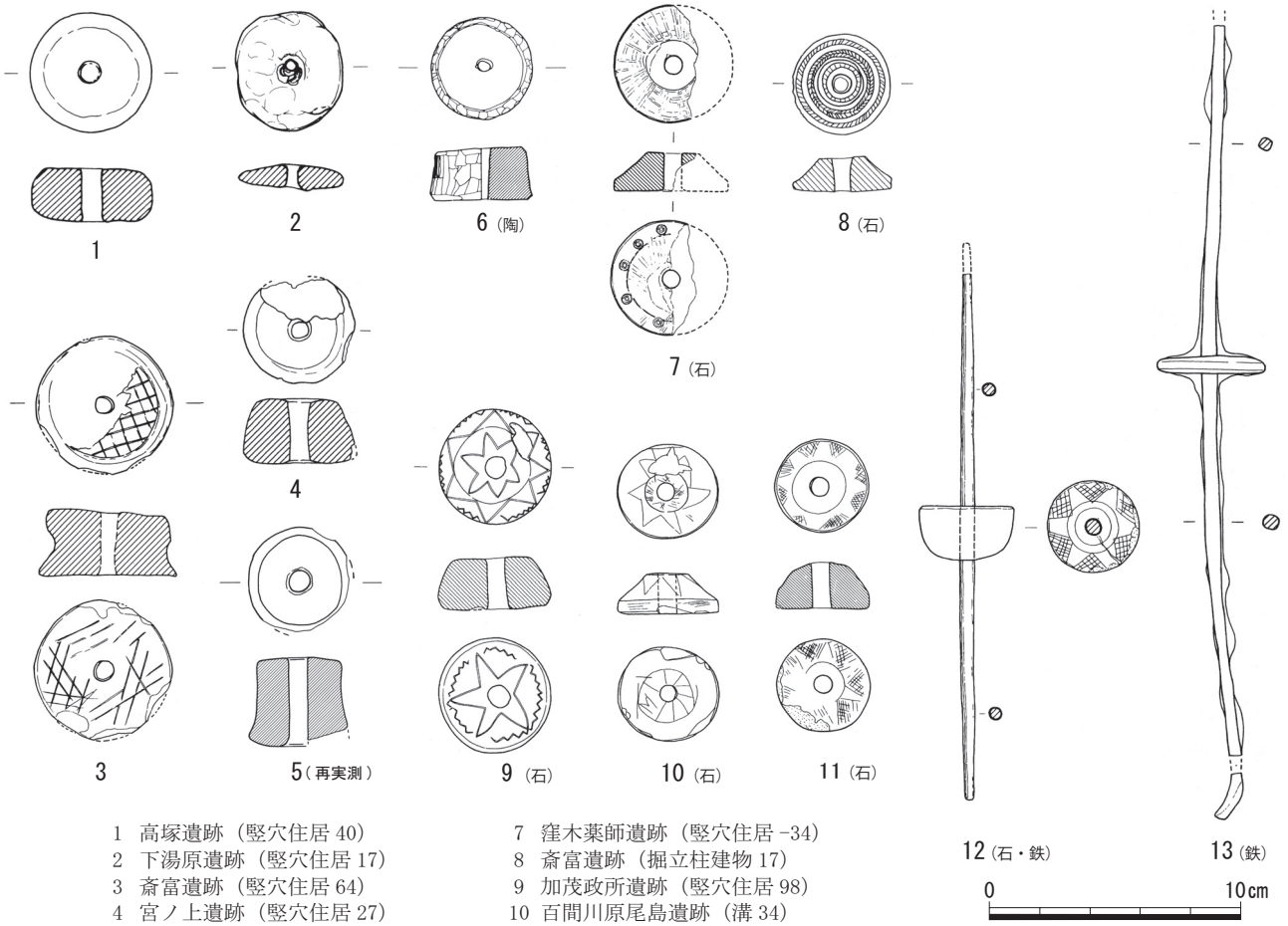
第８図　６期の紡錘車（1/3）

居19出土例（第８図10）は臼玉２点、竪穴住居21出土例（第８図12）は滑石製有孔板１点と臼玉101点及びガラス玉１点と共伴する。大半に手擦れによる摩滅が顕著に見られるが、百間川原尾島遺跡竪穴住居18出土例のみ線刻や加工痕跡が明瞭に残り、未使用もしくはそれに近しいと考えられる。

７期（古墳時代後期後半～）

土製（須恵質の陶製を含む）や石製に、石製・鉄製の紡輪に鉄製の紡茎からなる紡錘車が加わる。10遺跡19点が出土し、土製８点、陶製1点、石製７点（うち鉄製紡茎１点）、鉄製３点（紡輪・紡茎とも）がある。遺構に伴う石製品は少ないが、包含層等からの出土でこの期に属すると考えられる、厚台形または断面半円形を呈し鋸歯文を施す滑石製紡錘車は一定数見られる。土製のものは板状（第９図１）、断面菱形（第９図２）または厚台形（第９図３～５）がある。厚さや細部の形状は様々であるが調整はいずれもナデで、指オサエの顕著なものがある。陶製（第９図６）は厚台形で、外面に細かい面取りを施す。石製は薄台形（第９図８）、厚台形（第９図７・９・10）、断面半円形（第９図11・12）のものがある。竹管文や斜線文などを配する総社市窪木薬師遺跡出土例（第９図７）や斎富遺跡出土例（第９図８）のように古い様相を残すものもあるが、基本的には鋸歯文をいずれかの面に施す。鉄製は、板状の紡輪を持つ（第９図13）。19点中、竪穴住居からの出土は11点を数え、１点を除き完形である。

土製のものは、真庭市下湯原遺跡の焼失住居である竪穴住居17から２点（第９図２）出土している。この集落では同時期の竪穴住居から、小形仿製鏡や鏡形土製品、手捏ね土器、土玉が見つかっている。斎富遺跡竪穴住居64出土例（第９図３）は、やや欠損のあるものの狭・広面に斜格子文が描かれ、土玉が共伴する。勝央町宮ノ上




1　高塚遺跡（竪穴住居 40）
2　下湯原遺跡（竪穴住居 17）
3　斎富遺跡（竪穴住居 64）
4　宮ノ上遺跡（竪穴住居 27）
5　矢部南向遺跡（竪穴住居 69）
6　津寺遺跡（竪穴住居 -72）
7　窪木薬師遺跡（竪穴住居 -34）
8　斎富遺跡（掘立柱建物 17）
9　加茂政所遺跡（竪穴住居 98）
10　百間川原尾島遺跡（溝 34）
11　百間川原尾島遺跡（溝 38）
12　狐塚遺跡（10 号住居）
13　百間川原尾島遺跡（井戸 15）

第９図　７期の紡錘車（1/3）

遺跡竪穴住居27出土例（第９図４）は手捏ね土器が共伴する。陶製のものは津寺遺跡竪穴住居-72出土例（第９図６）が見られるのみで、手擦れは顕著でない。

石製のものは、岡山市加茂政所遺跡竪穴住居98出土例（第９図９）がある。凝灰岩製で、意図的に下顎骨を外された２頭のウマの頭骨（文献50）とともに床面付近から出土している。窪木薬師遺跡竪穴住居-34出土例（第９図７）は半ばを欠いた状態で出土し、滑石製有孔円板と臼玉各１点が共伴する。斎富遺跡掘立柱建物17の柱穴からは、手擦れのあまり見られない紡錘車（第９図８）が出土している。斎富遺跡ではこのほかにも、２本の柱穴から完形の土製紡錘車が出土している。同一の溝と見られる百間川原尾島遺跡の溝34・38からは石製紡錘車が計３点出土している。ここでは７世紀前葉の多器種の須恵器が出土し、集落内の祭祀に使用された土器が一括廃棄されたと理解されている。

鉄製は、大きく欠損した状態で包含層などからしばしば出土するが、ほぼ完形のものが竪穴住居と井戸から各１点、出土している。百間川原尾島遺跡井戸15出土例（第９図13）と共伴する甑の体部には穿孔が見られる。

## 6　古墳時代の紡錘車の特徴

４期の紡錘車は、弥生時代から引き続き出土量が少ないものの、竪穴住居から完形で出土する。弥生時代と異なり、古墳時代の遺構から出土した紡錘車は、竪穴住居からの出土が全体のおよそ２/３を占め、かつ完形の出土が多く、その様相はこの時期から見られる。津寺遺跡出土例（第７図１）のように３期の紡錘車に通じる形状は、４期が過渡的な状況であることを示すのかもしれない。

５期は新しく石製紡錘車と土製の算盤玉形紡錘車が出土する時期である。この時期の集落では、井戸出土の１

例を除き竪穴住居から完形で出土する。津寺遺跡竪穴住居49-ｂや斎富遺跡井戸６の出土例のように竪穴住居の廃絶や井戸の祭祀に用いられたことを示すものや、土製模造品と共伴するものが見られるようになる。

６期には、鋸歯文や斜線文を施す石製紡錘車が現れる。紡錘車が出土した竪穴住居の半数で土製または石製の模造品が見られ、土製紡錘車は土製・石製模造品と、石製紡錘車は石製模造品と共伴するようである。原尾島遺跡竪穴住居５や百間川原尾島遺跡竪穴住居21のように獣骨や多量の臼玉と共伴し、何らかの祭祀に用いられた状況を呈するものが見られる。

７期には、集落から出土する土製紡錘車と古墳に副葬される鋸歯文を施した石製紡錘車の使い分けが指摘されている（文献51）。竪穴住居から出土する石製紡錘車も少量あるが、凝灰岩製の加茂政所遺跡出土例（第９図９）や竹管文を施す窪木薬師遺跡出土例（第９図７）など、古墳に副葬されるものとは様相が異なっている。一方、鋸歯文を施した滑石製紡錘車が、集落において遺構以外の場所から出土する状況は、古墳に副葬される前の保管場所に起因するのかもしれない。鉄製紡錘車は糸の品質に関わる実用性がいわれている（文献57）が、百間川原尾島遺跡井戸15出土例はそうした実用的な鉄製紡錘車がなんらかの祭祀に用いられた可能性を示している。

古墳時代を通して、土製紡錘車が出土する竪穴住居は遺跡ごとに各期で１軒のみである。石製紡錘車が出土する竪穴住居も同様であり、例外としては６期の百間川原尾島遺跡の３軒があるが、この期に属する未製品が溝から出土しており（文献13）、集落内で製作が行われていたことに起因するものであろう。これらの紡錘車が出土する竪穴住居の中には、規模が大きく外来系の土器などを出土するものがあり、集落の中核をなす世帯であったことが考えられる。また、土製・石製模造品の他、ガラス玉や人の手の加わった獣骨、穿孔された土器といった祭祀具と思われる遺物としばしば共伴することから、紡錘車そのものが、時に祭祀の道具として献じられたことが伺いしれる。さらに、５期以降に出土する石製の紡錘車は、手擦れの明瞭なものが多い。こうした痕跡から実際に使用されていたことは明確で、祭祀の過程で生じたものと理解されている（文献54）。これに集落における出土数が少ないことを考えあわせると、石製紡錘車は特定の世帯が保有するものであり、祭祀に用いるような特別な布を織るための糸を紡ぐのに使用されたのではないだろうか。土製紡錘車についても出土数が石製紡錘車とさほど変わらないことからすると、やはり保有した世帯は限られていたと考えられ、石製紡錘車を補完するものであったものと推測される。５期の竪穴住居では算盤玉形紡錘車が他の紡錘車と共に出土する状況が見られるが、この算盤玉形紡錘車は直状系の製織技術の導入地域を推定することのできる渡来系遺物とされており（文献57）、紡錘車を有する世帯は先進的な紡織技術の導入にも主体的に関わり、糸・布の生産や祭祀に携わったものと思われる。

## ７　結語

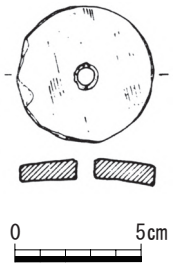
岡山県で出土する紡錘車は、弥生時代中期から古墳時代にかけて集落における祭祀の道具として用いられた状

表２　岡山県の古墳時代集落から出土した主な紡錘車

| 図 | 番号 | 遺跡名 | 遺構名 | 遺物番号 | 材質 | 残存状況 | 形状 | 直径<br>狭面径<br>広面径 | 厚さ | 重さ | 孔径 | 時期 | 共伴遺物等 | 文献 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 7 | 1 | 津寺遺跡 | 竪穴住居-106 | C77 | 土 | 完形 | 板状 | 5.8 | 0.6 | 18.3 | 0.7 | 前期前半 | | 19 |
| 7 | 2 | 井出天原遺跡 | 竪穴住居１ | C1 | 土 | 完形 | 板状 | 4.4 | 1.3 | 29.0 | 0.6 | 前期前半 | | 38 |
| 7 | 3 | 山津田遺跡 | 2号住居址 | ― | 土 | 完形か | 厚い板状 | 4.4 | 2.0 | ― | 0.7 | 前期前半 | | 45 |
| 7 | 4 | 斎富遺跡 | 竪穴住居21 | R1 | 土 | 完形 | 厚い板状 | 4.3 | 1.6 | 33.5 | 0.7 | 中期前半 | | 20 |
| 7 | 5 | 斎富遺跡 | 竪穴住居21 | R2 | 土 | 完形 | 算盤玉形 | 3.9 | 2.1 | 32.8 | 1.0 | 中期前半 | | 20 |
| 7 | 6 | 高塚遺跡 | 竪穴住居169 | C175 | 土 | 完形 | 算盤玉形 | 5.0 | 2.3 | 53.0 | 0.8 | 中期前半 | 手捏ね土器1 | 30 |
| 7 | 7 | 斎富遺跡 | 井戸６ | R7 | 土 | 完形 | 厚台形 | 3.2<br>3.5 | 3.1 | 38.0 | 0.6 | TK208 | 土製勾玉1<br>手捏ね土器2 | 20 |
| 7 | 8 | 斎富遺跡 | 竪穴住居39 | R3 | 滑石 | ほぼ完形 | 薄台形 | 2.5<br>4.0 | 1.0 | 19.1 | 0.5 | 中期前半 | 手捏ね土器1 | 20 |
| 7 | 9 | 高塚遺跡 | 竪穴住居169 | S236 | 蛇紋岩 | 完形 | 薄台形 | 2.8<br>3.8 | 0.6 | 12.9 | 0.6 | 中期前半 | 手捏ね土器１ | 30 |
| 7 | 10 | 津寺遺跡 | 竪穴住居49-b | S69 | 滑石 | 完形か | 薄台形 | 4.7 | 0.9 | 32.4 | 0.7 | 5世紀前半 | 焼失住居　廃絶後祭祀 | 17 |

| 図 | 番号 | 遺跡名 | 遺構名 | 遺物番号 | 材質 | 残存状況 | 形状 | 直径<br>狭面径<br>広面径 | 厚さ | 重さ | 孔径 | 時期 | 共伴遺物等 | 文献 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 8 | 1 | 原尾島遺跡 | 竪穴住居5 | C3 | 土 | 完形 | 断面楕円形 | 4.9 | 2.5 | 65.2 | 0.8 | TK47 | 臼玉２<br>鹿顎骨 | 28 |
| 8 | 2 | 長良小田中遺跡 | SH03 | 144 | 土 | 完形か | 断面楕円形 | 4.8 | 1.9 | ― | 0.7 | TK47 | | 46 |
| 8 | 3 | 斎富遺跡 | 周溝遺構5 | R6 | 土 | 完形 | 厚台形 | 4.5<br>5.1 | 1.7 | 47.9 | 0.8 | TK47 | 円板状土製品1 | 20 |
| 8 | 4 | 津寺遺跡 | 竪穴住居-313 | C318 | 土 | 完形 | 厚台形 | 2.6<br>4.4 | 2.6 | 42.3 | 0.8 | TK47 | 滑石製剣形模造品<br>柱抜取りに土師器甕 | 26 |
| 8 | 5 | 斎富遺跡 | 土壙54 | R9 | 土 | ほぼ完形 | 厚台形 | 3.6<br>5.7 | 2.7 | 83.2 | 0.7 | MT15 | 土玉1 | 20 |
| 8 | 6 | 斎富遺跡 | 土壙54 | R10 | 土 | ほぼ完形 | 厚台形 | 3.3<br>4.4 | 2.6 | 59.9 | 0.6 | MT15 | | 20 |
| 8 | 7 | 津島遺跡 | 竪穴住居61 | C39 | 土 | 完形 | 厚台形 | 3.1<br>4.8 | 2.7 | 65.0 | 0.6 | MT15 | 手捏ね土器1 | 34 |
| 8 | 8 | 樋本遺跡 | №139住居址 | 1 | 土 | 完形 | 厚台形 | 3.2<br>5.3 | 3.4 | 69.7 | 0.9 | MT15 | | 11 |
| 8 | 9 | 大倉遺跡 | １号住居址 | 1 | 土 | 完形 | 厚台形 | 2.8<br>4.8 | 2.7 | 50.6 | 0.7 | 6世紀前半 | | 6 |
| | | 原尾島遺跡 | 溝18 | C11 | 土 | ほぼ完形 | 厚い板状 | 4.5 | 2.0 | 52.6 | 0.9 | 5～6世紀 | | 28 |
| 8 | 10 | 百間川原尾島遺跡 | 竪穴住居19 | S79 | 滑石 | 完形 | 薄台形 | 1.7<br>4.7 | 1.4 | 31.6 | 0.7 | MT15 | 臼玉2<br>焼失住居 | 39 |
| 8 | 11 | 三手遺跡 | 竪穴住居-1 | S1 | 滑石 | 完形 | 厚台形 | 2.3<br>4.5 | 1.5 | 41.1 | 0.6 | TK23～TK47 | | 14 |
| 8 | 12 | 百間川原尾島遺跡 | 竪穴住居21 | S32 | 滑石 | 完形 | 厚台形 | 2.8<br>4.6 | 1.6 | 46.0 | 0.8 | TK47 | 滑石製有孔円板1<br>臼玉101、ガラス小玉1 | 13 |
| 8 | 13 | 門前池遺跡 | 14号住居址 | 3 | 滑石 | 完形 | 薄台形 | 2.9<br>4.1 | 1.1 | 30.8 | 0.8 | TK47 | 焼失住居 | 5 |
| 8 | 14 | 伊田沖遺跡 | Ｃ地区<br>3号住居址 | ― | 石 | 完形 | 薄台形 | 2.7<br>4.6 | 1.0 | ― | 0.6 | 5世紀後半 | | 60 |
| 8 | 15 | 百間川原尾島遺跡 | 竪穴住居18 | S75 | 滑石 | 完形 | 薄台形 | 2.3<br>4.6 | 1.4 | 38.6 | 0.7 | TK47 | 滑石製双孔円板1 | 39 |
| | | 斎富遺跡 | 土壙43 | R8 | 滑石 | 欠損 | 厚台形 | 2.1<br>― | ― | (7.9) | 0.6 | TK47 | | 20 |
| | | 百間川原尾島遺跡 | 溝37 | S34 | 輝緑岩 | 未製品 | 厚台形 | 2.9<br>5.1 | 1.7 | 62.5 | 無 | 5世紀末頃か | | 13 |
| | | 原尾島遺跡 | 溝18 | B55 | 蛇紋岩 | 完形 | 薄台形 | 2.6<br>4.1 | 1.3 | 29.4 | 0.7 | 5～6世紀 | | 28 |
| 9 | 1 | 高塚遺跡 | 竪穴住居40 | C92 | 土 | 完形 | 厚い板状 | 4.8 | 2.1 | 59.0 | 0.8 | TK209~TK217 | | 30 |
| 9 | 2 | 下湯原Ｂ遺跡 | 竪穴住居17 | C6 | 土 | 完形 | 断面菱形 | 4.7 | 0.9 | 18.9 | 0.5 | TK43 | | 33 |
| | | 下湯原Ｂ遺跡 | 竪穴住居17 | C7 | 土 | 完形 | 断面菱形 | 4.3 | 1.6 | 23.6 | 0.6 | TK43 | | 33 |
| 9 | 3 | 斎富遺跡 | 竪穴住居64 | R4 | 土 | やや欠損 | 厚台形 | 4.5<br>5.5 | 2.7 | 74.7 | 0.7 | TK10 | 土玉1 | 20 |
| 9 | 4 | 宮ノ上遺跡 | 竪穴住居27 | C4 | 土 | 完形 | 厚台形 | 3.5<br>4.4 | 2.5 | (45.2) | 0.8 | TK209 | 手捏ね土器1 | 37 |
| 9 | 5 | 足守川<br>矢部南向遺跡 | 竪穴住居69 | C136 | 土 | やや欠損 | 厚台形 | 3.4<br>4.3 | 3.6 | 60.7 | 0.8 | TK10 | | 15 |
| | | 斎富遺跡 | 柱17 | R13 | 土 | 完形 | 厚台形 | 1.8<br>3.5 | 2.0 | 21.9 | 0.6 | 後期後半 | | 20 |
| | | 斎富遺跡 | 柱19 | R15 | 土 | 完形 | 厚台形 | 3.0<br>5.2 | 2.3 | 48.3 | 0.6 | 後期後半 | | 20 |
| 9 | 6 | 津寺遺跡 | 竪穴住居-72 | C5 | 土<br>(陶製) | 完形 | 厚台形 | 3.5<br>4.0 | 2.1 | 47.3 | 0.6 | TK209 | | 24 |
| 9 | 7 | 窪木薬師遺跡 | 竪穴住居-34 | S-15 | 緑色<br>片岩 | 欠損 | 厚台形 | 2.2<br>4.6 | 1.5 | (27.3) | 0.7 | TK43 | 滑石片岩製有孔円板1<br>蛇紋岩製臼玉1 | 12 |
| 9 | 8 | 斎富遺跡 | 掘立柱建物<br>17 | Ｒ５ | 滑石 | 完形 | 薄台形 | 1.9<br>3.9 | 1.3 | 24.9 | 0.6 | 6世紀後半 | | 20 |
| 9 | 9 | 加茂政所遺跡 | 竪穴住居98 | S298 | 凝灰岩 | 完形 | 厚台形 | 3.2<br>4.3 | 2.0 | 37.2 | 0.8 | TK209 | ウマ２頭分の下顎骨 | 27 |
| 9 | 10 | 百間川原尾島遺跡 | 溝34 | S82 | 滑石 | ほぼ完形 | 厚台形 | 1.8<br>4.0 | 1.6 | 30.7 | 0.7 | TK209 | 同一の溝<br>多器種の須恵器 | 39 |
| | | 百間川原尾島遺跡 | 溝34 | S83 | 滑石 | 欠損 | 断面台形 | ―<br>3.9 | (0.8) | (18.4) | 0.8 | TK209 | | 39 |
| 9 | 11 | 百間川原尾島遺跡 | 溝38 | S36 | 頁岩 | 完形 | 断面半円形 | 2.4<br>3.7 | 1.9 | 36.7 | 0.8 | TK209 | | 13 |
| 9 | 12 | 狐塚遺跡 | 10号住居 | 5 | 滑石<br>紡茎：鉄 | 完形 | 断面半円形 | 2.2<br>4.0 | 2.3 | (71.1) | 0.7 | TK209か | | 47 |
| 9 | 13 | 百間川原尾島遺跡 | 井戸15 | M42 | 鉄 | ほぼ完形 | 板状 | 4.3 | 0.7 | (53.6) | 0.5 | TK209 | 甑体部に穿孔 | 35 |
| | | 津寺遺跡 | 竪穴住居-38 | M9 | 鉄 | 完形 | 板状 | 4.5 | 0.8 | (45.3) | 0.6 | TK209~TK217 | | 24 |
| | | 斎富遺跡 | 土壙61 | R11 | 鉄 | 欠損 | 板状 | 4.2 | 0.5 | (14.5) | 0.5 | TK209 | | 20 |

況が認められる。弥生時代には集落全体で行われたであろうマツリに捧げられたようであるが、古墳時代には特定の世帯が保持して祭祀のための布を製作するのに使用されたのだろう。祭祀具として製作された紡錘車が実際に使用されたことは、植物繊維から糸を作り出す行為そのものが祭祀にとって重要であったことを示している。そしてそこには紡織を担った女性が大きく関わっていたのだろう。なお、今回対象から外した土器片転用の有孔円板のうち、弥生時代後期後半の井戸である上東遺跡Ｐ－ハ出土例（第10図・文献３）は、黒漆を塗布した特殊な木製盾と共伴し、３期の土製紡錘車と同様の出土状況を呈する。このことは、土器片転用の有孔円板が紡錘車として用いられていたことを示しているように思われる。今後の検討課題としたい。




第10図　紡錘車の可能性のある土器片転用有孔円板（1/3）

遺物の実見に際しては、岡山市埋蔵文化財センター、総社市埋蔵文化財学習の館、津山弥生の里文化財センターの協力を得た。記して感謝いたします。

## 註

（1）弥生～古墳時代の有機質（木・鯨骨・鹿角など）製紡錘車は、管見による限り県内では知られていない。

（2）紡茎が遺存する紡錘車などから、孔径は0.6～0.8㎝のものが妥当とされる（文献52・56）が、0.5㎝や0.9㎝のものも見られたため、幅を持たせることとした。

（3）山津田遺跡出土品は実測図から完形の可能性が高い。

（4）鹿かどうかは未鑑定である。

## 引用・参考文献

1　赤穂市教育委員会2003「東有年・沖田遺跡」『赤穂市文化財調査報告書』56

2　岡山県教育委員会1972「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』1

3　岡山県教育委員会1974「上東遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』2

4　岡山県教育委員会1975「天神原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』7

5　岡山県教育委員会1975「門前池遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』9

6　岡山県教育委員会1977「大倉遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』20

7　岡山県教育委員会1980「百間川原尾島遺跡１」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』39

8　岡山県教育委員会1983「奥坂遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』53

9　岡山県教育委員会1984「百間川原尾島遺跡２」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』56

10　岡山県教育委員会1985「百間川沢田遺跡２」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』59

11　岡山県教育委員会1987「樋本遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』65

12　岡山県教育委員会1993「窪木薬師遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』86

13　岡山県教育委員会1994「百間川原尾島遺跡３」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』88

14　岡山県教育委員会1994「三手遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』90

15　岡山県教育委員会1995「足守川矢部南向遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』94

16　岡山県教育委員会1995「百間川原尾島遺跡４」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』97

17　岡山県教育委員会1995「津寺遺跡２」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』98

18　岡山県教育委員会1995「南溝手遺跡１」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』100

19　岡山県教育委員会1996「津寺遺跡３」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』104

20　岡山県教育委員会1996「斎富遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』105

21　岡山県教育委員会1996「百間川原尾島遺跡５」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』106

22　岡山県教育委員会1996「南溝手遺跡２」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』107

23　岡山県教育委員会1996「百間川兼基遺跡２」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』114

24　岡山県教育委員会1997「津寺遺跡４」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』116

25　岡山県教育委員会1997「百間川兼基遺跡３」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』119
26　岡山県教育委員会1998「津寺遺跡５」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』127
27　岡山県教育委員会1999「加茂政所遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』138
28　岡山県教育委員会1999「原尾島遺跡（藤原光町３丁目地区）」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』139
29　岡山県教育委員会1998「田益田中（国立岡山病院）遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』141
30　岡山県教育委員会2000「高塚遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』150
31　岡山県教育委員会2000「津島遺跡２」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』151
32　岡山県教育委員会2001「津島遺跡３」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』160
33　岡山県教育委員会2002「下湯原Ｂ遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』166
34　岡山県教育委員会2003「津島遺跡４」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』173
35　岡山県教育委員会2004「百間川原尾島遺跡６」『岡山県埋蔵文化時発掘調査報告』179
36　岡山県教育委員会2005「津島遺跡６」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』190
37　岡山県教育委員会2006「宮ノ上遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』197
38　岡山県教育委員会2006「井出天原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』198
39　岡山県教育委員会2008「百間川原尾島遺跡７」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』215
40　岡山県教育委員会2012「北溝手遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』235
41　岡山県教育委員会2013「百間川原尾島遺跡８」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』239
42　岡山市教育委員会2018「南方遺跡－岡山済生会総合病院新病院建設に伴う発掘調査－」
43　岡山市教育委員会2021「南方（国体開発）遺跡発掘調査報告－ファミールタワープラザ岡山建設に伴う発掘調査－」
44　國下多美樹1988「京都府下の紡錘車について」『京都考古』第50号記念号　京都考古刊行会
45　総社市教育委員会1984「山津田遺跡」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』1
46　総社市教育委員会2011「長良小田中遺跡」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』22
47　津山市教育委員会1974「狐塚遺跡発掘調査報告」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第２集
48　鳥取県教育文化財団2001「青谷上寺地遺跡３」『鳥取県教育文化財団調査報告書』72
49　鳥取県教育文化財団2002「青谷上寺地遺跡４」『鳥取県教育文化財団調査報告書』74
50　富岡直人1999「岡山県加茂政所遺跡出土ウマ遺存体」「加茂政所遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』138　岡山県教育委員会
51　豊島雪絵2001「古墳時代における石製紡錘車の性格－中国・近畿地方出土例を中心に－」『古代吉備』第23集　古代吉備研究会
52　豊橋市教育委員会1996「高井遺跡」『豊橋市埋蔵文化財発掘調査報告』第26集
53　中沢悟2013「紡錘車について」『山梨県考古学協会2012年度研究集会 紡織の考古学－紡ぐ・織る・縫う― 資料集』山梨県考古学協会
54　中山学1998「広島県内出土の滑石製鋸歯文紡錘車について」『文化財論究』第１集　財団法人東広島市教育文化振興事業団
55　中山学2006「滑石製鋸歯文紡錘車消長の意義」『季刊考古学』第96号　雄山閣出版
56　春成秀爾2011『祭りと呪術の考古学』塙書房
57　東村純子2011『考古学からみた古代日本の紡織』六一書房
58　古澤義久2016「なぜ紡錘車が出土しないのか－民族誌・民俗事例からの想定－」『考古学は科学か　田中良之先生追悼論文集』中国書店
59　松本直子2002「弥生時代前期の土器片円盤類－紡錘車である可能性の再検討－」『環瀬戸内海の考古学－平井勝氏追悼論文集－』古代吉備研究会
60　御津町教育委員会1988「伊田沖遺跡」『御津町埋蔵文化財発掘調査報告』４
61　宮本長二郎2003「津島遺跡出土建築材の復元」『津島遺跡４　岡山県埋蔵文化財調査報告書』173　岡山県教育委員会

# 総社市一丁坦38号墳の発掘調査

渡邉恵里子・四田　寛人・柴田　英樹

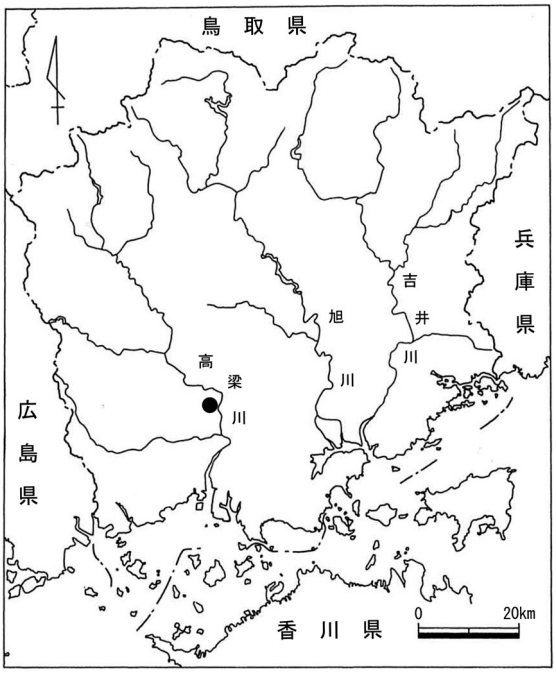
## 1　遺跡の位置と環境

一丁坦38号墳は高梁川右岸の秦地区に所在する（第２図)。標高381mの正木山から東南に延びる尾根上に立地し、眼下には高梁川とその支流が形成した平野を見下ろす。高梁川は県西部を南北に貫流する一級河川で、県南部と県北部を結ぶ、重要な内陸水路である。古代以前には本墳の対岸に当たる湛井あたりで東に分かれ、足守川を経て瀬戸内海へ注いでいた。一方、西へは新本川が分かれ、高梁川との合流点となるこの平野部が水上交通の結節点となっていたとことは想像に難くない。この平野部を取り巻く山塊上には弥生時代の首長墓に比定される伊与部山墳丘墓や宮山墳丘墓、三角縁神獣鏡が出土した秦上沼古墳（墳形不明)、３世紀後葉の茶臼嶽古墳（前方後方墳、全長55.4m)、４世紀初頭の一丁坦１号墳（前方後方墳、全長約70m)、４世紀後半の秦大坦古墳（前方後円墳、全長約56m)、三笠山古墳（前方後円墳、全長約70m)、５世紀末～６世紀初頭の秦茶臼山古墳（前方後円墳、全長約38m）などの大型首長墳が造営されており、この地の重要性を物語っている。時代が降っては井山城、荒平山城、嚢越城、夕部山城などの山城が築かれており、軍事的な要所とも言える。

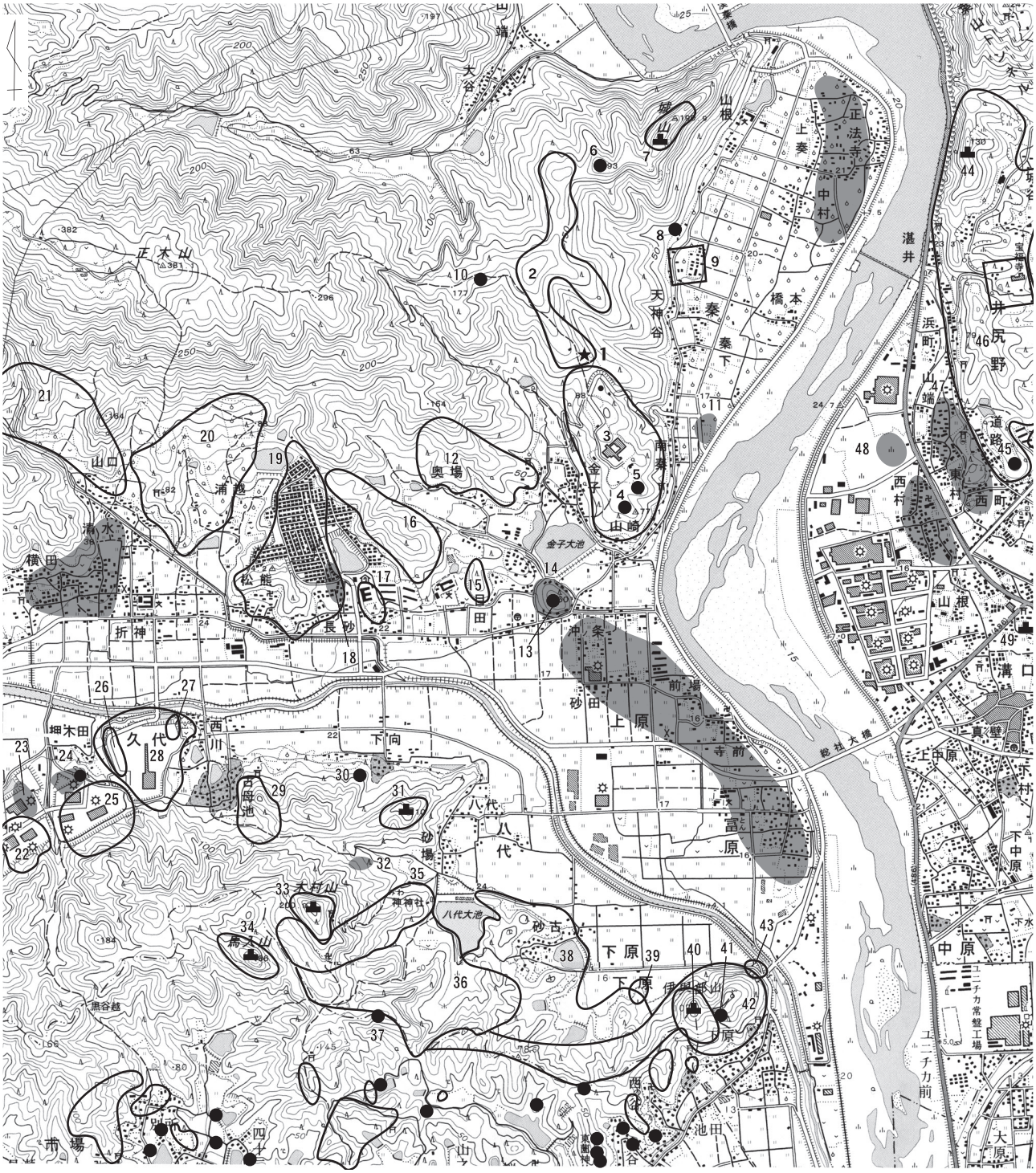
新本川下流域では６世紀後半の金子石塔塚古墳には貝殻石灰岩製（浪形石）の石棺が納められ、歩揺の可能性のある金銅製の亀甲文板片が出土した。また、終末期の長砂２号墳の横口式石槨も特筆される。両岸山裾には板井砂奥製鉄遺跡や黒谷製鉄遺跡など製鉄遺跡が多く営まれており、渡来系技術の積極的な受容が、秦の地の勢力を支えていたと考えられる。秦の地は『和名抄』でいうところの下道郡秦原郷に当たり、渡来系一族秦氏の居住地という説も有り、飛鳥時代創建とされる秦原廃寺は秦氏の氏寺と伝えられている。

さて、一丁坦古墳群は、標高190m近い尾根最高所に築かれた１号墳を盟主墳とし、30基以上の小墳で構成される古墳群である（第３図)。1号墳から北に続く尾根上の２～33号墳、東の12～17号墳、南の６～11号墳の大きく３方に分かれ、11号墳から南東に延びる尾根上に34～38号墳がある。現状では本墳が群中最も南に位置する。さらに本墳下方には金子古墳群が続き、その先端丘陵頂部には秦大坦古墳、秦上沼古墳が築かれている。

一丁坦古墳群では平成22年度以降数次にわたって測量調査や確認調査が実施されており、その内容が報告されている[(1)]。特に１号墳は県南最大規模となる全長約70mの前方後方墳で、特殊器台形埴輪の出土から築造が４世紀前半に遡ることが確認され、その重要性から平成28年に県指定史跡となった（指定名称は一丁坦古墳)。また、４号墳は一辺14～15mの方墳で、円筒埴輪・朝顔形埴輪・馬形埴輪・人物形埴輪・須恵器が出土し、５世紀後半の築造とされている。７号墳では埴輪片、11号墳では須恵器片が採集され、７～11号墳については５世紀代の築造と推定されている。また、15号墳は、石室の構造や出土玉類の特徴から、５世紀代の築造で、渡来系要素を備えていることが明らかとなっている。一方、多くの古墳は未調査で、墳丘規模や時期など不明な点も多い。（渡邉）




第１図　遺跡位置図（1/1,500,000）




1 一丁坦38号墳　2 一丁坦古墳群　3 金子古墳群　4 秦大坦古墳　5 秦上沼古墳　6 茶臼嶽古墳　7 荒平山城跡　8 秦廃寺瓦窯跡　9 秦原廃寺　10 風水古墳　11 惣堂遺跡　12 奥場古墳群　13 秦茶臼山古墳　14 南山遺跡　15 目田古墳群　16 難波古墳群　17 舟山古墳群　18 難波遺跡　19 長砂古墳群　20 浦越古墳群　21 山口古墳群・ハザ古墳群　22 板井砂奥製鉄遺跡・板井砂奥古墳群　23 板井砂遺跡　24 黒谷遺跡・黒谷製鉄遺跡　25 黒谷古墳群　26 押木田古墳群　27 牛塚古墳群・牛塚西古墳　28 市後遺跡・市後製鉄遺跡　29 古母池古墳群　30 九代大塚　31 嚢越城跡　32 砂場遺跡　33 木村山城跡　34 馬入道山城跡　35 神古墳群　36 八代古墳群　37 仙人塚古墳　38 砂古古墳群・砂古22号墳　39 牛飼山古墳群・牛飼山遺跡　40 夕部山城跡　41 伊与部山弥生墳丘墓　42 伊与部山古墳群　43 磨崖仏　44 井山城跡　45佐野山古墳　46 井尻野古墳群　47 井尻野遺跡　48 井尻野西川遺跡

※網掛けは散布地範囲を示す

第２図　周辺主要遺跡分布図（1/30,000）

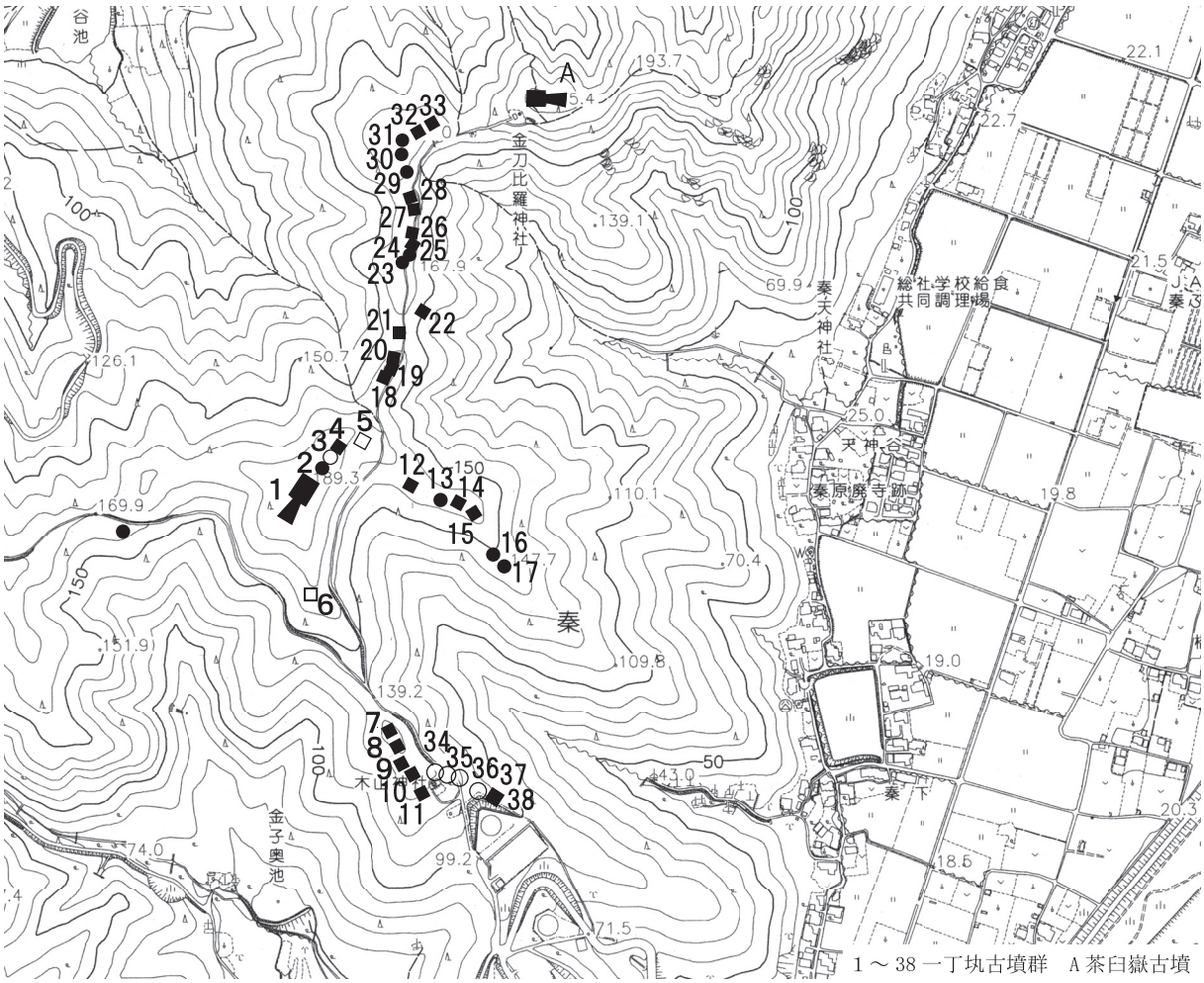
## 2　調査の経緯と経過

### （1）調査の経緯と経過

岡山県総社市秦地内の丘陵上には、岡山県広域水道企業団（以下、企業団）が設置した総社第２調整池があり、総社市西部や倉敷市真備町を中心とした地域への給水を行っていた。しかし、そうした地域の人口増加によって今後成羽や美星への給水が不安定になることが想定されるとともに、現調整池の点検や改修を考えると増設が必要と判断するに至り、企業団では総社第２調整池増設を計画していた。ちなみに企業団は水道用水を構成団体(県と10市７町）に供給する、地方自治法で定められた一部事務組合（特別地方公共団体）である。

平成29年８月に当該事業計画について企業団から文化財課に対して連絡があり、９月に協議を行った。その内容は、現第２調整池の北東隣接地を候補地として用地買収を行い、保安林解除が順調に完了すると仮定して、平成30年秋の着工を目指して準備を行っていたところ、県の遺跡地図で事業地が埋蔵文化財包蔵地にかかっていることが判明したのでどのように対応したらよいかということであった。それに対して文化財課は、遺跡地図では古墳群の範囲を表示しているだけなのでその地点の状況は分からないことと、当該丘陵地には多くの古墳が所在することから未発見の古墳があるかもしれないので現地確認を希望する旨を伝えた。併せて、場合によっては事前の発掘調査が必要になる可能性もあることから、用地選定も含めた事業計画の見直しも視野に入れておくよう求めた。

立ち入りが可能になった平成30年４月に文化財課と企業団で現地を踏査したところ、候補地内にはすでに南西の半分が削平された古墳とみられる地形の高まりを確認できた。なお、その後文化財課と総社市教育委員会の



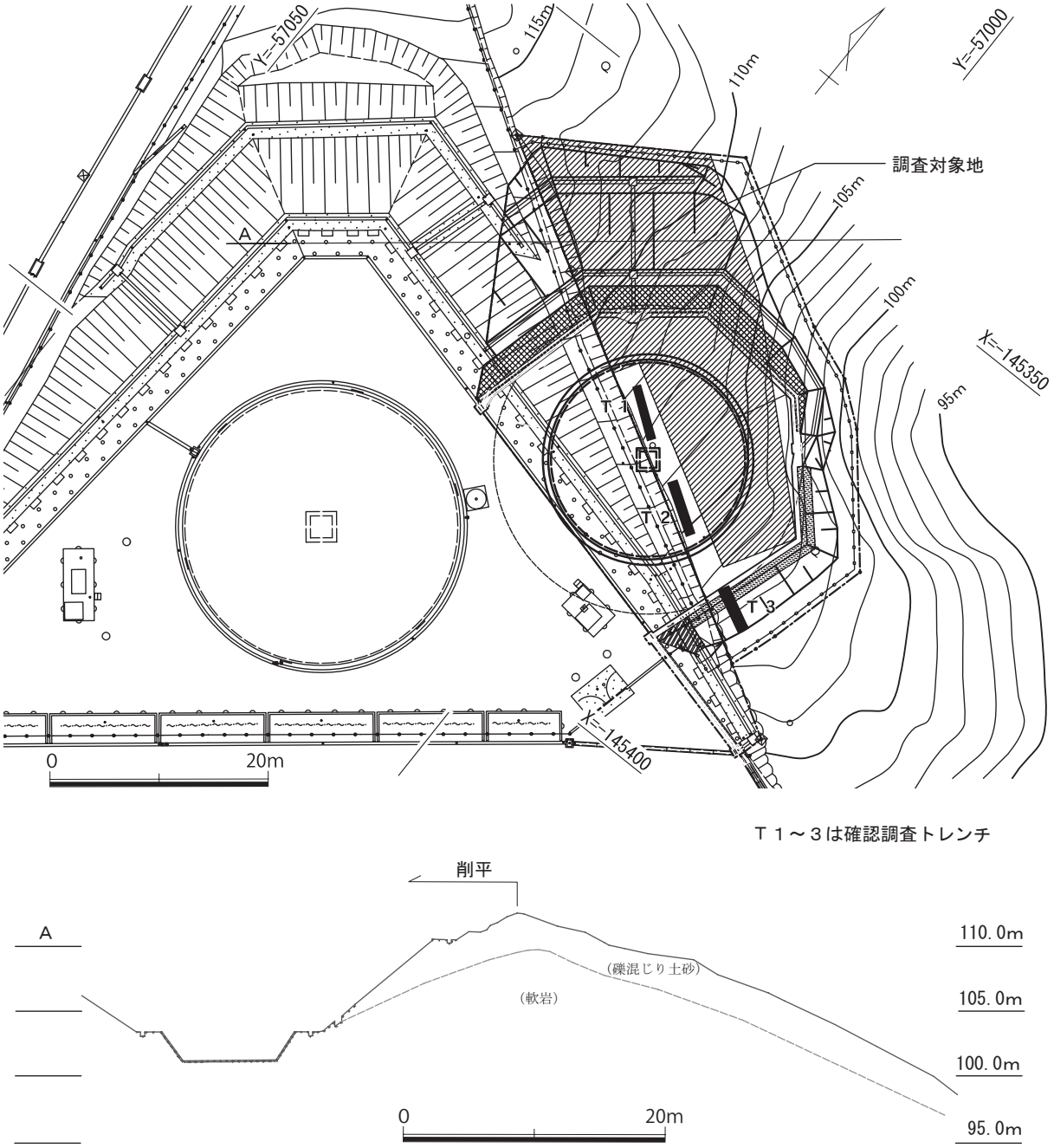

第３図　一丁坦古墳群分布図（1/10,000）

担当者で再度踏査し、候補地西の山側にも５か所の高まり等が確認できたため、西から順に周知の古墳番号に続けて番号を付し、当該古墳を一丁坦38号墳とした。

文化財課は、この時点であらためて企業団に事業計画や設計の見直しを求めたが、同年５月に企業団としては候補地の変更等は困難であるとの結論に至った。これにより事業対象地内の埋蔵文化財包蔵地については、やむを得ず事前の発掘調査が必要になった。ただ、38号墳以外の遺構等が所在する可能性も否定できないことから、確認調査の必要があることを説明して了承を得た。

平成30年10月には企業団による用地買収は終わったが、確認調査に当たっては保安林内作業許可を受ける必要があり、その手続きについて企業団の協力を得た。許可後の11月26日～28日に県古代吉備文化財センターは、３本のトレンチを設定して確認調査を実施したところ、38号墳以外の遺構等は認められなかった。

この結果をもとに文化財課は、企業団と調査時期や期間、範囲に関する協議を進めるとともに、調査経費につ




第４図　造成計画平面図（1/600）・断面図（1/500）

いては積算を示し、その負担について企業団に協力を求め了承を得た。また、発掘調査までに保安林に関わる許可を受けて対象地の樹木伐採を完了させること及び掘削の作業許可を得ておくよう企業団に依頼し、同年３月末までにいずれも完了した。なお、企業団から平成31年３月に文化財保護法第94条に基づく発掘の通知が提出され、同月で県教育委員会は、発掘調査の実施と調査の結果で重要な遺構等が発見された場合は別途協議するよう文書で勧告した。

発掘調査は、県古代吉備文化財センターが調査員２名を配置し、平成31年４月から６月にかけて実施した。その後の報告書作成については、協議段階において通常の報告書の体裁をとることが困難と判断したため、本書で調査成果を報告し公開することになった。なお、確認調査・発掘調査の実施に当たっては、駐車場等に関して隣接する民間保養施設の協力を得た。（柴田）

（２）調査の体制

岡山県教育委員会

| | |
|---|---|
| 教　育　長 | 鍵本　芳明 |

岡山県教育庁

| | |
|---|---|
| 教育次長 | 髙見　英樹 |

文化財課

| | |
|---|---|
| 課　　長 | 大西　治郎 |
| 参事（文化財保存・活用担当） | 横山　　定 |
| 総括副参事（埋蔵文化財班長） | 柴田　英樹 |
| 主　　幹 | 河合　　忍 |
| 主　　任 | 原　　珠見 |

古代吉備文化財センター

| | |
|---|---|
| 所　　長 | 向井　重明 |
| 次長（総務課長事務取扱） | 佐々木雅之 |
| 参事（文化財保護担当） | 大橋　雅也 |

〈総　務　課〉

| | |
|---|---|
| 総括主幹（総務班長） | 甲元　秀和 |
| 主　　任 | 東　　恵子 |
| 主　　任 | 多賀　克人 |

〈調査第三課〉

| | |
|---|---|
| 課　　長 | 弘田　和司 |
| 総括副参事 | 渡邉恵里子（調査・整理担当） |
| 主　　事 | 四田　寛人（調査担当） |

## ３　調査の概要

（１）概要

38号墳は、既存の総社第２調整池によって既に大半が削平されており、用地内南西角の半円形の高まりがその残丘と想定されていた。地形は、東に尾根筋が延び、若干の緩斜地もあったが、北へ急激に下がり、調査対象地の北半は崖状となっていた。今回の調査対象地は保安林内であったため非常に制約が大きく、一度に作業可能な範囲も限られていたので、作業スペース及び排土場所の確保をするため、まずは墳丘規模の把握と古墳以外の遺構の有無の確認を目的としてトレンチ（Ｔ１～３）での調査を行った。その結果、38号墳が想定以上に大きな方墳の可能性があること、Ｔ２より東には遺構が無いことが判明し、Ｔ２より西側の調査に注力することとした。

Ｔ１・２では摩滅した埴輪片や須恵器細片が数点出土したが、古墳から流出してきたと思われ、この２本のトレンチをもってＴ２以東の調査は終了し、北側急斜面地を排土置き場として利用しながらＴ２以西の調査を進めた。

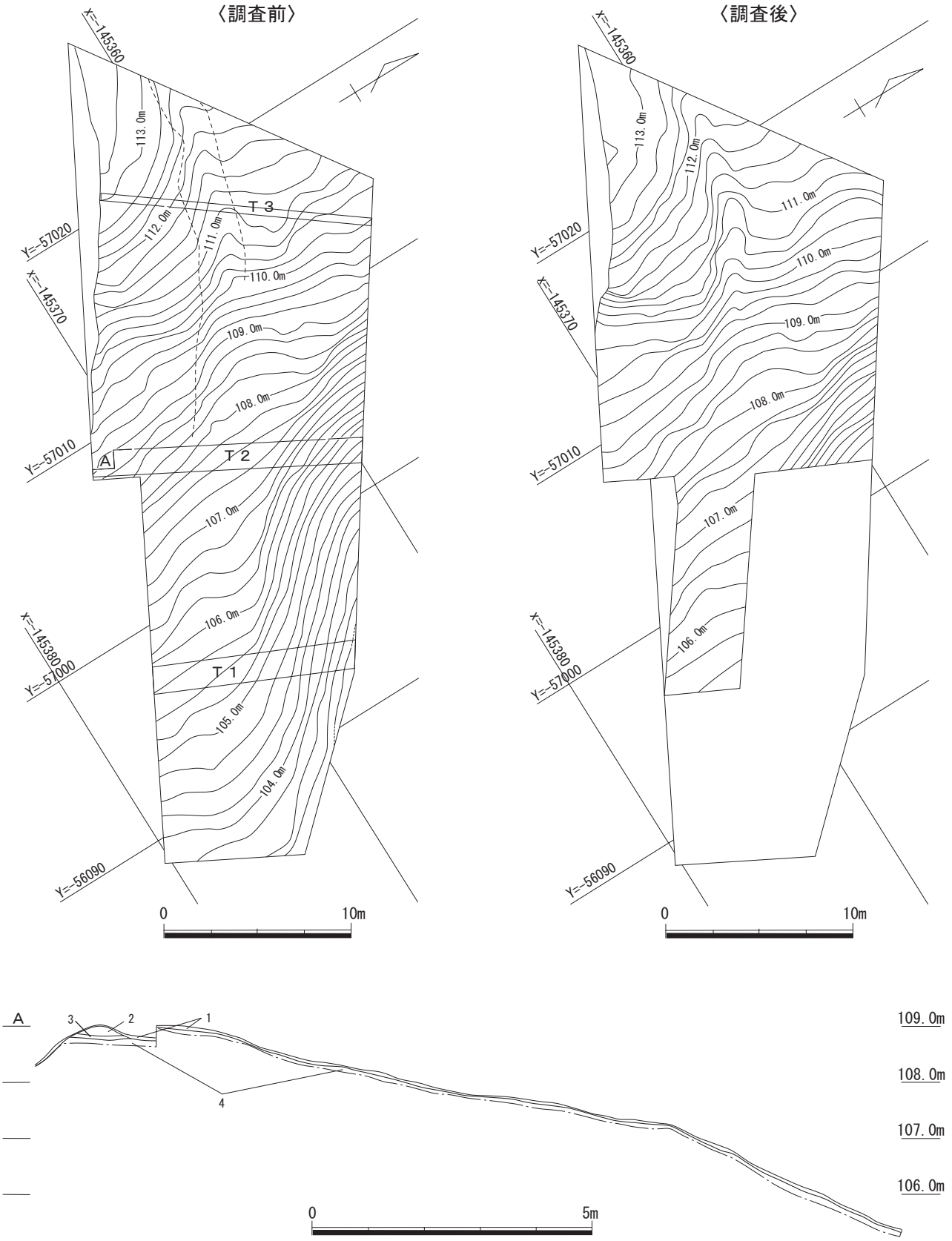
表土を除去すると、道として利用していた部分が北周溝となり、墳丘の北東コーナーも明らかとなった。残存部から一辺約15mの方墳で、墳丘の約６割が削平されていたと推定される。主体部は削平されていた南側法面の観察でも痕跡は確認できず、消滅していたと考えられる。

周溝内からは比較的多くの埴輪や須恵器が出土し、墳丘上では円筒埴輪が２基見つかった。東周溝中央部では、炭を伴う浅い土坑状のくぼみを検出した。北側周溝では集石があり、鉄製品が出土した。

（２）墳丘と周溝

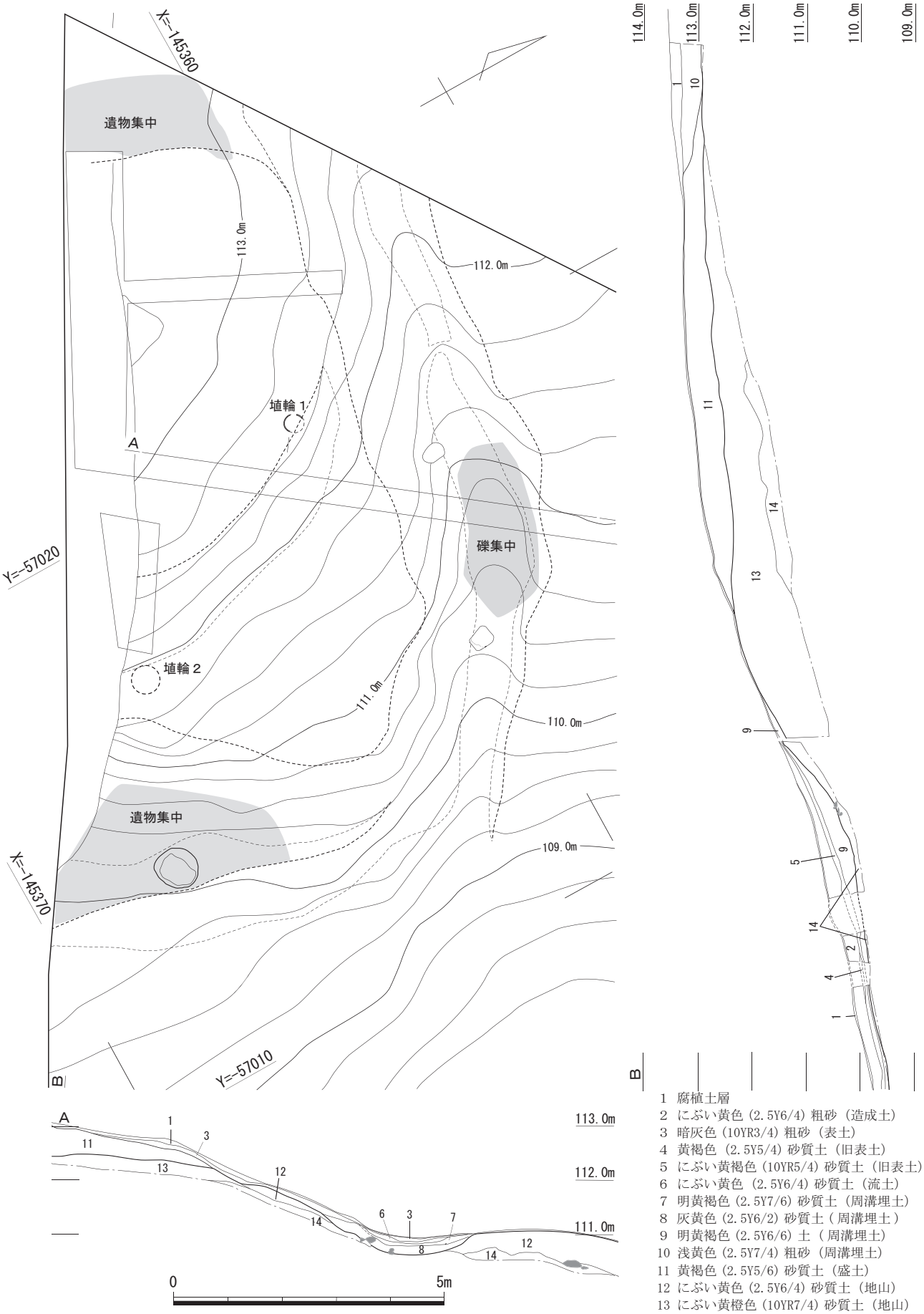
**墳丘（第５・６図）**　墳丘は既に南半の多くを削平され、西も調査区外となるため全容は不明である。調査前の地表観察では標高112.5mあたりから上方が丸く盛り上がって見えたため径７～８mの円墳と予想していたが、この盛り上がりは概ね盛土範囲と対応しており、盛土と地山の境の不自然な傾斜変換点として認識していたものであった。表土を除去後には周溝が明瞭に検出され、想定以上に大きな方墳であることが明らかとなった。

墳丘東端は、およそ標高110.0mの等高線が南に矩形に曲がり、南北方向に直線的に延びる部分に相当する。




1　腐植土層
2　淡黄色（2.5Y8/4）礫混じり粗砂質土（造成土）
3　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土（旧表土）
4　明黄褐色（2.5Y7/6）砂質土（地山）

第５図　地形測量図（1/300）・丘陵断面図（1/100）




1 腐植土層
2 にぶい黄色（2.5Y6/4）粗砂（造成土）
3 暗灰色（10YR3/4）粗砂（表土）
4 黄褐色（2.5Y5/4）砂質土（旧表土）
5 にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土（旧表土）
6 にぶい黄色（2.5Y6/4）砂質土（流土）
7 明黄褐色（2.5Y7/6）砂質土（周溝埋土）
8 灰黄色（2.5Y6/2）砂質土（周溝埋土）
9 明黄褐色（2.5Y6/6）土（周溝埋土）
10 浅黄色（2.5Y7/4）粗砂（周溝埋土）
11 黄褐色（2.5Y5/6）砂質土（盛土）
12 にぶい黄色（2.5Y6/4）砂質土（地山）
13 にぶい黄橙色（10YR7/4）砂質土（地山）
14 礫混じり明黄褐色（2.5Y6/6）（地山）

第６図　墳丘（1/100）

墳丘東側は丘陵先端をカットして造作されており、溝状ではなく、テラス状を呈していた。テラス面の標高は110m前後で、東からの見かけ上の高さは３m以上あり、実在以上の高さを感じさせている。東斜面からテラス上面には20～30㎝の流土が堆積し、比較的多くの埴輪片が出土した。なお東墳端からＴ２まで南フェンス沿いに土塁状の高まりがあったが、フェンス設置時の残土であった（第５図Ａ断面第２層・第６図第２層）。

一方、北周溝西端は調査区外に延びていくが、西周溝東肩口が僅かに検出できた。検出状況から、一辺約15mの方墳と推定したが、東周溝を東辺として想定される方形ラインよりも北西角が内（南）側に入り込んでおり、15号墳のように、古墳の正面となる尾根下方（東）から見た場合により大きく見せる視覚効果を狙って、手前（東）が大きく奥（西）が小さい台形に成形した可能性もある。

墳丘上部も削平を受けてほぼ平坦であるが、最も高い部分でおよそ標高113.5mを測る。表土層はほとんど認められず、腐植土層（第６図第３層）を除去すると、直ぐに盛土（第６図第11層）あるいは地山（第６図第12～14層）に達する。第14層には拳大～人頭大の円礫を比較的多く包含していた。盛土は厚さ40～50㎝を測る。盛土と地山の間に旧表土はなく、両者の区別は難しかった。岡山大学特命教授鈴木茂之氏からは、地山は山砂利層が長い年月の間に風化・粘土化した「くさり礫層」と呼ばれるもので、風化し残った円礫以外粘土化して均一に締まっているが、盛土はしまりが弱く、地山内の円礫だったものが壊れて角礫状になり、不均質であるとの教示をいただいている。

**周溝（第６・７図）**　周溝は墳丘を取り囲むように巡らされているが、先述したように、東側はテラス状を呈していた。第６図第９層が東周溝の埋土に当たる。第９層には埴輪を多く包含していた。墳丘東肩口は、かなり上方から掘削しており、急峻である。そのためもあり、北東コーナーはやや鋭角で、突出したような形状となっている。テラス面は東西幅約１mあり、墳丘斜面を含めた南北4.5m、東西1.5mの範囲で破片の状態となった埴輪が多く出土した。やや上方の斜面に貼り付くように出土したものも有り、墳丘上から転落してきた埴輪も含まれる。テラス部中央には径80㎝程度の不整円形の浅いくぼみがあり、周辺に炭が多く見られたが、被熱痕跡は無く、性格は不明である。凹み埋土下面からも埴輪片が出土しているおり、周溝に伴う蓋然性は高い。

西周溝は、その東肩口しか検出できていないが、幅2.3m以上、深さ20㎝を測る。調査区外地表観察では西肩口の痕跡は見出せなかった。埋土は第６図第10層に対応する。周溝からは大量の埴輪片や須恵器片が、底面に貼り付くような状態で出土した。範囲は南北2.5m、東西1.5mあるが、さらに調査区外の西側へ広がっている。

北周溝は比較的明瞭で、およそ幅2.5m、深さ40㎝を測る。埋土は第６図第７・８層が対応している。最終的には墳丘上から流れ込んだ土砂（第６図第６層）で埋没していた。北周溝内には遺物がほとんどみられなかったが、埴輪数片が出土した。細片で摩滅が著しく、上方から転落してきたと考えられる。また、トレンチ近く部分の周溝埋土下層から、鉄器が１点出土している。

第６図のトーンで示した範囲は集石で、第７図に検出状況を示している。集石のうち、南半は上下二面あった。上面の範囲は東西1.4m、南北0.5mで、小さく割れた礫

写真１　墳丘東側堆積状況（北東から）

写真２　西周溝遺物出土状況（西から）

が主体となっている。この礫群を除去したところ、周溝底面にも礫が散乱していた。範囲は東西2.1m、南北0.7mである。大きく、壊れていない円礫が主体であり、上部礫群とは様相が違う。周溝底面の傾斜は、西端と東端との比高差が20㎝程度と緩く、北辺の礫が直線上に並ぶ状況から、下部に何らかの施設があることを想定したが、何も無かった。墳丘側に40～50㎝大の２石あるが、集石との関連は不明である。地山の山砂利層から表出した可能性もある。（渡邉）

写真３　北周溝集石検出状況（東から）

1　にぶい黄色砂質土
（2.5Y6/4）

第７図　北周溝内集石（1/30）

（３）外表施設

墳丘上で原位置を保つと思われる円筒埴輪が２基出土した。北を埴輪１、東を埴輪２として記述を進める。

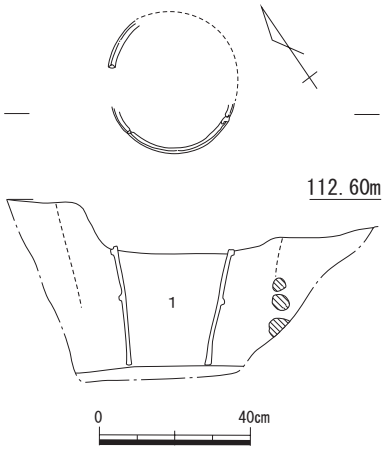
**埴輪１（第８図）** 墳頂平坦面北縁中央で検出した。樹根による撹乱により埴輪を樹立する掘り方の平面形は明らかではないが、上面径60cm以上、底面径約40cm、検出面から底面までの深さ47cmの規模を有する。掘り方のほぼ中央に円筒埴輪11が置かれており、埴輪の内外は同一のにぶい黄褐色砂質土によって埋められていた。円筒埴輪11は復元の結果３条４段以上の構成と考えられるが、掘り方の深さから考えると少なくとも３段目までは地中に埋設されていたものと考えられる。

**埴輪２（第９図）** 墳頂平坦面東縁で検出した。埴輪を樹立する掘り方の平面形は円形であり、上面径約40cm、底面径28cm、検出面から底面までの深さ約40cmを測る。埴輪は原形を留めず、埴輪基底部から３段目までの各部位が混在した状態で検出され、断面では破片が摺鉢状に堆積している状況が観察された。また、礫も含まれていた。出土した破片はほぼ接合し12となったが、別固体である円筒埴輪26の筒部片も混入していた。埴輪片の部位と出土位置の関係をみると、基底部に近い破片の方が上方から出土し、中位部分は掘り方壁面に沿って円弧状に出土していた。また、表土除去時に出土した基底部とも接合している。

これらの状況からは、破砕された埴輪片を小穴内に埋置するという行為がなされた可能性がある。廃棄のための施設であるとも考えられるが、掘り方の底径と埴輪の底部径がほぼ一致することから首肯しがたい。一方、後内池古墳に基底部を打ち欠いた後に据え置かれた例があり[(2)]、本例も同様に基底部を打ち欠いて樹立し、後に円筒内にその破片を投棄した可能性が考えられる。(四田)

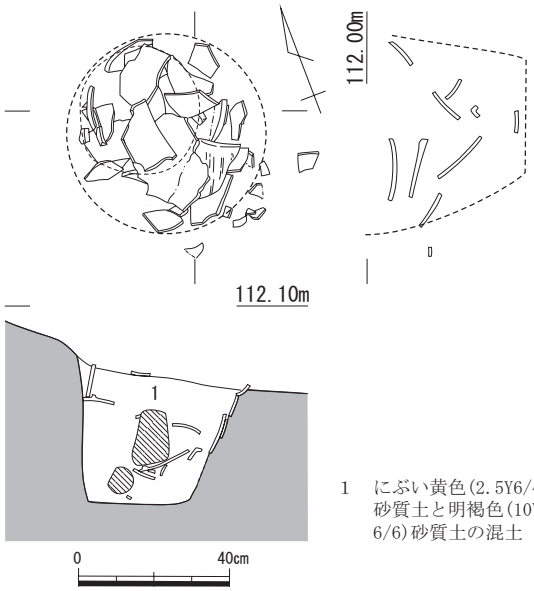
（４）出土遺物

遺物は、専用のコンテナにして、12箱出土した。墳丘上の２基の円筒埴輪を除くと６箱程度で、その大部分は東周溝及び西周溝から出土した円筒埴輪片である。摩滅した破片が多い。細片ではあるが形象埴輪も出土しており、特筆される。西周溝では破砕された状態で須恵器も出土した。墳丘外のトレンチや斜面地でも、墳丘から転落してきたとみられる埴輪片や須恵器片を採集している。北周溝からは鉄器が１点出土した。　　(渡邉)




1　にぶい黄色(2.5Y6/4)砂質土

第８図　埴輪１（1/20）




1　にぶい黄色(2.5Y6/4)砂質土と明褐色(10YR 6/6)砂質土の混土

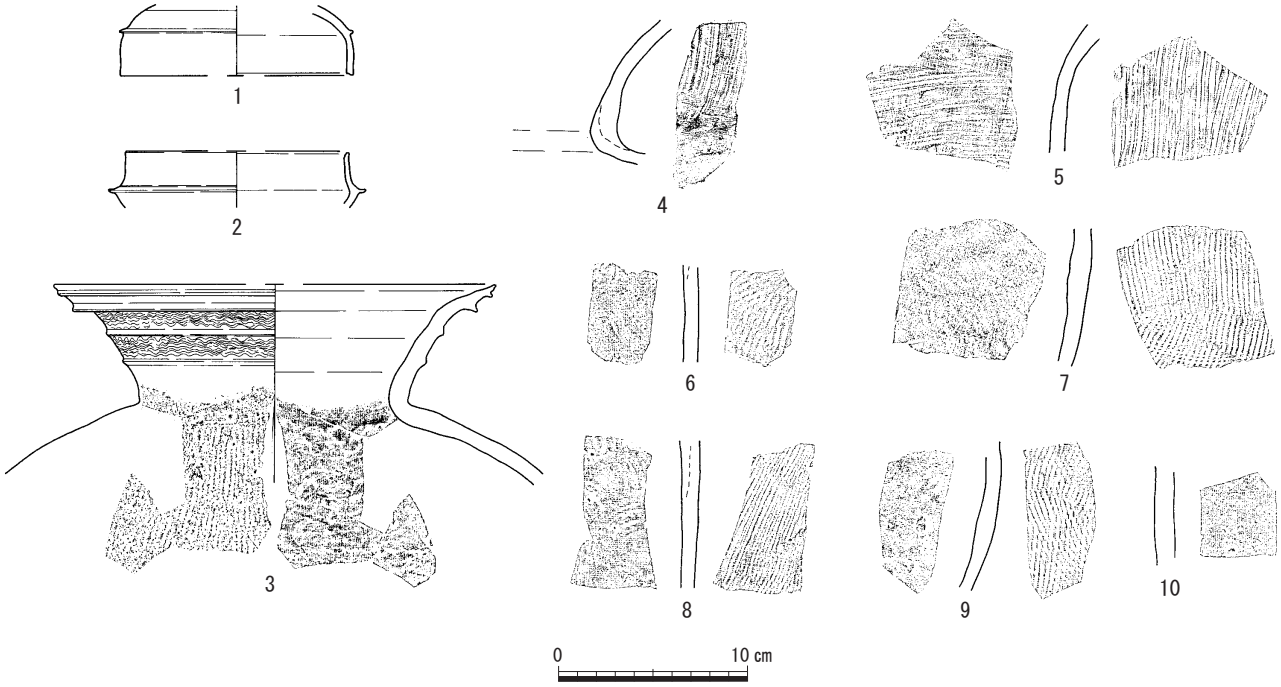
第９図　埴輪２（1/20）

写真４　埴輪２検出状況（北から）

**須恵器（第10図）**　蓋杯は図示した２点のみである。杯蓋１はフェンス設置時の残土から出土した。天井部はドーム状に丸味を帯び、稜は鋭く、口縁端部の段も明瞭である。幅３㎝足らずの細片で不確実であるが、復元口径12.2㎝を測る。杯身２は西周溝から出土。全体の1/10程度の細片で、復元口径は径11.6㎝。口縁端部は明瞭な段を有する。受け部は屈曲して水平方向へ張り出し、杯部はやや浅い。１・２共に断面色調が、内外器表面近くは灰色だが、中心部は暗紫灰色を呈する。壺３は西周溝から出土。細片の状態で埴輪片に混じって散乱しており、別地点で破砕された後に投棄されたような状態で出土した。口径23.3㎝、器高10.6㎝に復元される。口縁端部は薄く鋭く延びる。口縁直下と頸部には突帯が廻り、頸部突帯間に櫛描波状文を施す。外面に平行タタキを施す。内面には無文当具痕が残っている。４は東周溝から出土。壺か甕の頸部と思われる。傾きも不詳。外面には粗い柾目による沈線文が縦方向に施され、内面には指頭痕が明瞭に残る。外面は黒色で艶があり、断面は赤紫色。胎土は緻密で砂粒が少ない。５は墳丘外北東側の緩斜地で出土。４と同じ沈線文を有し、胎土･色調も同じことから、同一個体片と考えられる。内面には横方向の擦痕がある。６～10は体部片。６・７は東周溝から出土。外面は平行タタキ、内面は無文。６は内面をナデ消している。８は北周溝の東半の集石から出土。６・７と同じく外面平行タタキ、内面無文当具痕があり、タタキ原体の類似から、同一個体である可能性が高い。９も外面平行タタキだが、内面には同心円文が観察できる。外面色調は４と似た艶のある黒色。６～８のタタキ目の間隔が３本/㎝、９が５本/㎝で、別個体と考えられる。10は東周溝から出土。内外とも丁寧にナデ消し、無文。

いずれも細片で型式の特定は困難であるが、形態や全体的にシャープな造りはいわゆる初期須恵器の範疇で捉えられる。また、壺は口縁端部の特徴や突帯の高さからＴＫ73以前とされる菅生小学校裏山遺跡とＯＮ46～ＴＫ208に比定される法蓮22号墳の間に位置付けられよう。ただし、混入や西周溝が未確認の古墳と共有している可能性も否定しきれず、埋葬時期の比定にはさらに検証が必要であろう。（渡邉）

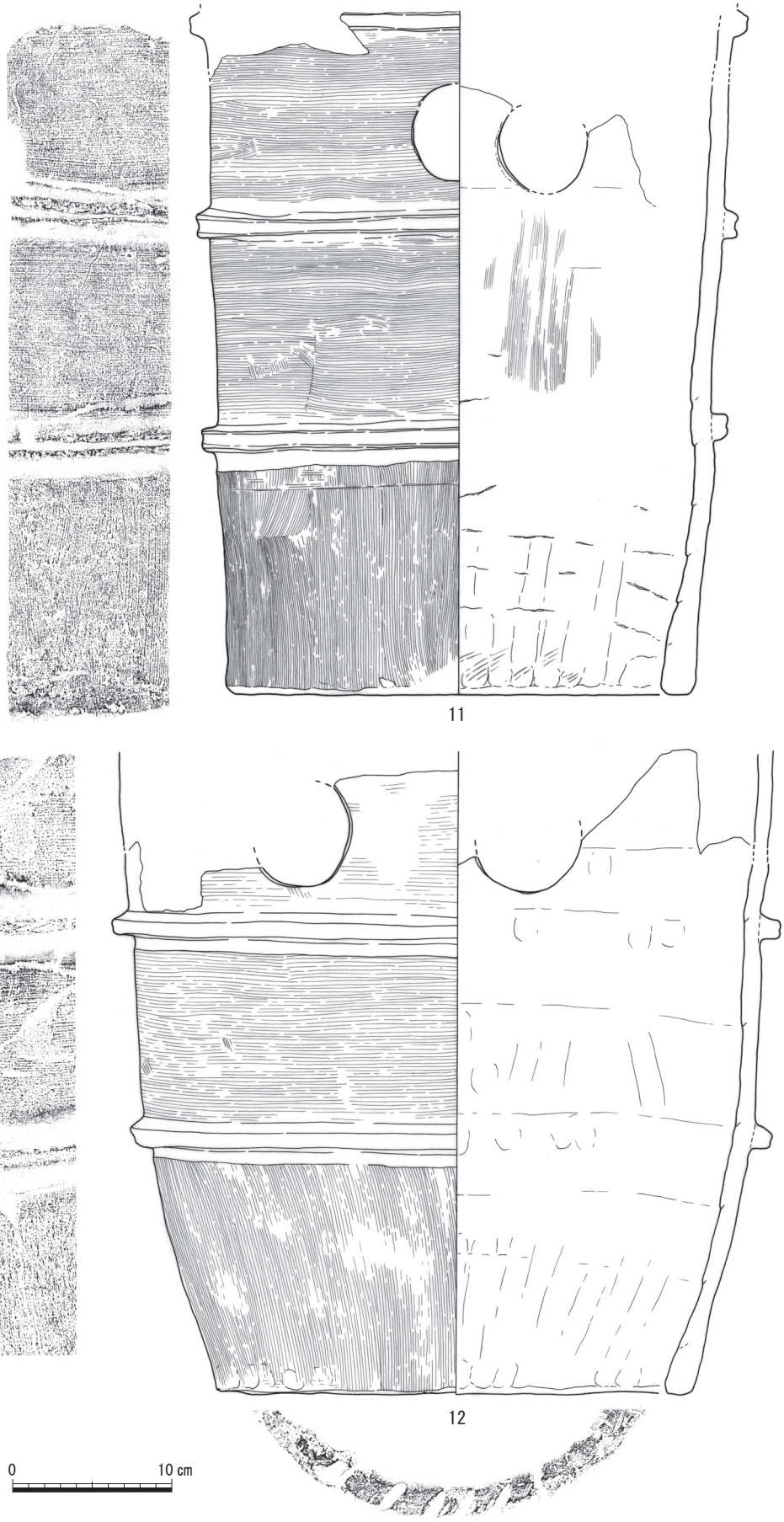
**埴輪（第11～14図）**　第11図11・12は墳丘上に原位置を留めて出土した円筒埴輪を図示した。11は埴輪１として示したものであるが、墳丘東側斜面から出土した破片が接合した。基底部径は28.6㎝、残存高は43.2㎝である。黒斑を有するが、焼成は堅致で赤褐色を呈する。３条の突帯が残存しており、断面はM字形を呈する。３段目に透かし孔が開けられ、３条４段以上の構成をもつものと思われる。突帯間隔は最下段（底部から１段目突帯下部）




第10図　須恵器（1/4）

で15.7㎝、２段目以上（突帯上部から上段突帯下部）では10.6～11.6㎝を測る。外面調整は最下段にタテハケ、２～３段目は静止痕の不明瞭なヨコハケが施される。このヨコハケは突帯間を２周以上する。内面は最下段をユビオサエと縦方向のナデで成形し、２段目以上はナデや部分的にハケを用いる。

12は埴輪２として示したもののほか、墳丘東側表土から出土した破片と接合した。基底部径は29.9㎝、残存高は40.6㎝で、黒斑を有する。11と比較してやや軟質でにぶい黄橙色。３段目の筒部までが残存しており、11同様に３段目に透かし孔を有する。筒部径が40㎝近い大型で、本来は５条６段以上の構成をもつ可能性がある[(3)]。突帯は頂部を強くなでることで整形しており、断面はM字形を呈する。突帯間隔は最下段で15.6㎝、２段目では11.2～11.6㎝を測る。外面調整は最下段がタテハケ、２段目以上は11同様のヨコハケを施すが、原体ハケメ間隔は11より粗い。内面は底部をユビオサエと縦方向のナデで成形し、２段目以上はナデで調整する。また内面と突帯部分にはユビオサエ




第11図　埴輪①（1/4）

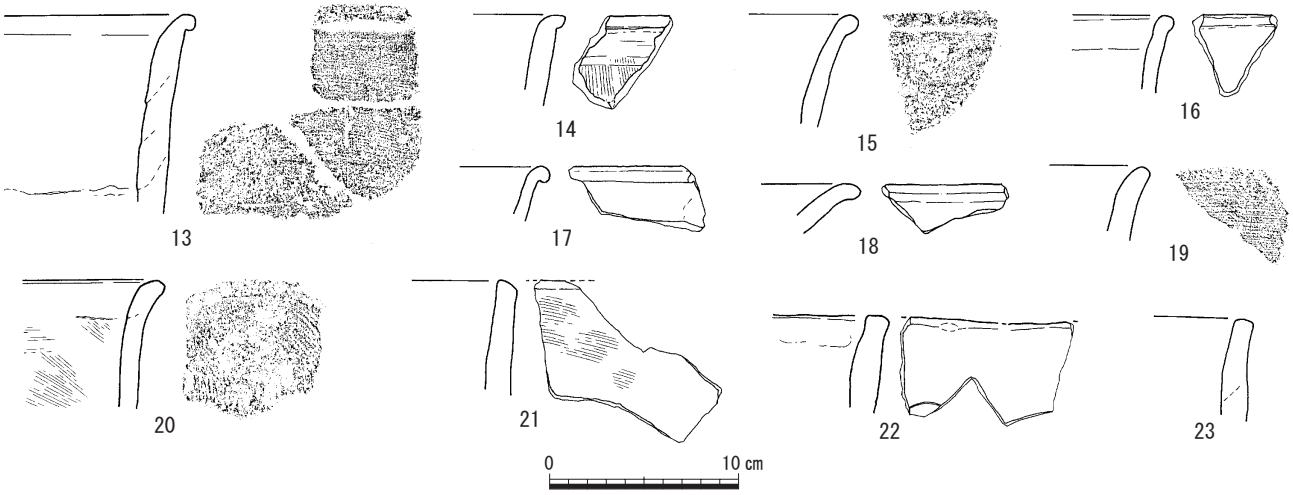
が観察される。11・12共に底面には粗朶の痕跡が認められる。11・12は焼成や色調、筒部径は異なるが、その他の規格や調整は非常によく似ている。

第12図には口縁部片を図示している。口縁端部を玉縁状に成形する13～17、やや外反し、口縁端部を丸くおさめる18～20、直立し口縁端部が面をなす21～23の三つに分けることが可能である。13・15・19・20が東周溝、18・22が西周溝、16・17・21が北周溝周辺、23が墳丘の南東部から出土している。14・19には黒斑が認められる。口縁端部を玉縁状に成形するもののうち、13はヨコハケ、14には一次調整タテハケが施されている。口縁端部を丸くおさめるものは、19にヨコハケ、20は内外面にナナメハケが用いられる。口縁端部が面をなすものでは、21にナナメハケが施される。21は先述した埴輪１の上で表土除去時に採集した破片と接合しており、11と同一個体の可能性がある。

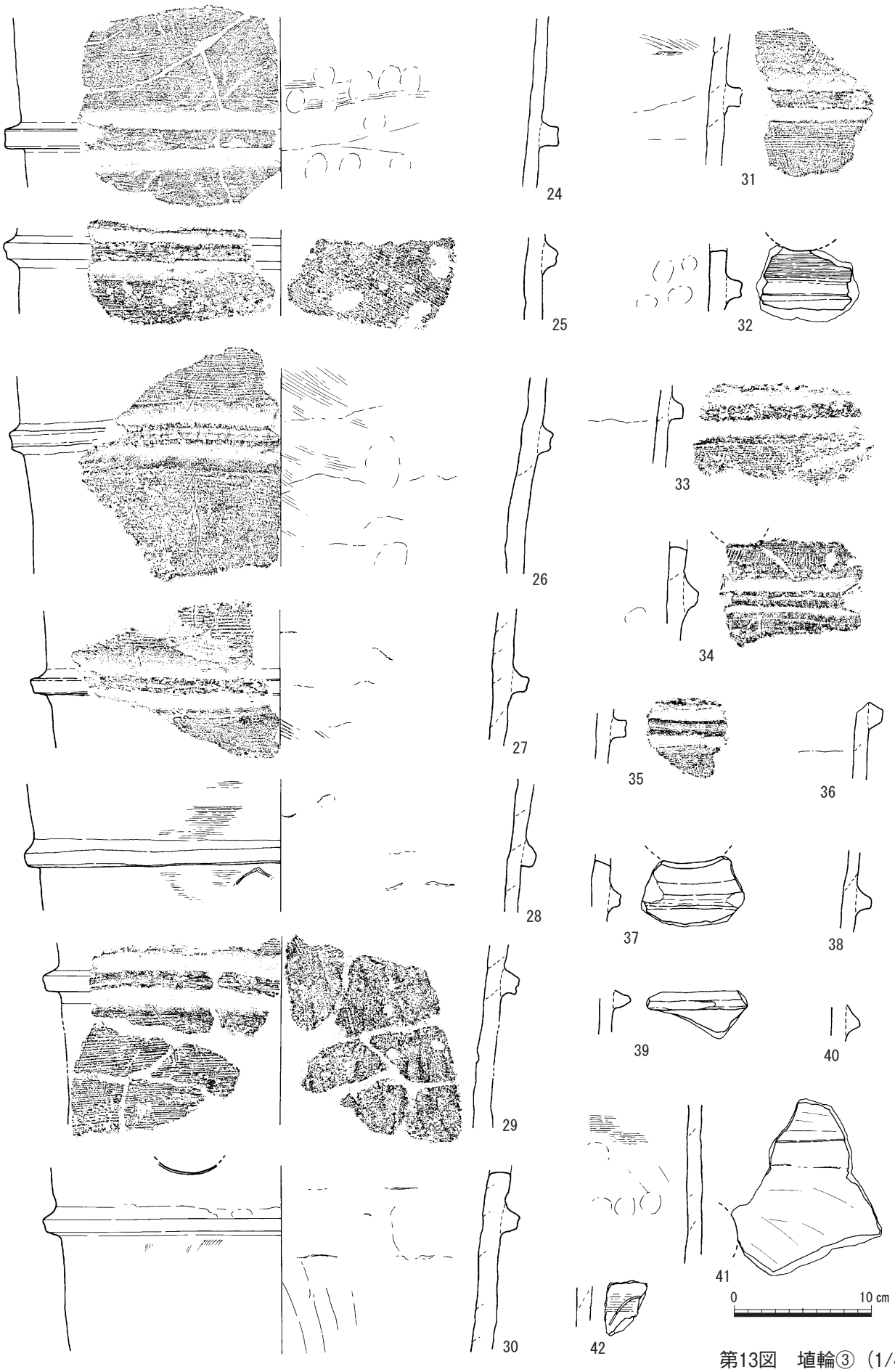
第13図には円筒埴輪の筒部片を示した。出土位置は24～26・29～31・34・41が東周溝、28・32・35・37・39・40・42が西周溝、33は墳丘西側斜面、36・40は北側周溝内、38は墳丘北側斜面より出土した。33は11と、38は12と同一個体の可能性がある。27は12の破片と共に出土している。筒部径を復元しうる24～30をみると、いずれも30～40cmの間に収まる。突帯の断面形状は、突帯頂部を強くなでつけ断面がM字状を呈する24～26・29～32・34～36・38とナデが弱くゆるい台形を呈する28・33・39・40が認められる。外面調整をみると、24・26～29・31～34で二次調整ヨコハケが認められ、これらには全て明瞭な静止痕は認められない。なお、34では一次調整タテハケの後に二次調整ヨコハケが行われた様子が観察できる。28・42には線刻が施されているほか、30・42には赤色顔料が付着している。また、24・26・29・34・39・40で黒斑が認められた。

写真５　埴輪１（11）外面調整

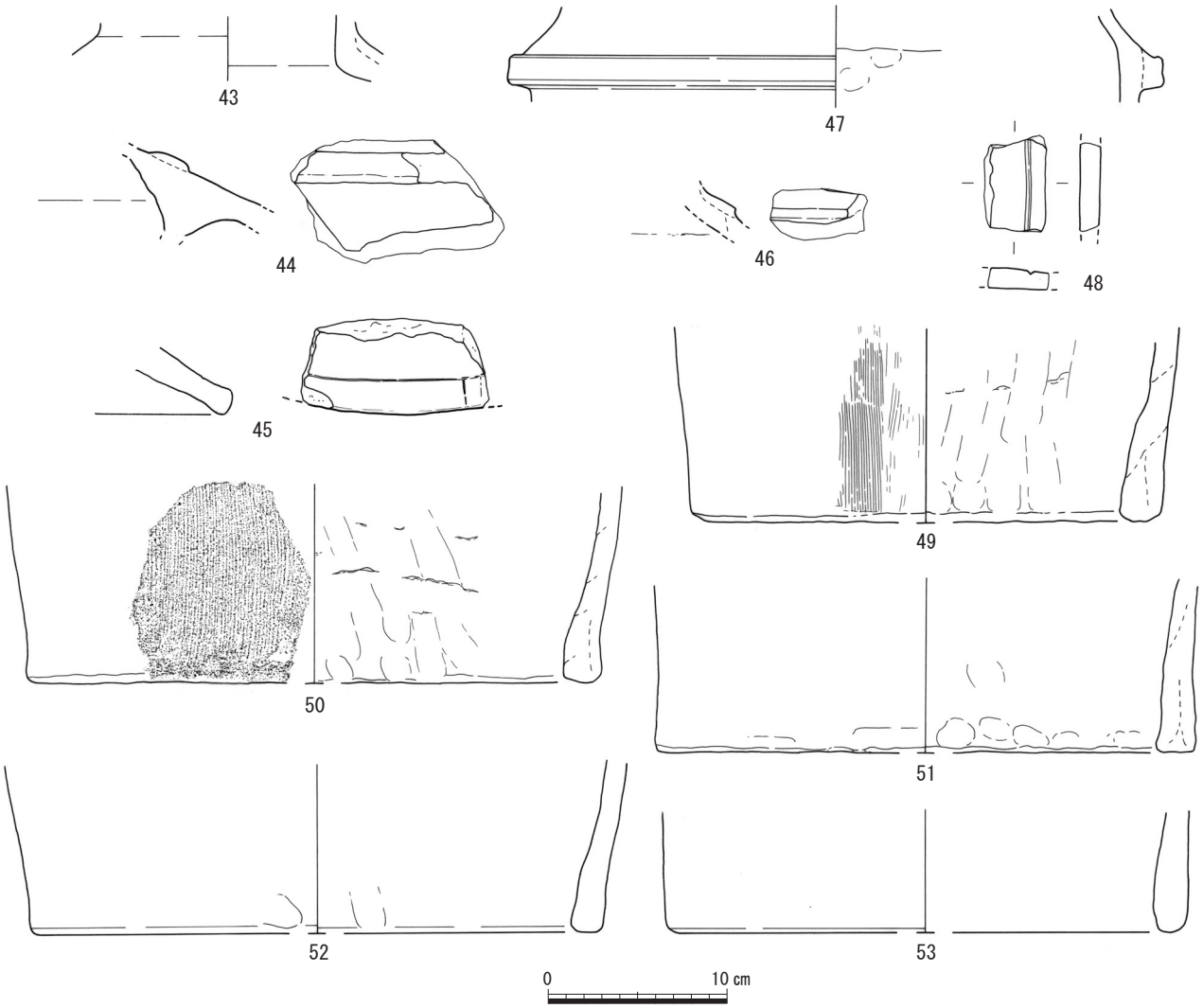
第14図は形象埴輪と基底部で、43～46は蓋形埴輪の破片を図示している。43は軸受部から笠部、44は笠部から台部で、笠下半部には線刻等は認められない。45は笠部周縁で、全体の1/16程の小片だが、径約45cmに復元できる。端部に平行して１条沈線を巡らし、さらに沈線を２本垂下させる。46は笠部中央突帯あるいは軸受部下部突帯の破片とみられる。44の笠部中央突帯が台部との接点に近い位置にあることや45の特徴から、松木武彦のいう津堂城山古墳新相タイプからはさみ山タイプの段階に位置づけることができる[(4)]。47は朝顔形埴輪の肩部片である。突帯頂部は強くなでられており、断面形状




第12図　埴輪②（1/4）




第13図　埴輪③（1/4）

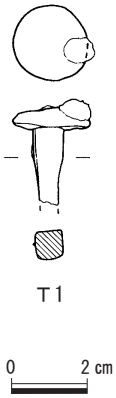



第14図　埴輪④（1/4）

はM字形を呈する。肩部の外面調整はヨコナデ、筒部は突帯下にヨコナデを施している。48は家形埴輪の一部と思われる。長辺約5.8cm、短辺3.5cmの破片で、一辺が面を成す。外面には柱の表現とみられる１条の沈線が描かれている。造山第４号古墳や総社市西山１号墳の家形埴輪の類例から入口あるいは窓の一部と考えられる。

第14図49～53は基底部を図示している。いずれも直径30cm前後の中型品である。出土位置は、49～51が西周溝、52が東周溝、53は東周溝および墳丘南東の造成土中から出土した破片が接合している。基部を粘土帯を貼り合わせることで成形する49～51と一枚の粘土帯をそのまま基部とする52・53がある。52のみ黒斑が認められる。49～51・53の底面には粗朶の痕跡が認められる。49・50は外面調整として一次調整タテハケ、内面調整は縦方向の強いナデが施されている。　（四田）

**金属製品（第15図）**　Ｔ１は、北周溝の集石部分に設けた南北方向のトレンチ調査時に、埋土下層から出土した。出土状況から混入は考え難く、本墳に伴う可能性が高い。残存長26.5㎜、重さ7.4ｇで、直径２cmの半円球状の頭部に一辺７㎜の方形の軸が付く。先端は折れて全体の形状は不明。一見鋲に見えるが、当時の鋲にしては大きすぎる。飾り金具的なものかもしれないが類例に乏しく用途不明。総社市窪木薬師遺跡の包含層から両端に円形の頭部が付く鉄製品が出土している。また、頭部と軸部の接合部の造りは、斎富遺跡の竪穴住居58から出土した辻金具に似ている[5]。　（渡邉）

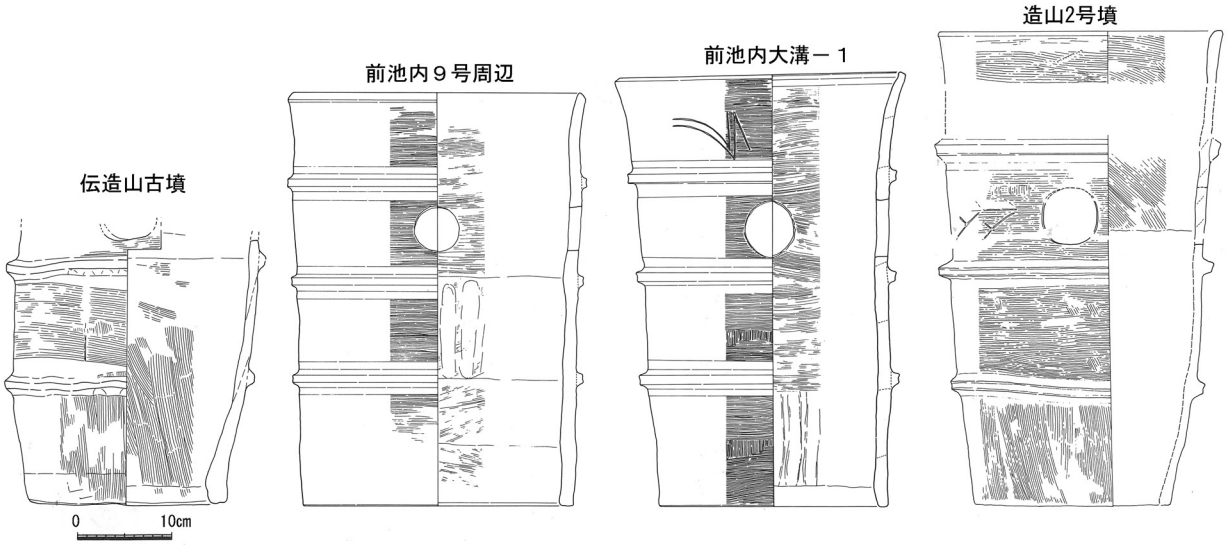



第15図
鉄製品（1/2）

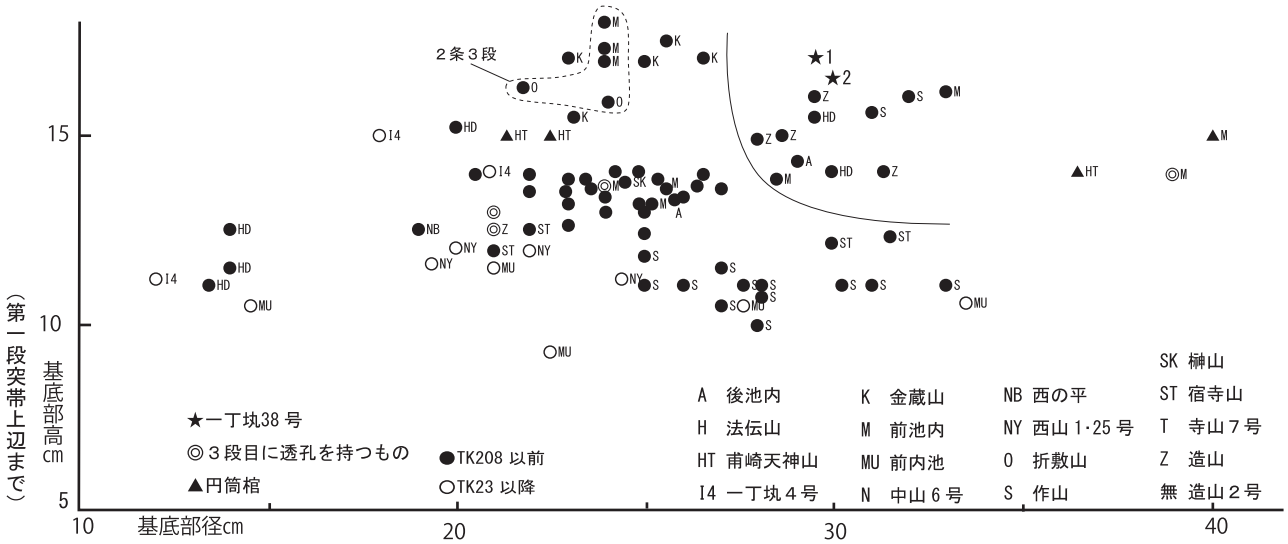
## ４　総括

一丁坑38号墳は、墳丘の南半分以上が削平され主体部も消滅していたが、周溝を有し、一辺15m以上の方墳であることが明らかとなった。墳丘上では、北辺と東辺の肩口中央に円筒埴輪が２基埋置され、周溝からは破砕された状態の埴輪・須恵器が出土した。埴輪の総出土量から換算して、墳丘上に樹立された埴輪は数本程度であったと見積もっている[6]。時期は降るが、墳丘上に間隔を空けて埴輪を配置した例として、前内池１号墳[7]が参考となるだろう。円筒埴輪のほか、朝顔・蓋・家など複数種類の形象埴輪が出土したことも特筆される。東周溝では炭を伴う土坑状のくぼみ、北周溝では集石もみつかり、多様な墳墓祭祀がうかがえる。

墳丘上に埋置されていた11・12の２基に共通する最大の特徴は円孔を３段目に一対穿つことで、同様の特徴を有する円筒埴輪は造山古墳、造山第２号古墳、前池内古墳群にある（第16図）。造山第２号古墳は造山古墳の陪塚、前池内古墳群は埴輪製作集団の墓とされ、造山古墳と密接な関わりがある古墳に限定的な分布状況を示す。ただし、伝造山古墳及び後二者は３条４段の小型品で、今のところ５条６段以上の確実な例は造山古墳にしかない。11・12は有黒斑・ヨコハケの特徴により川西編年Ⅲ期[8]に位置付けられるが、ここであらためて吉備の中での位置付けを考えてみたい。11・12は上半部を欠いているため口縁形態からの比較は不可能であるが、造山古墳周辺の埴輪では時期が降るにつれ第一段突帯の位置が低くなる傾向が確かめられており[9]、基底部の比較により検討を加えてみる。主に県南の５世紀代を中心とする古墳から出土した円筒埴輪の底径と基底部高（第一段突帯上辺までの高さ）を計測し、第17図に図示した[10]。土器を伴出した資料に限って概観すれば、陶質土器を伴う造山第２号古墳と榊山古墳[11]は径20～26cmで高13～14cm、ＴＫ73頃の法伝山古墳では径30cm弱で高14～15cmと径15cmで高11cmの２群に、西の平古墳でも径28cmと径20cm弱で高12cmの２群に分かれ、作山古墳では径30cm以上で高16cm前後と高11cm前後、径25～28で高11cm前後の３群に分かれている。作山古墳ではＴＫ216～208の須恵器片が表採されている。ＴＫ208の宿寺山古墳では径22cmで高11.5cm前後となり、ＴＫ23以降はおおむね径20cm未満で高10～12cmに集中する。このように、２条３段や円筒棺という特殊な器形を除き、従来指摘されてきたように古墳群ごとにある程度の規格性をもって径、高共に縮小していく傾向が明らかであり、11・12は造山古墳と同じ領域に含まれる。ただし、同じ古墳群内の一丁坑４号墳は径に比して基底部高が高く、この特徴が古墳群の特性を示す可能性もあるため注意を要するが、12のように筒部径が40cmを超える大型の円筒埴輪は管見では造山古墳にしか見当たらない。また、M字形の突帯や静止痕の不明瞭なヨコハケを突帯間に数段に分けて施す手法からも造山古墳と同段階にあることが首肯でき、規格と製作技法から造山古墳併行期に位置付けられよう。しかし、墳丘規模と埴輪の出土量から本墳で独自に埴輪生産が行われたとは考え難く、造山古墳と同じ




第16図　３段目に円孔を有する円筒埴輪（1/8）

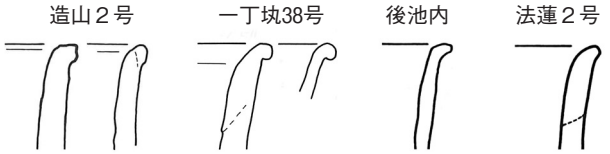



第17図　円筒埴輪の基底部径と基底部高の関係

製作集団から供給を受けた可能性が想起される。

次に、周溝出土の円筒埴輪であるが、いずれも細片で摩滅も著しく、基底部高や突帯間隔が計測可能な個体はない。そこで、口縁部形態に着目すると、造山古墳に特徴的な板状の貼付突帯や、強いヨコナデにより外反させて口縁端面を外に向けるものはないが、端部を折り曲げて突帯状に外方へ突出した特徴（13〜17）が認められる。このような特徴は造山第２号古墳にもみられ、２ｂ類に分類されている[12]が、15・16は丸味を帯び、17は鈎状を呈し、２ｂ類の後出的な形態とみなすことができよう。一方、後池内古墳[13]からは端部を丸く折り曲げた口縁部が出土しており、これは17の後出的な形態とみられ、第18図に示した形態変化を想定できる。これらのことから、周溝出土埴輪は造山第２号古墳と後池内古墳の間に位置付けられ、規格や須恵器から見た年代観とも整合している。しかしこのように考えた場合、大きな問題が生じてしまう。つまり、墳丘上と周溝内の円筒埴輪に時期差が生じることである。この差を理解するには、造山古墳と同格品の埴輪生産が周溝出土須恵器の示す時期まで続いていたか[14]、墳丘上の埴輪の入手から周溝における墳墓祭祀までにある程度の時間が経過したと考えねばならない。この問題についての答えを持ち合わせていないが、本墳が造山古墳と同格の円筒埴輪を有していた事実は注目すべきことである。このことは本墳の被葬者と造山古墳、すなわち吉備中央政権の間に強い繋がりがあったことを示唆している。宇垣匡雅氏は埴輪には「他との差・格付けを表示する」性格がある[15]とみる。その視点から見れば本墳はかなり上位に格付けられていたと言うことになる。本墳のように小方墳でありながら大型の円筒埴輪を有する古墳として前池内10号墳が知られているが、埴輪製作に関わっていたと推定されている[16]。上田睦氏の「墳丘規模や形態は盟主墳との力関係を現し、円筒埴輪の使われ方は盟主墳との繋がりの深さを表す」[17]との見解に従えば、本墳も前池内10号墳同様に、造山古墳を頂点とする吉備中央政権との政治的関係性の中で、造山古墳と同格の円筒埴輪がもたらされたと理解できよう。

吉備では、造山古墳の築造を契機として各地域の首長墳である前方後円（方）墳の築造が低調となり、かわって方墳が築かれる状況が各地で認められている[18]。葛原克人氏はこの現象を、造山政権下において階層化が進み、「下位区分としてほぼ等質的に方墳へと墳形の変容を余儀なくされた首長層が組織化されている」[19]と捉えた。一丁坦古墳群を含む秦地域でも、４世紀後半の秦大坦古墳以降、６世紀初頭の秦茶臼山古墳まで大型首長墳は確認されず、その間に本墳、一丁坦４号墳、一丁坦15号墳、金子２号墳といった一辺15m程度の方墳が築かれている。これらは確かに墳丘規模が小さいが、10m前後の小墳で構成される各支群においては支群中の主墳となり得る可能性がある。一丁坦４号墳は豊富な形象埴




第18図　口縁部形態の比較

輪を伴い、一丁坑15号墳及び金子２号墳は列石を有する二段築成の特異な構造で、本墳でも造山古墳と同格の円筒埴輪を有するなど、墳丘規模に似合わぬ内容を持つ。何より本墳では「首長墳－前方後円墳・大型方墳に保持された」[20]と考えられる蓋形埴輪を伴う点から、ここに、造山政権下で組織化された在地首長層の姿を求めたい。

円筒埴輪からは本墳と造山古墳との強い繋がりが看取でき、造山政権から非常に重要視されていた被葬者像が浮かび上がる。その背景には何があるのか、本墳の被葬者像を考えるに当たって、やはりこの地の持つ特性が重要な意味を持つと思われる。一丁坑古墳群は高梁川に面した丘陵上に築かれているが、ここはちょうど高梁川河谷と平野部との出入り口に当たり、丘陵上からは高梁川を行き交う舟が良く見渡せる場所である。状況証拠にしか過ぎないが、河川交通に関わる役割も一つの可能性としてあげられよう。秦という地名からは渡来人や渡来系技術との関与がうかがわれる[21]。

末筆になりますが、本稿をまとめるに当たって岡山市教育委員会、総社市教育委員会には便宜を図っていただき、野崎貴博氏、和田剛氏に有益な教示を賜りました。記して御礼申し上げます。

（渡邉）

註

（１）岡山県総社市教育委員会2014「一丁坑古墳群」・『総社市埋蔵文化財調査年報』などの調査成果から。

（２）岡山県教育委員会1994「後池内遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』89

（３）造山古墳からは６条７段、時期が降るが土井遺跡で５条６段の円筒埴輪が出土している。岡山市教育委員会2021「岡山県岡山市史跡造山古墳の調査」『考古学研究』68－２ 岡山県教育委員会2005「土井遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』191

（４）松木武彦1994「吉備の蓋形埴輪－器財埴輪の地域性研究に関する予察－」『古代吉備』第16集　古代吉備研究会

（５）窪木薬師遺跡は鉄器製作専業集団が居住したとみられる集落遺跡で、竪穴住居13からは５世紀前半の在地産初期須恵器や鉄鋌、鍛冶滓などが出土している。齋富遺跡竪穴住居58からは新羅系の陶質土器が出土している。

岡山県教育委員会1993「窪木薬師遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』86、岡山県教育委員会1996「齋富遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』105

（６）11・12を除く埴輪片の総重量は約56kgある。11・12はそれぞれ約９kgあり、残存状況から全体の1/2の重量として単純に２倍した18kgを完形１本分の重量と仮定した場合、３本分となる。径20cm、３条４段の小型品（前池内遺跡で約8.5kg、石膏含む）ならば6.6本となる。

（７）１辺９mの方墳で、墳丘肩口に円筒埴輪が３～４m間隔で３基埋置されていた。岡山県教育委員会2003「前内池古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』174

（８）川西宏幸1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64－２

（９）草原孝典2014「造山古墳の基礎的考察」『岡山市埋蔵文化財センター研究紀要』第６号

(10) 各報告書等に掲載された実測図から計測した。誤差はあろうが、おおむね傾向は反映していると考えている。

(11) ON231との見解が示されている。田中清美2017「吉備の須恵器生産の始まり」『古代吉備』第28集

(12) ２ｂ類に対応。岡山市教育委員会2000『造山第２号古墳』

(13) 後池内古墳は副葬された鏃の特徴から５世紀第２四半期頃の築造と考えられている方墳で、円筒埴輪のヨコハケには明瞭な静止痕が観察されている。前掲（２）

(14) 造山古墳の埴輪の位置付けは諸説あり、埴輪の供給が複数次行われたという考えもある。岡山市教育委員会1998『造山第４号古墳』に詳しい。

(15) 宇垣匡雅2002「宿寺山古墳の研究（１）」『環瀬戸内海の考古学－平井勝氏追悼論文集－』下巻

(16) 前掲（15）

(17) 上田睦2003「古墳時代中期における円筒埴輪の研究動向と編年」『埴輪論叢』第５号

(18) ａ葛原克人1992「造山古墳とその時代」『吉備の考古学的研究』（下）山陽新聞社

ｂ小郷利幸・小野雅明・草原孝典・高橋伸二・森宏之1995「岡山市足守地域の地域史的研究（3）－弥生時代と古墳時代前期、中期－」『古代吉備』第17集

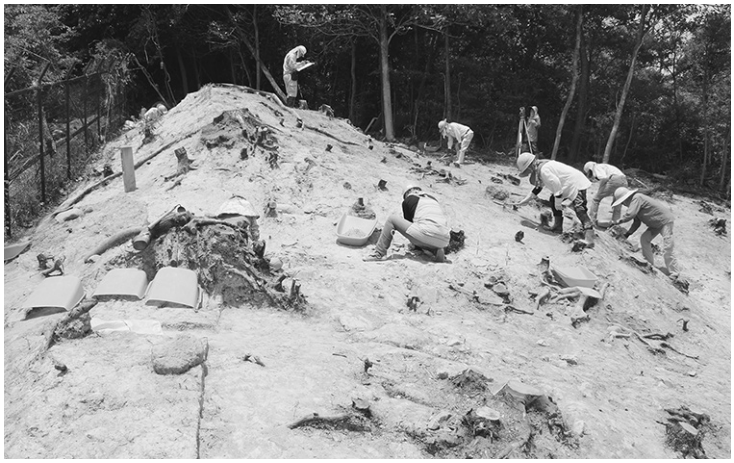
(19) 前掲（18）ａ

(20) 前掲（15）

(21) 秦氏は大阪府茨田堤や京都府葛野大堰の建設に携わったと伝えられる（『古事記』・『秦氏本系帳』）ように、土木技術にも高い水準を誇った集団であったと考えられる。

※紙幅の関係から全ての文献を記載できていない。各遺跡の内容はそれぞれの報告書を参照されたい。

1　遺跡上空から東を望む　　令和元年６月撮影



2　古墳全景（南東から）

4　埴輪１出土状況（南から）

3　古墳全景（北東から）

5　埴輪２出土状況（西から）

６　古墳出土遺物

# 周匝茶臼山城跡と大仙山城跡 ―宇喜多氏による改修、築城の可能性を巡って―

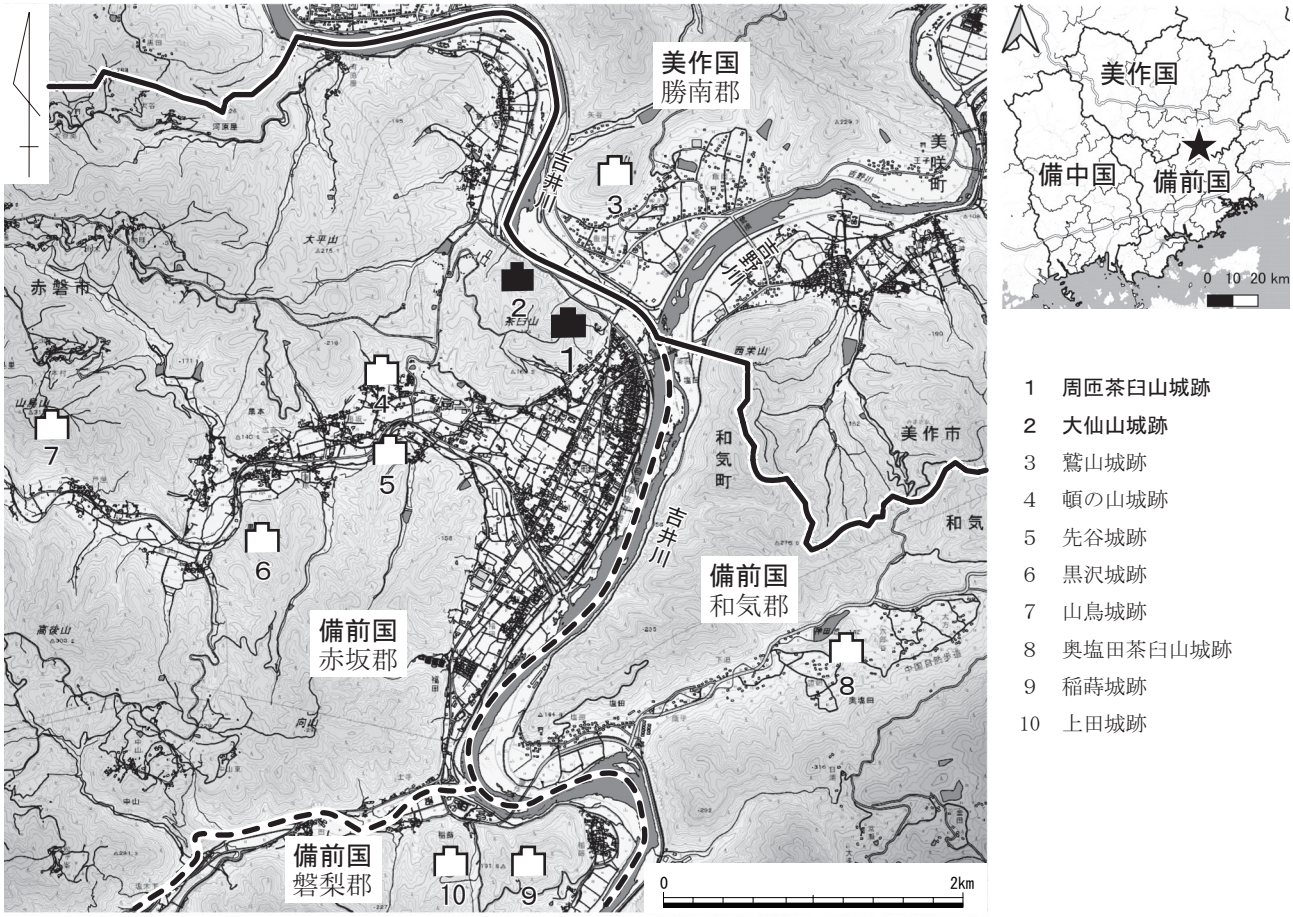
和　田　　剛

## はじめに

周匝茶臼山城跡と大仙山城跡は赤磐市周匝に位置する（第１図）。この両城は同一の山塊上に500mと近接して築かれている。また、両城の位置する周匝は、備前・美作国の国境にあたっており、中国山地をその淵源とする吉井川、吉野川という２つの河川の合流地点でもある。加えて備前国赤坂郡、和気郡、そして美作国勝南郡の３郡郡境でもある。さらに、城下には江戸時代に岡山藩六官道の一つに数えられた倉敷往来が走っている。つまり、周匝茶臼山城跡と大仙山城跡は河川・陸上交通路と、国・郡境という政治領域の結節点に位置しているのである。こうしたことから、両城の占める地政学的な地位の高さがうかがえる。

周匝茶臼山城は『備陽記』(1)、『備前軍記』(2)といった地誌類、軍記物に登場する。これらの記載によれば周匝茶臼山城跡は備前国の戦国大名である浦上宗景の勢力下にあり、その配下の国衆・地侍である星賀藤内、あるいは佐々部勘二郎が城主であったとする。一方、大仙山城跡については一切の記録に登場しない。

さて、筆者は平成30年５月に両城を実地踏査し、縄張り図を作成した。その結果、両城併せた規模は東西約700m、南北約400mにも及ぶことが明らかとなった。両城を一体の城として見る場合、その規模は備前国第２位となる。また、個別の城としてみても、周匝茶臼山城跡の面積(3)は約27,000㎡、大仙山城跡にいたっては約35,000㎡に達する。これは備前国東部の城としては傑出した規模であり、主家であるはずの浦上宗景の居城、天




第１図　周匝茶臼山城跡と大仙山城跡の位置（右1/3,000,000　左1/50,000）

※背景地図は国土地理院発行の国土地理院基盤地図情報を基に作成

神山城跡の面積（約25,000㎡）を凌駕する。また、その縄張りは土塁、横堀、虎口、畝状空堀群を伴うもので、備前国東部の山城としては異例の発達を見せている。さらに周匝茶臼山城跡では吉井町教育委員会により実施された発掘調査により、岡山県内の山城としては最大量とも言える遺物が出土している[4]。筆者はこうした周匝茶臼山城跡と大仙山城跡の示す特徴が、浦上宗景配下の一国衆の詰城に比定されうるものかについて疑念を抱いた。そこで本稿では、この両城の城郭史上の位置づけについて、規模、立地、縄張りの３点から考察を深めることを目的とする。結論を急ぐならば、周匝茶臼山城跡と大仙山城跡に現在見る縄張りは浦上氏退去後に、宇喜多氏により改修、築城されたものと考える。

## １　これまでの研究

本章で周匝茶臼山城跡と大仙山城跡に関する研究史をまとめる。その上で、本稿における分析の視点について言及する。

先述したとおり、周匝茶臼山城跡は近世地誌類、あるいは軍記物にその名が見える。だが、城郭構造そのものに触れた初出は『改修赤磐郡誌』[5]である。この中で周匝茶臼山城跡には「本丸、二の丸、太鼓の丸」という３つの曲輪が遺存するとしている。

その後、出宮徳尚氏が『日本城郭大系』の中で周匝茶臼山城跡の縄張りについて触れている。氏は周匝茶臼山城跡を浦上方の笹部（佐々部）氏等、有力名主（小国人）により築城されたとする。その上で、山頂部の本丸に対して二の丸は「出丸」的な性格を有すること。加えて麓にある太鼓の丸については、「根小屋（居館）」として構えられたとする。さらに、大仙山城跡について、茶臼山城の出城であると指摘している[6]。

平成元（1989）年、村田修三氏が周匝茶臼山、大仙山両城跡の縄張り図を公刊した。結果、両城とも畝状空堀群を備えること。大仙山城跡はこれに加え虎口、横堀、連続堀切を備え、より発達した縄張りとなっていることが明らかとなった。また、周匝茶臼山城跡は国人層の居城であるとする。その一方、大仙山城跡は戦国大名クラスが築いた「陣城」であると指摘している[7]。

この翌年、周匝茶臼山城跡の発掘調査成果が公刊された。この中で長径約９m、深さ約4.5mを測る大型竪穴遺構の検出されたことが報告されている。また報告者である松本和男氏は、周匝茶臼山城の築、廃城時期を出土遺物の年代から、16世紀前半～後半に絞り込んだ。さらに周匝茶臼山城跡と大仙山城跡の関係についても触れている。氏は周匝茶臼山城跡について天文年間に尼子氏の侵攻に備えた段階と、天正年間に宇喜多氏との戦いに備えて大仙山城跡と併せて再整備された段階の二時期が存在するとの仮説を提示した[8]。

1992年に刊行された『吉井町史』では、編者である伊藤晃氏が周匝茶臼山城跡について天文年間に尼子氏の侵攻に備えて築城されたと指摘している。また、大仙山城跡については天正年間に宇喜多氏との戦いの備えて新たに築かれたものであると指摘している。周匝茶臼山城跡の畝状空堀群も、この時に一体のものとして改修されたとする[9]。

続いて畑和良氏が周匝茶臼山城跡の沿革について同時代史料から検討を加えた。氏の見解に従えば、天文２（1551）年10月から翌月にかけて、出雲国の尼子晴久が軍勢を率いて美作・備前国境へ進出した。その際、尼子勢は「備前すさい」付近まで到達したとする。この時、周匝茶臼山城は浦上氏の勢力下にあったが、尼子氏の攻略により落城したという[10]。

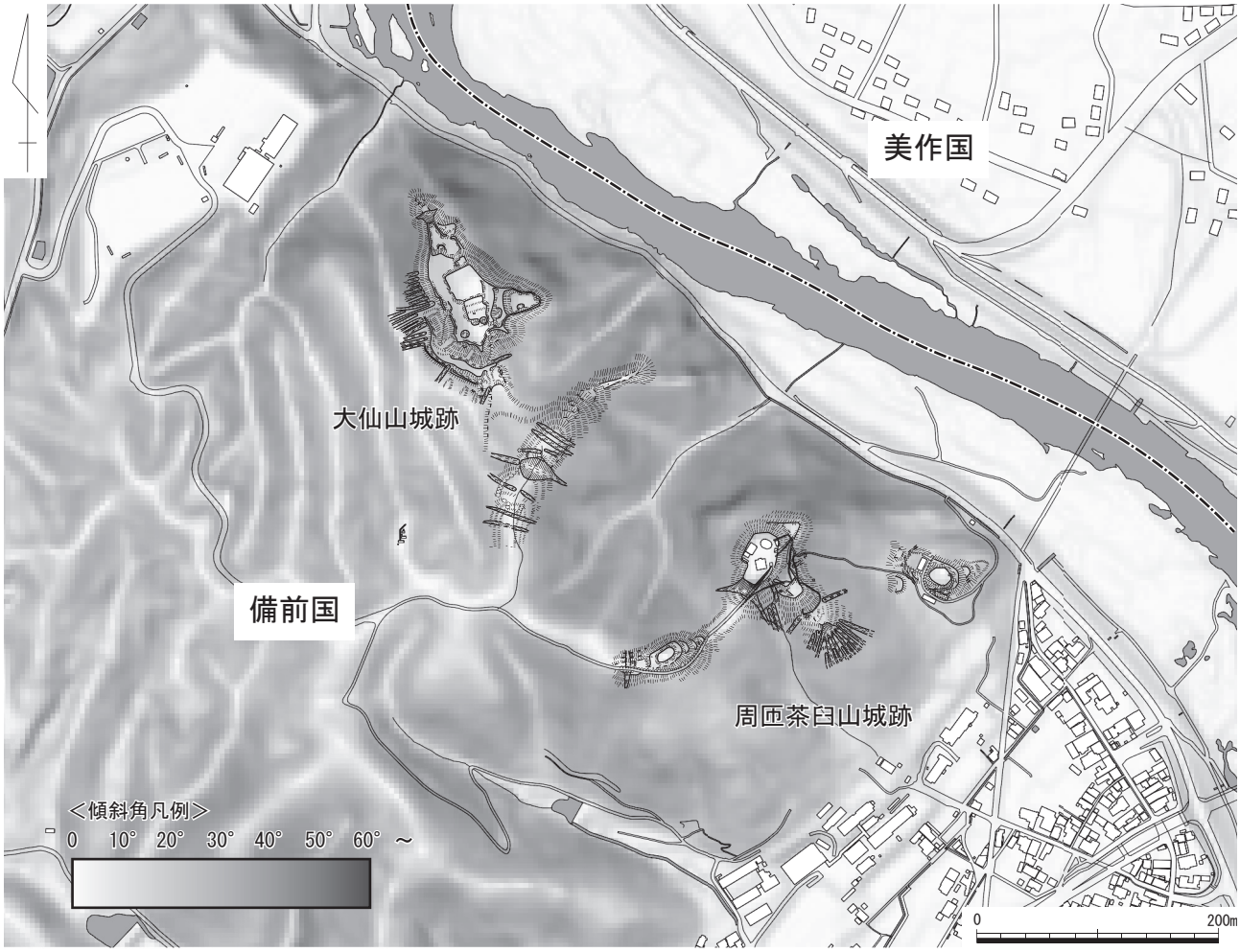
そして2020年、岡山県古代吉備文化財センターが『岡山県中世城館跡総合調査報告書』を刊行した。その総括編において中井均氏は周匝茶臼山城跡と大仙山城跡について触れている。氏は岡山県下の畝状空堀群を３つに分類した。周匝茶臼山城跡はこのうち山城（曲輪を意味するものか、筆者註）の先端部に畝状空堀群を設ける①類に比定する。一方、大仙山城跡は山城の側面に構えられる②類に比定している。特に大仙山城跡の例は土塁、横堀と併用して用いる、「最終形態」の縄張りと評価した。また、こうした発達した畝状空堀群について臨時的な「陣城」として構えられたものと指摘した[11]。

以上のように、周匝茶臼山城跡と大仙山城跡に関しては多くの論者が浦上氏との関わりを想定している。また、周匝茶臼山城跡は天文年間に尼子氏との戦いに用いられた後、天正年間における改修により畝状空堀群が構えられたと推定されている。一方、大仙山城跡については、茶臼山城跡と同時期の「出城」とする見解と、天正年間に「陣城」として築かれた見解の２つがある。

しかし、周匝茶臼山城跡に関しては、城郭の規模、立地、あるいは縄張りといった城郭そのものの属性に基づく評価ではなく、歴史資料、それも編纂物の記述に依拠する見解である。また、大仙山城跡についてはその性格付けについて一致を見ていない。そこで本稿では３つの視点から、両城の特性について検討する。まず第１に統計的な検討を行う。ここでは『岡山県中世城館跡総合調査』の成果を援用し、両城の全長と比高について、備前国の他の城郭と比較する。第２に城郭の構造と縄張りを構成するパーツ、遺構に着目し、城郭分類から見た両城の位置づけを検討する。第３に縄張り評価を加える。ここでは筆者が作成した縄張り図を基に、その縄張り評価を掘り下げる。最後にこれら検討成果を基に、両城の編年的位置づけと築城主体について考察を行う。

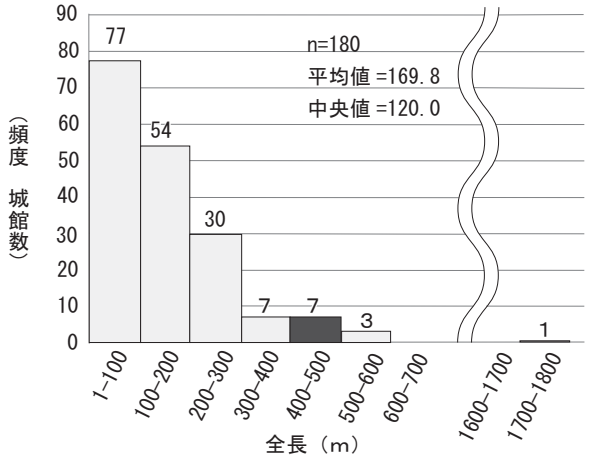
## ２　周匝茶臼山城跡と大仙山城跡の地理的位置

ここでは、周匝茶臼山城跡と大仙山城跡についての詳細な検討に入る前に、両城の地理的な位置について再確認をしておく（第２図）。なお、第２図では地形図に傾斜区分図を重ねてある。これは地形の傾斜角度（0°～60°）を色の濃さで段階的に示している。まず地形と地質について見ていく。周匝茶臼山城跡と大仙山城跡は周匝盆地の北部にある茶臼山山塊上に位置する。その北麓には吉井川が南流している。この吉井川が備前・美作の国境にあたることから、両城はまさしく境目の城である。その標高は160m、周匝盆地からの比高は110mをそれぞれ測る。茶臼山は吉備高原帯に属し、その地質はハンレイ岩、あるいは結晶片岩からなる。また、吉井川が開削した峡谷の出口でもある。茶臼山の北側斜面は傾斜角60°近い崖となっている。そのため、北方向から両城への登坂は困難である。一方、山頂は傾斜角10°以下の尾根筋となっており、侵入は容易である。

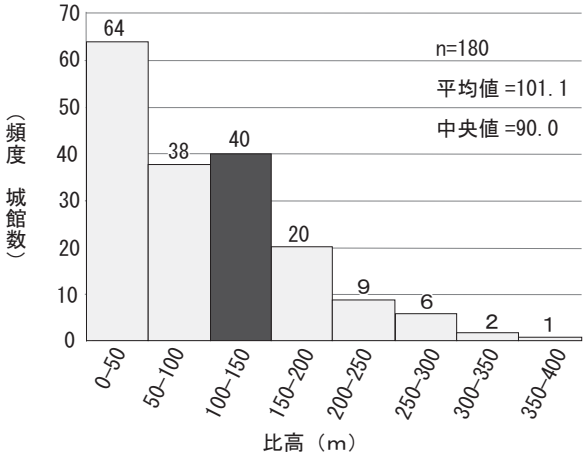



第２図　周匝茶臼山城跡と大仙山城跡の位置関係と傾斜区分図（1/5,000）

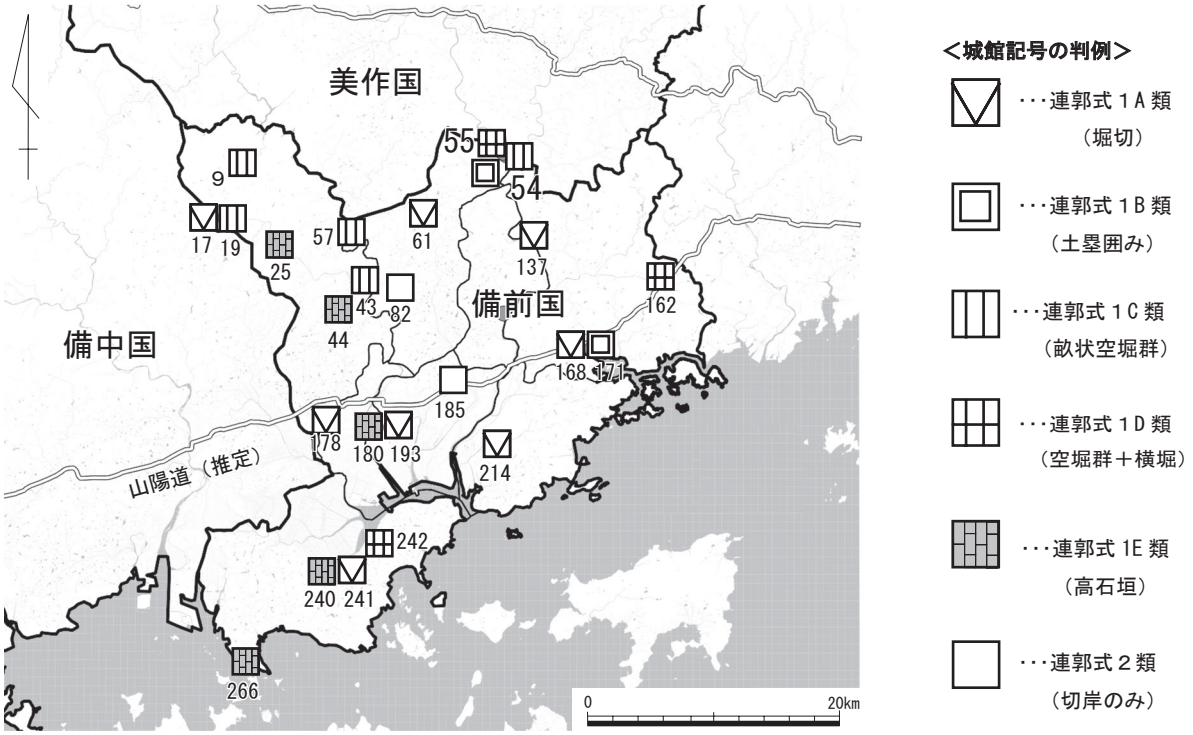
※背景地図は国土地理院発行の国土地理院基盤地図情報を基に作成




第３図　備前国の城郭の全長度数分布図




第４図　備前国の城郭の比高度数分布図




第５図　備前国の全長300mを超える城郭の分類と分布(1/600,000)　※背景地図は国土地理院発行の国土地理院基盤地図情報を基に作成

表１　備前国における全長300mを超える城郭の一覧と分類

| 番号 | 城館跡名 | 比高 | 全長 | 分類 |
|---|---|---|---|---|
| 9 | 常江田城跡 | 80 | 300 | １C |
| 17 | 藤沢城跡 | 120 | 500 | １A |
| 19 | 福山城跡 | 160 | 430 | １C |
| 25 | 虎倉城跡 | 230 | 500 | １E |
| 43 | 金川城跡 | 170 | 550 | １C |
| 44 | 徳倉城跡 | 160 | 450 | １E |
| 54 | 茶臼山城跡 | 110 | 440 | １C |
| 55 | 大仙山城跡 | 110 | 420 | １D |
| 57 | 白石城跡 | 80 | 300 | １C |
| 61 | 宮内城跡 | 80 | 460 | １A |
| 65 | 黒沢城跡 | 110 | 300 | １B |
| 82 | 木山城跡 | 100 | 300 | ２ |
| 117 | 保木城跡 | 90 | 400 | １A |
| 137 | 天神山城跡 | 290 | 450 | １A |
| 162 | 三石城跡 | 220 | 300 | １D |
| 168 | たい山城跡 | 140 | 380 | １B |
| 171 | 富田松山城跡 | 200 | 320 | １B |
| 178 | 富山城跡 | 110 | 300 | １A |
| 180 | 岡山城跡 | 10 | 1800 | １E |
| 185 | 亀山城跡 | 20 | 420 | ２ |
| 193 | 明禅寺城跡 | 90 | 300 | １A |
| 214 | 砥石城跡 | 90 | 390 | １B |
| 240 | 常山城跡 | 300 | 350 | １E |
| 241 | 麦飯山城跡 | 210 | 590 | １A |
| 242 | 両児山城跡 | 50 | 320 | １D |
| 266 | 下津井城跡 | 80 | 600 | １E |

## 3　周匝茶臼山城跡と大仙山城跡の規模

ここでは『岡山県中世城館跡総合調査』の成果を基に、両城の規模について検討する。第３図は備前国における城館の全長[12]の度数分布図である。これによると、全長100m以下の城が最も多く（77城）、これに全長100～200mの城郭が続く（54城）。それ以上は全長が大きくなるほど城郭数が減り、全長300mを超える城は18城を数えるに留まる。また、全長300m未満と全長300m以上のデータ区間に大きな格差があることから、これを境に大型、小型城郭の２つに分けることができる。ここで周匝茶臼山城跡、大仙山城跡の両城を見ていくと、周匝茶臼山城跡は全長440m、大仙山城跡は420mをそれぞれ測る。これは第２図の400～500mのデータ区間に該当（黒塗り部分）する。このことから、両城は大型城郭に比定できる。

続いて比高の度数分布図を見ていく（第４図）。これによると全長50m未満の城が最も多く（64城）、これに全長50～100mの城が続く（38城）。周匝茶臼山城跡と大仙山城跡の比高はいずれも110mである。従って、黒塗りとした100～150mのデータ区間に該当する。備前国の城郭の比高平均値は101.1mであり、平均値をやや超える値となっている。そのため山城適地にあたると言えるだろう。

## 4　パーツから見た周匝茶臼山城跡と大仙山城跡

### 城郭分類から見た周匝茶臼山城跡と大仙山城跡

ここでは縄張りを構成するパーツ、遺構による城郭分類から見た両城の特性について見ていく。城郭を構成するパーツについては松岡進氏が整理を行っている。氏によれば城郭を構成するパーツは堀切、竪堀等、侵入者の城内への侵入を阻む「遮断系」技術により設けられるものと、虎口、馬出等、侵入者を導線にそって動かし、これに打撃を加える「導入系」技術によるものに大別されるとする[13]。しかしながら中西義昌氏が指摘するとおり、備作地域における山城においては「導入系」技術を洗練させ、主郭への求心性を高めた「織豊系城郭」の導入は天正10（1582）年代まで遅れる。その一方で、土塁、横堀、畝状空堀群を組み合わせた防塁型ラインにより、城域の外周部を取り囲む縄張りプランをもつ「在地系城郭」が主流を占めるとする[14]。すなわち、備作地域おける山城においては松岡氏の言う「遮断系」パーツこそが、城郭分類の指標になり得るのである。

そこで本稿では、山城そのものの曲輪構成と防御型ラインを形成する「遮断系」パーツの組み合わせによる分類を試みたい。すなわち、単一の曲輪からなる単郭式山城と複数の曲輪からなる連郭式[15]山城に分ける。さらに、何らかの遮断系パーツを採用する山城を１類、何らの遮断系パーツを採用せず、切岸のみ防御線とする山城を２類とする。１類について「堀切」、「土塁囲み[16]」、「畝状空堀群[17]」、「高石垣[18]」の４つの遮断系パーツを取り上げ、その組み合わせに基づき分類を試みる。今回、分類の対象としたのは、先ほど確認した備前国における大型城郭、すなわち全長300mを超える城郭である。分類の結果、備前国における大型城郭は以下の６類型にすることができた。

連郭式１Ａ類…連郭式で堀切を採用するもの。
連郭式１Ｂ類…連郭式で土塁囲みを採用するもの。
連郭式１Ｃ類…連郭式で畝状空堀群を採用するもの。
連郭式１Ｄ類…連郭式で畝状空堀群と横堀を採用するもの。
連郭式１Ｅ類…連郭式で高石垣を採用するもの。
連郭式２類…連郭式で切岸のみを採用するもの。

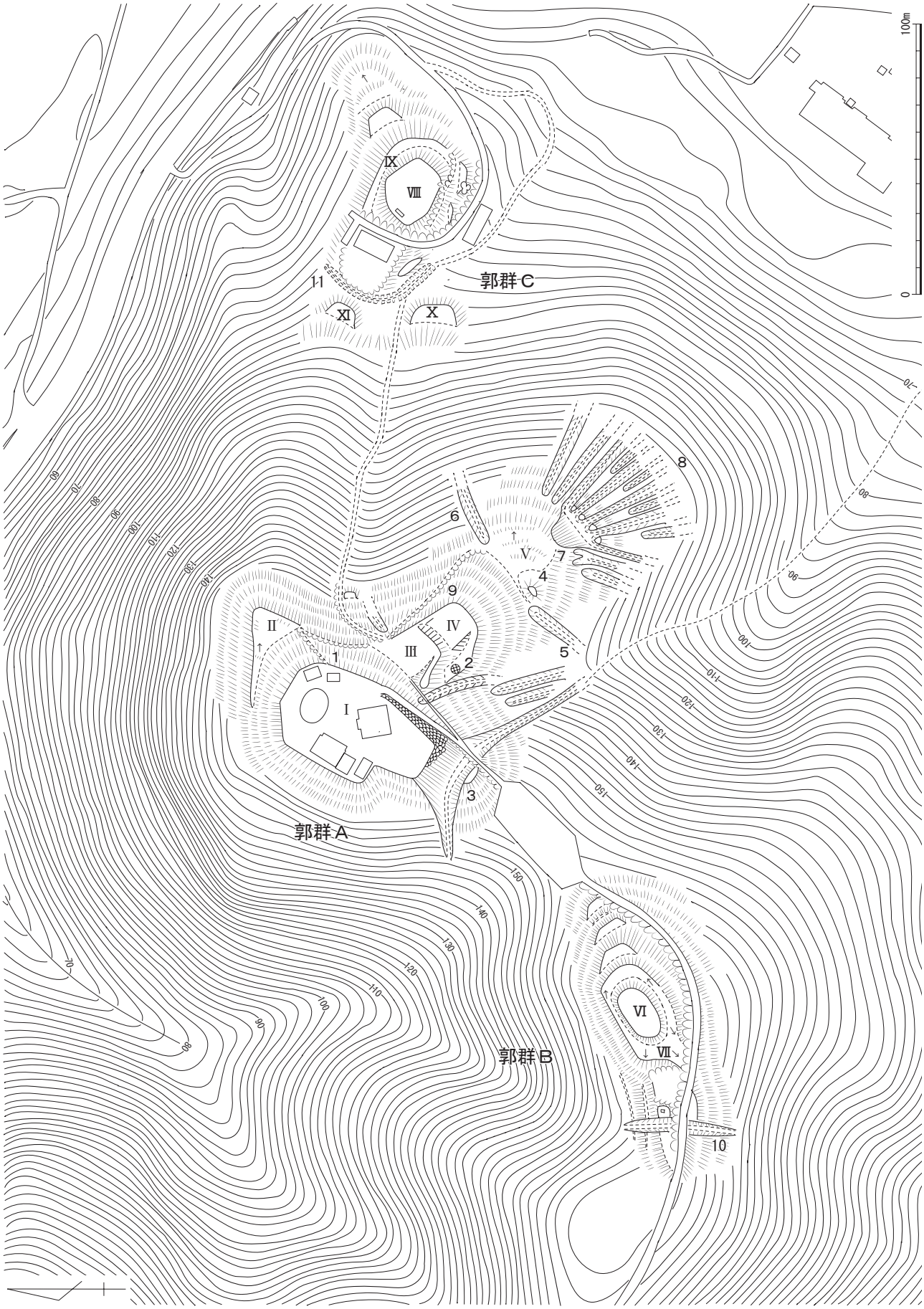
このうち、周匝茶臼山城跡は畝状空堀群を備えることから連郭式１Ｃ類、大仙山城跡は畝状空堀群と横堀の両者を備えることから連郭式１Ｄ類にそれぞれ該当する。

### 城郭分布から見た周匝茶臼山城跡と大仙山城跡

続いて、分類別に見た城郭の分布を確認しておきたい。第５図には分布を、表１には分類の対象とした城館の一覧を掲載している。

第５図によると、備前国の大型城郭において最も普遍的に見られるのは連郭式山城１Ａ類である。このうち、浦上宗景の本城である天神山城跡（報告書掲載番号137、以下同じ）と浦上氏配下の国衆である羽床氏の城と伝わる宮内城跡（61）の両城は、畑和良氏の検討により天文20（1551）年、天文23（1554）年に、浦上氏と尼子氏が干戈を交えた故地とされる[19]。

続いて周匝茶臼山城跡と同じ連郭式山城１Ｃ類について見ていくと、常江田城跡（９）、福山城跡（19）や白石城跡（57）等、いずれも備前国の周辺部、特に美作




第６図　周匝茶臼山城跡縄張り図（1/2,000）※背景地図は国土地理院発行の国土地理院基盤地図情報を基に作成

国、あるいは備中国との国境領域に多いことを指摘できる。特に福山城跡では天正年間に毛利氏配下の国衆の入城記録が残る[20]。一方、白石城跡には天正年中に宇喜多氏配下の明石氏により築城された記録がある[21]。

次に大仙山城跡の属する連郭式１Ｄ類を見ていく。この類型は大仙山城跡を除くと、わずかに三石城跡（162）と両児山城跡（242）の２城を数えるのみである。これら３城は横堀、畝状空堀群以外に、虎口、土塁囲みとなる曲輪まで備える点も共通している。その分布を見ると備前国と播磨国、あるいは美作国との国境付近に分布する。唯一、両児山城跡のみが国境地帯にはない。だが、両児山城跡は天正10（1582）年２月に毛利氏と宇喜多氏との間で勃発した八浜合戦において、宇喜多氏の陣所となった記録が残る[22]。

以上の分析から周匝茶臼山城跡、大仙山城跡の属する連郭式１Ｃ類、１Ｄ類ともに国境地帯、それも広域権力間の境目領域に分布する傾向を指摘できる。

なお、連郭式１Ｂ類は富田松山城跡（171）のみである。富田松山城跡は最大長約40ｍを測る、土塁囲みとなる曲輪を備える。その周囲に削平段が見られ、多数の兵を入れる駐屯基地として機能したものかと考える。連郭式山城１Ｅ類は岡山城跡（180）、虎倉城跡（25）などが見られ、その分布は備前国東部に集中している。これらは備前国東部の防御を固めるために築かれたものと推察する。また、連郭式２類の城として軍記物等で宇喜多直家の居城とされる亀山城跡（185）が挙げられる。しかし、この城は後世の改変が著しく、築城当時の縄張りについては疑問を残す。

## ５　周匝茶臼山城跡と大仙山城跡の縄張り

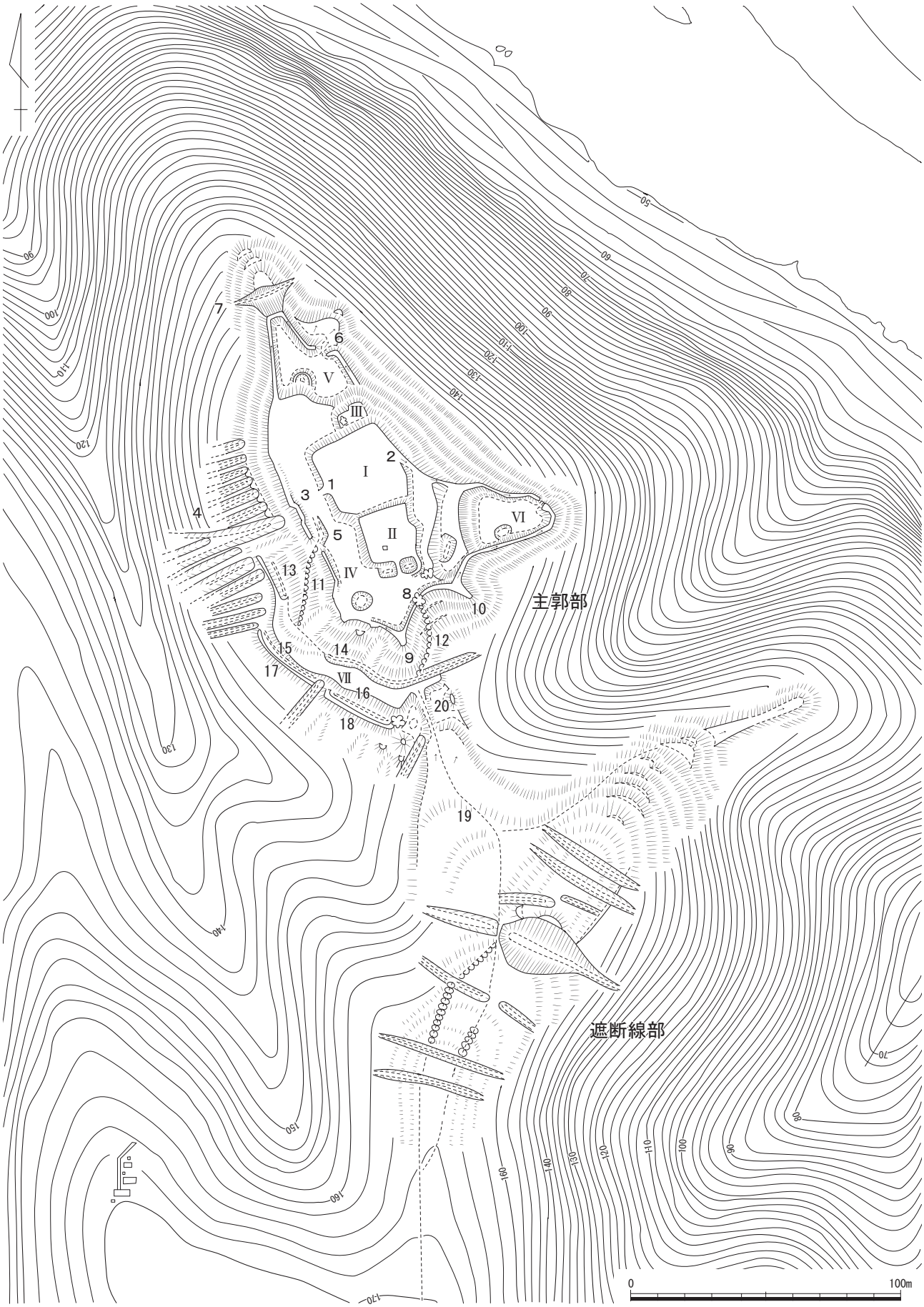
ここでは、周匝茶臼山城跡と大仙山城跡の縄張りについて、筆者が改めて作成した縄張り図を基にその評価を掘り下げる。

### 周匝茶臼山城跡の縄張り（第６図）

周匝茶臼山城跡は、全長440ｍ、比高110ｍを測る連郭式１Ｃ類の山城である。字「茶臼山」の山頂から山麓にかけて展開する。城域は３つの郭群に分かれており、遠心的な縄張りと言える。さらに各郭群はそれぞれ堀切を備えており、完結した縄張りとなっている。ここではそれぞれ郭群Ａ、Ｂ、Ｃと仮称し、縄張りの詳細について見ていく。

郭群Ａ（通称本丸）は主郭Ｉを含む城内最大の郭群である。その最高所に主郭Ｉを配する。主郭Ｉは南北60ｍ、東西35ｍを測り、城内では最大の曲輪である。平面形は鈎型を呈し、その類線は直線的である。主郭南西側は入隅となっており、切岸を登る侵入者に対して横矢を掛けることができる。現在は模擬天守の立つ東側に入口が設けられているものの、築城当時の虎口の位置は明確ではない。しかし、主郭Ｉの北東に城下から続くつづら折りとなる山道の取り付口１がある。この取り付口１は現状、変電施設などにより改変を受けているものの、つづら折りとなる道が切岸下の曲輪Ⅱ、Ⅲと連絡することから、本来は虎口であった可能性を想定したい。主郭Ｉの北に曲輪Ⅱ、東にⅢ、Ⅳの３面の曲輪が連なる。主郭と周囲の曲輪を隔てる切岸は高さ約８ｍを測る。曲輪Ⅲ、曲輪Ⅳとも平面形は方形を呈する。曲輪Ⅳの西に井戸２が位置する。主郭Ｉの西側尾根筋は深さ約８ｍを測る堀切３により遮断する。堀切３の東側先端は竪堀状となり、20ｍ以上も谷底へ向かって延びている。この堀切３の東側に３本の竪堀が配される。この内１本は主郭の直下まで達している。また、竪堀に対しては曲輪Ⅲ、Ⅳから横矢が掛かる。曲輪Ⅳの南東には不整形な曲輪Ⅴが配される。この曲輪Ⅴの西には土塁の残欠と思われる高まり４が見られる他、曲輪Ⅴに接続するように竪堀５、６がそれぞれ東西方向に延びている。高まり４と竪堀５、６の位置関係から見て、もともとは１条の堀切であったものが、曲輪中央部が削平されたことにより２本の竪堀に分断されたものと考える。曲輪Ⅴの南東には深さ約５ｍ測る堀切７が掘削されている。この堀切は畝状空堀群８と連接している。畝状空堀群８は全部で12本の竪堀からなり、曲輪Ⅴに対して放射状に掘削されている。その他、曲輪Ⅲの西から曲輪Ⅴまでを連絡する山道９がある。この山道９には曲輪Ⅲ、Ⅳからの側射が可能なことから、城道であった可能性を想定したい。

曲輪群Ａから西へ100ｍの位置に、郭群Ｂ（通称二の丸）が位置する。その規模は南北約50ｍ、東西120ｍを測る。最高所に曲輪Ⅵを配する。曲輪Ⅵの平面形は長楕円形を呈し、長径約20ｍ、短径10ｍを測る。曲輪Ⅵの周囲には腰曲輪Ⅶが配される。腰曲輪Ⅶの西側尾根筋には、堀切10を配して遮断する。




第７図　大仙山城跡縄張り図(1/2,000)　和田作図　※背景地図は国土地理院発行の国土地理院基盤地図情報を基に作成

郭群Ａの東約100m、比高90m下に郭群Ｃ（通称太鼓の丸）が位置する。郭群Ｃは東西約100m、南北約60mを測る。城内では最も麓に近い位置にある郭群である。その最高所に曲輪Ⅷを配する。その平面形は不整な円形で、直径は約20mを測る。曲輪Ⅷの周囲には腰曲輪Ⅸが取り巻いている。曲輪Ⅷの西側は現状水道施設により改変を受けているものの、その位置関係から見てこの位置にも曲輪のあった公算が大きい。水道施設の西側鞍部には深さ約１mを測る溝が見られる。この溝には麓から続く道が取り付いている。この溝はその位置と形状から考えて、本来は堀切であった可能性が高い。この堀切11の西側にも曲輪Ⅹ、Ⅺが配される。腰曲輪Ⅸの北東にも爪形の曲輪が見られるが、その先端の造作は判然とせず、自然地形に近い。

以上、周匝茶臼山城跡の縄張り上の特徴についてまとめると、第１に３つの独立した郭群が並立していること。第２に郭群１に集中的な防御型ライン（大型堀切、畝状空堀群、城道）が形成されていること。第３にその一方で郭群２、３の規模は小型で、その造成も判然としない、という３点に集約できる。郭群１はその規模も他の郭群から傑出している。そのため、この郭群のみで完結した防御機能を果たすことができたと考える。

大仙山城跡の縄張り（第７図）

大仙山城跡は全長420m、比高110mを測る連郭式山城１Ｄ類の山城である。城域は連接する２つの尾根上に展開する。その北側の尾根頂部は主郭部にあたり、その外周には畝状空堀群と横堀により遮断線が築かれている。一方、南側は連続堀切と竪堀により遮断線群が形成されている。さらに、これらを連接させることで求心的な防御型ラインが形成されている。また、城内へ入るには主郭部北東側の急斜面を登坂するほか、主郭部西側の谷から回り込むか、南側の尾根筋を経由する３つのルートが想定される。ここでは北側の主郭部と南側の遮断線部とに分けて、縄張りの詳細について見ていく。

主郭部分の最高所には一辺約30mを測る正方形の主郭Ⅰが配される。主郭Ⅰの東、西の両方向に虎口１、２が設けられている。虎口１は平入りであるが、虎口２は坂虎口となっている。そのため、主郭Ⅰから虎口２へ横矢が掛かる。主郭Ⅰの南にも一辺約20mを測る正方形の曲輪Ⅱが連なる。この２つの曲輪と、主郭Ⅰの北に位置する、平面Ｌ字形の小曲輪Ⅲがこの城の主要な曲輪群を構成している。この曲輪群の西には南北約100m、東西約30mを測る腰曲輪Ⅳが配される。腰曲輪Ⅳの西側には、高さ約0.5mを測る土塁３が見られる。土塁３は直下の畝状空堀群４に対応するものである。畝状空堀群４は現状14本確認できる。土塁３の中央部分には幅約7.0mを測る開口部があり、虎口５が設けられている。虎口５から城内へ入るには虎口内部で侵入方向を東から90°北へ屈曲させなければならない。こうしたことから、虎口５は内枡形状を呈していることとなる。

主郭のある主郭部北東は急斜面であると述べた。しかし、この方面への防御も怠ってはおらず、土塁囲みとなる曲輪Ⅴ、Ⅵを設けている。いずれも高さ約1.5～３mを測る土塁により囲繞されている。曲輪Ⅴ、Ⅵの先端には虎口が見られる。特に虎口６は折れ曲がった類線が後方の曲輪と一体となる喰違虎口となっている。敵兵が北方向から主郭部へ侵入を試みた場合、最北部に位置する堀切７を迂回し、この虎口６へ入ることになる。この際に曲輪Ⅴより土塁越しに横矢が掛かる。仮に曲輪Ⅴ内部へ敵兵の侵入を許しても、上位の腰曲輪Ⅳへ退却し、新たな防御線を形作ることが可能となっている。つまり、主郭周囲に重層的な防御型ラインが形成されている。

腰曲輪Ⅳの南に、崩落８が認められる。これは位置と形状から見て、もともとは虎口であった可能性が高い。この崩落８を挟み込むように、その東西にＶ字形に突出する櫓台９、10が見られる。

虎口５、崩落７はその直下の腰曲輪Ⅶまで道11、12により連絡している。山道11に対しては、腰曲輪Ⅳから、山道12に対しては櫓台９、10から側射を浴びせることが可能となっている。こうしたことから、いずれも城道として設けられていた可能性が高い。腰曲輪Ⅶには切岸直下に横堀13、14、曲輪の南西側に横堀15、16が掘削されている。いずれも幅約４～５mを測る点は共通している。だが切岸直下の横堀13、14が深さ約１mを測るのに対して、横堀15、16は深さ約２～2.5mを測る。横堀15、16には土塁17、18が伴っている。横堀15、16はその形状から考えて、主郭部南西からの敵兵を阻む、塹壕状の施設であると考える。一方、横堀13、14は切岸下に取り付く敵兵の足留めを意図した溝状の施設であると考える。また、仮に敵兵が横堀15、16を突破して

腰曲輪Ⅶへの侵入を許したとしても、腰曲輪Ⅳへ退却し、横堀13、14、虎口６を新たな防御型ラインとすることが可能である。つまり、この地点においても重層的な防御型ラインが形成されている。

次に南側の遮断線部について見ていく。この遮断線部は連続堀切６条と２本の竪堀からなる。この地点の標高は約160ｍを測り、主郭部のそれに等しい。そのため、この地点に敵兵の侵入を許せば主郭部への監視が容易となり、攻略のための橋頭堡となる。遮断線部はこの橋頭堡化を防ぐ意図をもって掘削されたと考える。また南の尾根筋から主郭部へは道19により連絡する。道19を経由して腰曲輪Ⅶへ入る直前に土橋20が設けられている。土橋20は幅約２ｍ以下しかなく、遮断線部からの進入路を狭めている。

以上、大仙山城跡の縄張り上の特徴をまとめると、第第１に城域が主郭部と遮断線部の２つに分かれること。第２に主郭部と遮断線部を道、土橋により連接させる求心的な構造をなすこと。第３に主郭部周囲に重層的な防御型ラインが形成されていること、という３点に集約される。特に多重横堀と虎口、道を組みあわせた防御型ラインの形成されている点は、最大の特徴と言える。

## ６　考察

ここではこれまでの分析成果をもとに、両城の編年上の位置づけと築城主体について考察する。

まずその規模について改めて検討しよう。表１で示したとおり、周匝茶臼山城跡と大仙山城跡の規模は天神山城跡（290ｍ）、福山城跡（430ｍ）といった浦上氏、あるいは毛利氏が拠点とした城郭のそれに匹敵することはすでに述べた。加えて天文年間に宇喜多氏総領の地位にあったとされる宇喜多大和守[23]の城である砥石城跡（390ｍ）を凌駕し、宇喜多直家が拠点とした亀山城跡（420ｍ）に匹敵する[24]。城郭の規模は築城とその維持管理を可能にする築城主体の政治力と相関していることは疑うべくもない。従って、両城とも在地国人の城ではなく数郡、あるいは国境を越える領域を知行する、広域権力体により築城されたと考えるのが妥当であろう。

次に縄張りついて検討していこう。まず周匝茶臼山城跡は畝状空堀群を備える連郭式山城１Ｃ類であった。この連郭式山城１Ｃ類のうち、築城年代の明らかなものとして、白石城跡がある（第８図）。この城は主郭Ｉの北に堀切と複合する畝状空堀群１、２が設けられている。畝状空堀群は主郭Ｉに対してその先端を向けるように掘削している。このように、畝状空堀群が上位の曲輪に対して集中するような指向性を見せることは、周匝茶臼山城跡のそれと共通している。併せて、主郭周囲まで到達する竪堀３や、尾根筋を大きく切断し、先端が竪堀状となる堀切４の形状なども共通する要素と見なせる。白石城跡の築城年代は天正年中に比定されていることから、周匝茶臼山城跡についても同様の年代観を与えることができるだろう。また、この際に築城に関わっていたのは宇喜多氏客将とされる明石行雄[25]とされる。その他、周匝茶臼山城跡と同様に堀切と複合する畝状空堀群を採用する山城として、鍛冶山城跡が挙げられる。この城は備前・備中国境に近い足守・大井に位置する連郭式１Ｄ類の山城で、天正７（1579）～10（1582）年に宇喜多氏が毛利氏の勢力下にある備中国への進出拠点として築城したと指摘されている[26]。

ところで、周匝茶臼山城跡は、遠心的な縄張りとなっていた。郭群１にのみ集中的な防御型ラインが形成される一方、周囲の郭群は小型、かつ削平の甘い状況を看取できた。この周匝茶臼山城跡と同時に尼子氏の攻略によ

第８図　白石城跡縄張り図（1/4,000）　和田作図

※背景地図は国土地理院発行の国土地理院基盤地図情報を基に作成

り落城したと指摘される[27]宮内城跡は、連郭式山城１Ａ類の山城であった。この城は主郭周囲に２つの郭群が並立する縄張りである。こうした遠心的な縄張りは周匝茶臼山城跡と類似する。また、主郭以外の曲輪の造成が甘い点も共通する。

以上の分析結果を勘案すると、周匝茶臼山城跡は、天文年間に尼子氏の侵攻に際して用いられた後、天正年間に主郭周囲のみに集中的な防御型ラインを設ける改修が行われたと考える。そしてその改修主体となったのは、畝状竪堀群の形状などから、浦上氏配下の国衆というよりも、宇喜多氏であった公算が大きいと考える。

続いて大仙山城跡について見ていこう。この城は畝状空堀群と横堀を備える連郭式１Ｄ類の山城であった。さらに枡形虎口、喰違虎口を用いて主郭への求心性を高めていた。連郭式１Ｄ類の内、築城年代の明らかなものとして両児山城跡がある（第９図）。この城は北郭、南郭の二つに分かれるが、南郭に畝状空堀群と土塁、横堀を併用した防御型ラインが形成されている。この城は天正10年２月に勃発した、八浜合戦に際して宇喜多方の陣所となったことはすでに述べた。この城と比較した場合、大仙山城跡は多重横堀が用いられていることや虎口が顕在的であるなどより発達した縄張りとなっている。特に大仙山城跡の虎口６、７は虎口内で侵入者の進路を２回屈曲させるもので、織豊系城郭からの影響を読み取れる。これは木島孝之氏の織豊系虎口分類の第Ⅶ類に相当し、概ね永禄10（1567）～天正７（1579）年の年代を与えることができる[27]。

第９図　両児山城跡縄張り図（1/4,000）　和田作図

※背景地図は国土地理院発行の国土地理院基盤地図情報を基に作成

以上の考察の結果、大仙山城跡の縄張りには戦国最末期における広域権力、それも織田・豊臣氏の影響を見て取ることができた。一方、畝状空堀群は織田・豊臣氏はほとんど用いることがない在地的な要素とされる[29]。つまり、大仙山城跡は織豊系と在地系の両者の特徴を備える城なのである。従って、この城を築城したのは戦国最末期に備前・美作国境に勢力を伸ばした在地勢力であると同時に、織豊勢力とも関係を有した広域権力体と推察する。そしてそれに該当するのは天正７（1579）年に在地勢力である毛利氏から外来勢力である織田氏へ鞍替えした宇喜多氏である可能性が、最も高いと考える。

## おわりに

今回の検討結果から、周匝茶臼山城跡、大仙山城跡とも、従来考えられていた在地国衆ではなく、広域権力体である宇喜多氏により天正年間に改修、築城された可能性を指摘できた。これまで宇喜多氏の城郭縄張りを構成する特徴的なパーツとして、折りを伴う土塁囲みとなる曲輪[30]、あるいは石垣[31]が挙げられていた。しかし、堀切と複合し、上位の曲輪へ集中的な指向性をもつ畝状空堀群、さらには横堀や経路に屈曲を伴う虎口というパーツもこれに加えうると考える。

こうした両城の改修、築城の契機については、宇喜多氏が天正７～12年まで続いた対毛利氏戦争において、国境線、いわゆる「境目」地域に橋頭堡を築いた上で備前国から備中･美作国へ進出したこと。岡山城を中心とし、河川交通により結びつく支城網を形成したことと関わると考える。これらについて今後も検討を続けたい。

註

（1）石丸平七郎定良『備陽記』日本文教出版　1965

（2）土肥経平『備前軍記』（『吉備群書集成』第参輯　吉備群書集成刊行会　1921所収）

（3）城館の面積は、縄張り図を地理情報システムにジオリファレンス（幾何学補正）した上で、縄張りの見られる範囲を回転楕円体法により算出した。実測値ではあるが、あくまで参考値として提示する。

（4）『備前周匝茶臼山城跡発掘調査報告書』岡山県吉井町教育委員会　1990

（5）『改修赤磐郡誌』大真屋書店　1980（岡山県赤磐郡教育会　1940を復刊したもの）

（6）出宮徳尚「茶臼山城」『日本城郭大系　第13巻　広島・岡山』新人物往来者　1980

（7）村田修三「吉井町周辺の中世城郭―大仙山・茶臼山を中心に―」『大仙山城址調査報告会発表資料』　1989

（8）前掲註４文献

（9）伊藤晃「考古編　Ⅲ中世」『吉井町史　第２巻』芳井町史編纂委員会　1992

(10) 畑和良「浦上宗景権力の形成過程」『岡山地方史研究』100　岡山地方史研究会　2003

なお、畑氏は『坪井文書（影）』所収の坪井弥三宛浦上宗景書状について、天文20年に発給されたものと推測している。この文書は坪井弥三が「すさい城」を奪還すれば、その方面の所領を加増すると約したものである。氏はこの書状について宗景が周匝方面の尼子氏対策に腐心したものと評価している。

(11) 中井均「岡山県の中世城館跡について」『岡山県中世城館跡総合調査報告書　第一冊　―備前編―』岡山県教育委員会　2020

(12) 全長は、縄張り図において縄張りの見られる範囲の最大長を計測した。

(13) a　松岡進「第７章　戦国期・織豊期における築城技術－研究状況整理の試み―」『戦国期城郭群の景観』株式会社校倉書房　2002

「導入系」技術については虎口の類型化、型式組列化を通じ織豊系城郭の編年案を提示した千田嘉博氏、そして織豊系虎口プランの地域的な受容形態の差異に触れた木島孝之氏の研究は特筆すべきである。

b　千田嘉博『織豊系城郭の形成』東京大学出版会　2001

c　木島孝之「織豊系城郭における虎口プラン変遷の試み」『愛城研報告』第五号　愛知中世城郭研究会　2000

(14) 中西義昌「概説―美作国の山城・丘城・館城―」『美作国の山城』「美作国の山城」編集委員会　2010

(15) ここで言う連郭式とは複数の曲輪を連ねる城郭構造全般を指す。これには複数の郭群が並列する群郭式、主郭を最奥部に配する梯郭式などを包括する概念として取り扱う。

(16) ここで言う土塁囲みとは、一つの曲輪の３辺以上を土塁により囲繞するものをさす。

(17) ここで言う畝状空堀群とは、竪堀を３本以上連続して並べ備えるもののことをさす。

(18) ここで言う高石垣とは、高さ５m以上測るものを指す。

(19) 前掲註10文献

(20) 『萩藩閥閲録』巻三十二　赤川勘解由

(21) 「明石行雄書状」『美作沼元家文書』（『岡山県古文書集』第３輯　思文閣出版　1981所収）

(22) 森俊弘「年欠３月４日付け羽柴秀吉書状を巡って」『岡山地方史研究』100　岡山地方史研究会　2003

(23) 森俊弘「岡山藩士馬場家の宇喜多氏関連伝承について」『岡山地方史研究』99　岡山地方史研究会　2001

(24) 前掲23文献

(25) 大西泰正『宇喜多秀家と明石掃部』岩田書院　2015

(26) 山本浩樹「戦国大名領国「境目地域における合戦と民衆」」『年報中世史研究』中世史研究会　1994

(26) 前掲註10文献

(27) 前掲注13ｃ文献

(28) 畑和良「織田・毛利備中戦役と城館群―岡山市下足守の城館遺構をめぐって―」『愛城研報告』第12号　愛知中世城郭研究会　2008

(29) 中西義昌「概説―美作国の山城・丘城・館城―」『美作国の山城』「美作国の山城」編集委員会　2010

(30) 高橋成計「備前宇喜多氏の陣城縄張りの考察 ― 陣城縄張りの変遷」『中世城郭研究』第28号　中世城郭研究会　2014

(31) 乗岡実「宇喜多氏城郭群の瓦と石垣―岡山城支城群の諸問題―」『吉備地方文化研究』第18号　就実大学吉備地方文化研究会　2008

# 岡山藩重臣の儒葬墓 ―岡山市大岩墓所―

亀　山　行　雄

## 1　はじめに

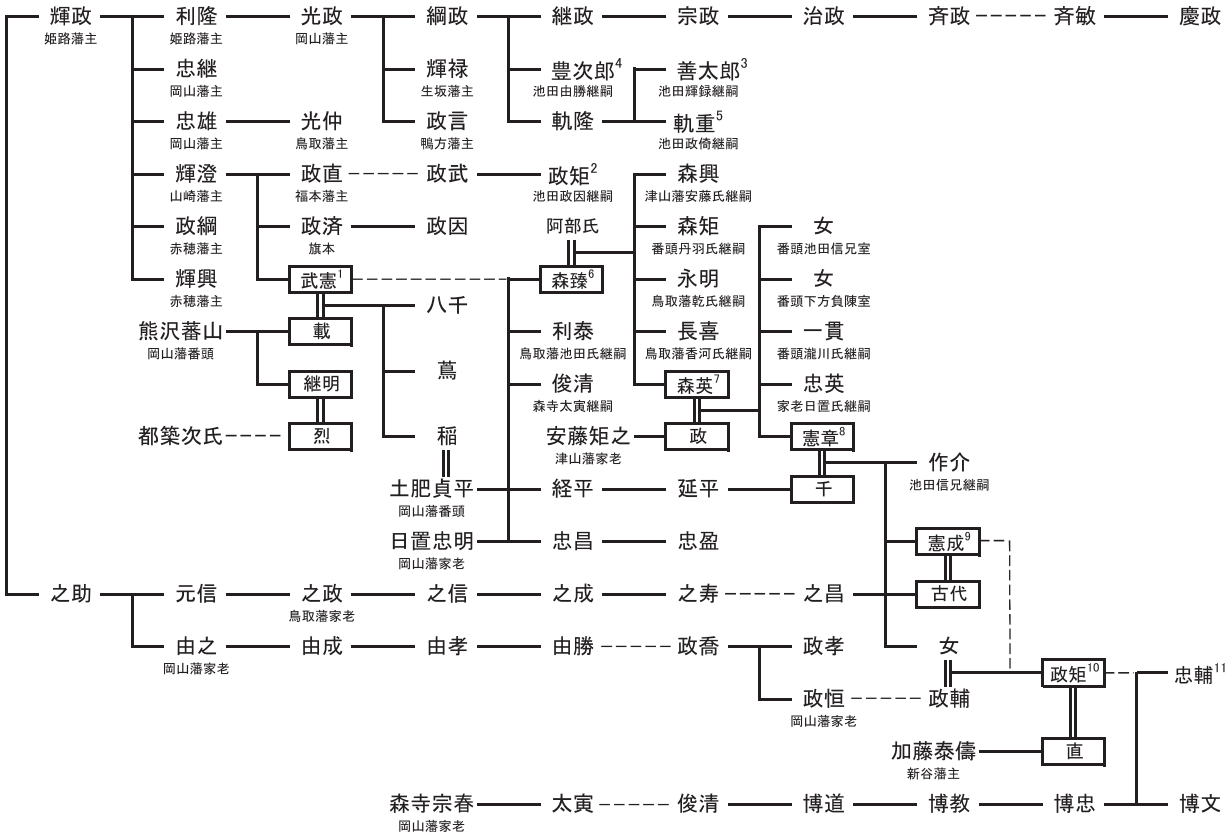
岡山市北郊の津高地区を東に見下ろす「大岩山」(1)の頂きに、かつてここを采地とした岡山藩中老池田家の墓所があった。1992年に山陽自動車道の建設に伴って墓石の移転が行われたが、その際に弥生土器や円筒埴輪が発見されたことから発掘調査の対象となり、地下の埋葬施設が明らかにされた(2)。墓石や墓誌の一部は山陽自動車道に隣接する下の山墓地に移設、保存されていたが(3)、大規模な霊園に改められた現在ではその所在を確認できない。

この墓所を開いた池田武憲（内膳）は、姫路藩主池田輝政と徳川家康次女良正院との間に生まれた山崎藩主池田輝澄の六男である。父輝澄の死後、従兄に当たる岡山藩主池田光政に招かれ、その嗣子綱政に番頭として仕えた。熊沢蕃山の長女載を娶り(4)、出頭人の津田永忠と対立したことでも知られる(5)。元禄８年（1695）に嗣子なく没した後、その名跡は親族や藩主一族により継がれたものの長くは続かず、享保３年（1718）に家老日置忠明の四男森臻が養子に入ってようやく定まった。その後も家老の隅池田家や建部池田家から養子を迎えるなどして、現在まで家名を繋いでいる（第１図）。

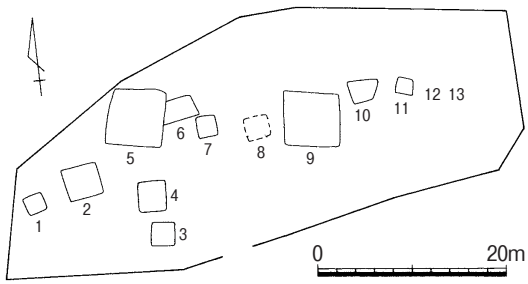
## 2　墓所の構造

標高58mの丘陵頂部に造営された墓所は、東西57m、南北23mの範囲を土塀で囲み、南辺の中ほどに出入口を設けていたようである（第２図）(6)。

中央北側に建つ初代武憲夫妻の墓石を中心として、その東に６代森臻（勘解由）と８代憲章（勘解由）夫妻の墓石、西に７代森英（志津馬）夫妻、10代政矩（勘解由）夫妻の墓石が南面して配置され、森英墓の南には９代憲成（志津馬）夫妻の墓石が東向きに置かれる。夫妻の墓




第１図　大岩池田家略系図（番号は当主、□は墓所に葬られた人物）




1　政矩　2　政矩夫人　3　憲章　4　憲章夫人　5　森英
6　森英夫人　7　武憲　8　武憲夫人　9　森臻　10　憲成
11　憲成夫人　12　蕃山継明　13　蕃山継明夫人

第２図　大岩墓所埋葬位置図（1/800）

石は向かって左を当主、右を夫人とし[7]、石を組んだ低い基壇の上に並べて据えられていた（写真１）。初代を中心としたこのような墓の配置は、儒教の昭穆制に倣ったものと見られる[8]。ただし、10代政矩夫妻の墓石が東に配置されなかったのは、８代憲章夫妻墓の隣に初代武憲の義弟に当たる蕃山継明夫妻の墓が設けられていたからなのかもしれない。このほか、森臻墓の北側で小児墓が発掘されており、子女が葬られた可能性もある。

## ３　墓石と墓誌

武憲夫妻の墓石は、いずれも円頭（円首）方柱形をした墓碑の正面を花頭形に彫りこんで戒名を、裏面に俗名と没年月日を刻んでいる。武憲の墓碑は高さ122㎝、幅38㎝、厚さ25㎝あり、基部に作りだした枘を方形の台石（方趺）に差し込んで据えていた。

これに対し森臻以後の当主夫妻の墓石は、高さ30～33㎝の台石を２段に重ね、その上に円頭方柱形の墓碑を据えていた。いずれも正面に姓名、裏面に没年月日を刻む儒式の墓碑である。墓碑は高さ121～124㎝、幅37～39、厚さ25～26㎝、台石を含めた総高は183～187㎝を測り、当主と夫人の墓石の間に著しい差違は認められない[9]。蕃山継明夫妻の墓碑もこれらと同形ではあるがやや小型で、台石も１段であった。

これらの墓石を取り除いてその下を掘削したところ、多数の墓誌が掘り出された。いずれも地表から比較的浅い位置に埋納されていたようである（写真２）。当主夫妻の墓誌は、花崗岩を方形ないし長方形に粗く加工した、断面凹字形の蓋石と断面凸字形の底石からなる。森英の墓誌には四辺中央に鉄錆が認められ、蓋石と底石を鉄帯によって十字に束ねていたようだ[10]。また、森臻の墓誌は蓋石の上面中央を長方形に彫りこんで「國老池田勘

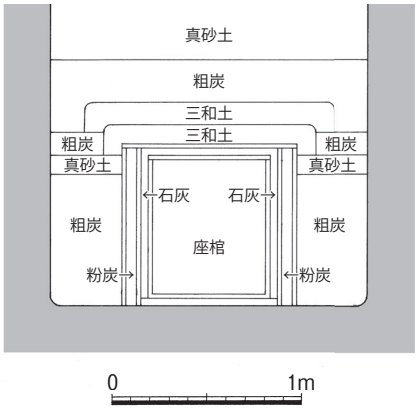
写真１　基壇の上に建つ墓石

表１　大岩墓所の墓石と墓誌

| 諱 | 称 | 没　年 | 享年 | 墓　石 | | 墓　誌 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 墓　碑 | 台石 | 平面形 | 蓋　石 | 底　石 |
| 池田武憲 | 内膳 | 元禄８年（1695） | 51 | 照空院殿義山裕良居士覚霊 | ○ | ― | ― | ― |
| 熊澤　載 | | 延宝４年（1676） | 22 | 普照院殿月潭妙光大姉幽儀 | ○ | 長方形 | ○ | 15字11行 |
| 池田森臻 | 勘解由 | 明和７年（1770） | 75 | 國老池田勘解由源森臻之墓 | 二段 | 方形 | 27字20行 | 27字20行 |
| 池田森英 | 志津摩 | 天明８年（1788） | 54 | 亜卿池田志津摩源森英之墓 | 二段 | 方形 | 19字13行 | 19字13行 |
| 安藤　政 | | 寛政12年（1780） | 58 | 池田志津摩孺人安藤氏之墓 | 二段 | 長方形 | ― | 15字14行 |
| 池田憲章 | 勘解由 | 享和３年（1803） | 40 | 亞卿池田勘解由源憲章之墓 | 二段 | 方形 | 19字12行 | 19字14行 |
| 土肥　千 | | 文化６年（1809） | 34 | 池田勘解由孺人土肥氏之墓 | 二段 | 長方形 | ― | 13字11行 |
| 池田憲成 | 志津摩 | 文政12年（1829） | 36 | 亞卿池田勘解由源憲成之墓 | 二段 | 方形 | 14字9行 | 14字13行 |
| 池田古代 | | 弘化４年（1847） | 50 | 池田志津摩孺人池田氏之墓 | 二段 | 方形 | ○ | 11字9行 |
| 池田政矩 | 勘解由 | 嘉永３年（1850） | 34 | 亞卿池田勘解由源政矩之墓 | 二段 | 方形 | ― | 14字14行 |
| 加藤　直 | | 弘化３年（1846） | 26 | 池田勘解由孺人加藤氏之墓 | 二段 | 方形 | ○ | 11字10行 |
| 蕃山継明 | 右七郎 | 貞享２年（1685） | 29 | 蕃山右七郎継明之墓 | 一段 | 方形 | 19字17行 | |
| 都築　烈 | | 貞享２年（1685） | 27 | 蕃山継明之妻都築氏之墓 | 一段 | 方形 | ○ | |

＊○は存在を確認しているもの、―は存在を確認していないものを表す。

写真２　掘り出された墓誌（底石）




第３図　森英墓埋葬復元図（1/40）

解由源森臻之墓誌」と刻んでいた。同様の意匠は他の墓誌にも見られたのかもしれないが確認できていない。

当主の墓誌は底石から蓋石にかけて[11]、夫人の墓誌は底石にのみ誌文を刻んでいる[12]。磨かれた誌面に姓名、出自、生年月日、経歴、没年月日、葬地、子女、撰文者名を刻んだ誌文は、森臻が1032字と最長で、以下、森英が441字、憲章が434字、憲成が255字、政矩が193字と、代が下るにつれ短くなる。夫人においても、武憲夫人（熊澤載）が157字、森英夫人（安藤昌）が198字、憲章夫人（土肥千）が141字、憲成夫人（池田古代）が91字、政矩夫人（加藤直）が105字と、ほぼ同様の傾向が見て取れる[13]。また、１行19字の森英・憲章、１行14字の憲成・政矩、１行11字の憲成夫人・政矩夫人と、前後の世代間で墓誌の書式が踏襲された可能性がある。このほか、森臻・森英・憲章墓では蓋石の刻字、政矩墓及び森英・憲章夫人墓では底石の刻字に墨を入れていた[14]。誌文を撰した近藤篤、万波俊休、杉本弘卿はいずれも岡山藩の儒臣である。

蕃山継明夫妻の墓誌は、ともに全面を磨いた碁盤状の花崗岩を用いている。継明の誌文は306字で、『小原大丈軒文集』に載せる「蕃山右七郎継明之墓誌」[15]と比較すると、父祖の生地や享年など39字が削られている。誌面を下にして埋められたようで、夫人の墓誌は誌面の裏に「蕃山右七郎継明之妻 都築氏之墓誌」と刻む。

## ４　埋葬施設

発掘調査によって検出した11基の墓壙は、平面方形ないし不整方形を呈している。その規模は、当主の方が大きい森英夫妻墓（５・６号墓）、憲章夫妻墓（10・11号墓）と、夫人の方が大きい憲成夫妻墓（３・４号墓）、政矩夫妻墓（１・２号墓）とがあって一定しない。これらは１～２ｍの間隔を保って設けられているが、森英夫妻墓に限って切りあいが認められたようだ。一辺5.8～6.0ｍと最大規模の墓壙を持つ森英墓と森臻墓（９号墓）は、武憲夫妻墓（７・８号墓）を挟んで対称の位置にあり、計画的に配置されようすがうかがえる。しかし、両墓を結ぶ中軸線は、墓所の長軸より北へ振れており、東西方向を指向した可能性がある。

森英墓の墓壙は地表から階段状に掘りこまれ、深さ７ｍにまで達していることが発掘調査により明らかとなった[16]。約２ｍ四方の墓壙底中央で検出された幅65㎝、高さ65㎝以上の座棺は、その周囲を厚さ３～５㎝の石灰層[17]と厚さ10～20㎝の粉炭層で二重に囲み、墓壙との間には粗炭を充填していた。石灰層と粉炭層との間には「椁」に当たる薄い板材が残存していたものの、粉炭層と粗炭層との間では見つかっていない[18]。高さ80㎝を測るこの椁の上部を約90㎝四方の板で封じた後、厚さ５～10㎝の三和土層[19]で二重に覆っていた。その周りに見られる厚さ10数㎝の真砂土層は、この作業に際して敷かれたと考えられる。これらを厚さ30㎝の粗炭で覆った

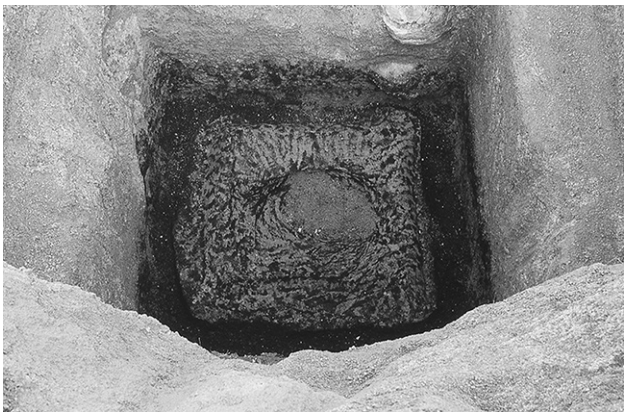


写真３　椁を覆う三和土層

写真４　石灰層で囲まれた座棺

後、真砂土により墓壙上端まで埋め戻している[20]（第３図）。ところで、椁を覆った三和土層の中央には真砂土が詰まった楕円形の窪みが見られたが（写真３）、粗炭で覆われていることからすると上方からの落ち込みとは考えにくい。あるいは、埋葬の過程で椁や棺の上部を損ない、そこに生じた窪みを真砂土で埋めたのかも知れない。

この森英墓とよく似た構造は政矩墓（１号墓）ないし憲成墓（３号墓）でも見られたようで、周囲を厚い石灰層で囲んだ座棺が良好に遺存していたようすが写真に記録されている（写真４）。また、森英墓の東13mにあって同規模の掘り方をもつ森臻墓は、棺を確認するには至らなかったものの、やはりかなり深い場所から木炭の層を検出していて、同様の構造であった可能性が強い。

夫人の棺は、森英夫人墓（６号墓）が甕棺を用い、憲成夫人墓（４号墓）は「伸展葬」であったと報告されており、当主とは異なる構造をとっていたようだが、写真等の記録は残されていない。なお、移転に携わった業者からの聞き取りによると、岡山市中区の東山墓地に葬られた森臻夫人（阿部政）は銅板製墓誌とともに甕棺に納められていたと言う。

## 5　副葬品

墓から出土した副葬品として、刀、短刀といった武器のほか硯や水滴、矢立などの文房具、煙管や煙管入のような喫煙具、鏡や櫛、簪、毛抜きなどの化粧道具、箸や椀といった食膳具、植木鉢のような趣味道具等が報告されている。

このうち、１号墓、５号墓、６号墓のものとされる副葬品の内訳は、整理事務所へ搬入された際に筆者が作成した記録と齟齬を生じている。また、図面や写真が掲載されているものの、出土した墓が明らかにされていないものも多い。このため、筆者の記録をもとにして、報告された副葬品を墓ごとにまとめた表を参考までに掲げておく（表２）。

この表には「池田６」のように同じ墓番号を持つものがあるが、No,20、No,23と別々の遺構番号が振られている上、副葬品の種類も重複することから、異なる墓と考えられる。また、森英墓（５号墓）の調査時に撮影された副葬品の写真から判断すると、No,24がこれに該当するようだ。このほか、簪を副葬するNo,21、No,23は夫人墓（２号墓、４号墓、６号墓）の可能性がある。

## 6　結語

岡山藩では、藩主池田光政が儒式の和意谷墓所を造営し、儒臣熊沢蕃山も『葬祭辨論』を著して儒葬を奨励した。しかし、光政の嗣子綱政は菩提寺として曹源寺を建立し、その裏山に仏式の正覚谷墓所を開く。大岩墓所においても、綱政に仕えた初代武憲夫妻の墓石は戒名を刻んだ仏式が採用されている。大岩墓所の墓石が儒式に改

表２　大岩墓所の副葬品一覧

| | 刀 | 短刀 | 小柄 | 笄 | 硯 | 矢立 | 水滴 | 鏡 | 櫛 | 簪 | 毛抜 | 鋏 | ヘラ | 煙管 | 煙草入 | 袋物 | 扇子 | 箸 | 植木鉢 | 銅銭 | 棺金具 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| No,20（池田６） | | | | | 72図M24 | | | | | | | | 72図W3･4 | 69図M9 | 図版10 | 図版8 | 図版8 | 72図M23 | | | |
| No,21（池田５） | | 70図M18 | | | | | | | | 72図M21 | | 72図 | | | | | | | | | |
| No,23（池田６） | | 70図M17 | | | | | | 69図M8 | | 72図M22 | ○ | | | ○ | ○ | | | ○ | | | ○ |
| No,24（池田１） | 70図M12･13 | | 67図M4 | 67図M3 | | 72図M19 | | 67図M2 | | | ○ | | | 67図M5・6 | | | | ○ | | 図版10 | |
| （池田１） | | | | | 68図8 | | 68図7 | 67図M1 | 67図W1 | | 72図M26 | | | ○ | | 図版10 | | 図版9 | 68図5・6 | | |
| （池田４） | 70図M15･16 | | | | | | | | | | | | | | | | 図版9 | | | | 72図M27 |

＊遺物番号・図版番号は発掘調査報告書による。

められたのは、明和７年（1770）に没した森臻以後のことである。森臻の葬儀を執り行った森英は、翌年に祠堂を建立し祭儀を儒礼に改めたことがその墓誌に記されており[21]、墓所の整備もその一環として行われた可能性が高い。そこには、徳川家康の曽孫に当たる「祖父」武憲[22]や家老家から入って藩政に携わった父森臻を顕彰するとともに、藩儒熊沢蕃山と繋がる家系を誇る意図があったのかもしれない。森英の始めた儒葬はその後の規範とされ、当主没後に出家した夫人たち[23]も朱熹の『家礼』に則って葬られたようである。

これまで述べてきたように、大岩墓所は岡山藩における儒葬墓の埋葬施設が発掘調査によって確かめられた初めての例であった。しかし、その調査成果をまとめた報告書には不備が多く、本稿はその内容を補足、訂正することを企図したが、保管されているはずの調査記録が見当たらず[24]、筆者の知るところを記すに留まった。後日、改めて検討したい。

註

（1）「大岩山」の名は森臻の墓誌にはじめて見える。

（2）発掘調査の対象とされたのは森英墓のみで、政矩夫妻、憲成夫妻の墓は重機掘削により副葬品を収集したようである。

二宮治夫1998「大岩遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』128　岡山県教育委員会

（3）亀山行雄2019「岡山藩の重臣が眠る場所－大岩墓所－」『所報吉備』66　岡山県古代吉備文化財センター

（4）この時、熊澤蕃山はすでに致仕しており、その跡を継いだ政倫（藩主光政の三男、後の生坂藩主輝録）の養妹として武憲に嫁いだという。

井上通泰1902「蕃山考」21頁（正宗敦夫1978『増訂蕃山全集 第６冊』名著出版所収）

（5）柴田一1990『岡山藩郡代津田永忠 下』山陽新聞社、201頁

（6）註２文献第63図による。ただし、ここに図示された８号墓は森臻墓（９号墓）、９号墓は憲章墓（10号墓）、10号墓は憲章夫人墓（11号墓）の誤りである。武憲夫人墓（８号墓）は図示されていないが、土壙墓１を切る「池田家墳墓」がそれに当たるようで、武憲墓（７号墓）の東２～３ｍに位置する。

（7）池田光政墓（和意谷墓所）や光政に仕えた家老伊木忠貞墓、日置忠治墓などと共通する配置で、「儒式あるいは大陸式」と評価されている。

乗岡実2018「中四国の大名墓の展開」『第10回大名墓研究会当日資料』大名墓研究会、48頁

（8）註７文献47頁

（9）朱熹の『家礼』には、墓碑について「高四尺趺高尺許－中略－石須闊尺以上其厚居三之二」とあり、当主夫妻の墓石はこれを曲尺で換算した値と概ね一致する。

細谷恵志2014『朱子家礼』明徳出版社、288頁

吾妻重二「日本における『家礼』式儒墓について」10頁

(10) 朱熹の『家礼』に「以二石字面相向而以鐵束束之」とある。

註９細谷文献249頁

(11) 憲章の墓誌は蓋石から誌文が始まる。また、政矩の墓誌は底石にのみ誌文を刻む。

(12) 武憲夫人と政矩夫人の墓誌は、それぞれ蓋石の誌面に「池田武憲妻熊澤氏之墓誌」、「池田勘解由孺人加藤氏之墓誌」と刻む。

(13) 北脇義友2018「岡山藩における墓誌について」『近世大名墓制の基礎的研究』雄山閣、296頁

(14) ５代藩主治政の墓誌について「御墓誌銘千百四十五文字彫立黒漆入」とある。

註13文献289頁

(15) 註４文献49・50頁

(16) 朱熹の『家礼』に「宜狭而深狭則不崩損深則盗難近也」とある。

註９細谷文献246頁

(17) 註２文献では「漆喰」と報告されている。

(18) 三和土が粉炭層上端を包むように覆っており、粉炭層を仕切る椁の外板が存在した可能性が高い。

(19) 註２文献では「粘土」と報告されているが、地山の赤土に石灰等を混ぜた三和土と思われる。

(20) 松原典明によって埋葬の手順が復元されている。

松原典明2012「近世大名家墓所の地下構造と喪禮実践の歴史的脈絡」『近世大名葬制の考古学的研究』雄山閣、114頁

(21) 誌文に「明和辛卯建立祠堂改浮屠之禮八月朔日置　主祠堂自是時祭忌日之薦朔望俗節之儀略従儒禮」とある。

(22) 森英の覚書に「祖父内膳武憲」とある。

註４文献21頁

(23) 森英夫人は「俊操院」、憲章夫人は「負操院」の法諡を授かったことが墓誌に見える。

(24) 調査時の写真は保管されているものの、筆者が提供した墓誌の実測図を含む調査図面の所在は確認できなかった。

## 安藤　政

池田志津摩孺人安藤氏墓誌

孺人諱政幼名照作州津山人也父諱矩之稱叡負津山侯老臣本姓山田氏主膳次子出冒安藤氏以其長女配之以寛保癸亥六月十六日生孺人寶暦戊子来為備前中老池田志津摩君之配孺人性資幽閑善盡三從之道子男三人長勘治夭次憲章承家系次忠英續國老日置氏次一貫續騎將瀧川氏女三人長適騎將下方負陳次適騎將池田信兄次早亡志津摩君没後孺人法諡稱俊操院寛政庚申七月十一日以疾卒享年五十八葬于津高郡大岩之山先塋之傍

## 土肥　千

池田勘解由君孺人土肥氏墓誌

中老池田君諱憲章之孺人法諡負操院土肥氏諱千者騎士將延平之女也以安永丙申十月三日生以寛政壬子正月十六日嫁文化己巳年三十四以十月十三日卒祔葬於本州津高郡大岩山之先塋天資貞静閨門有法四男一女長憲成承家次作介為池田信兄義子次英三夭季武四郎女未嫁

## 池田古代

君諱古代因藩家老池田日向之昌庶女寛政六年甲寅六月二十六日生文化十四年丁丑二月十五日嫁本藩中老池田志津摩君弘化四年丁未十二月八日卒享年五十有四年池田氏采地津高郡大岩山先塋側

杉本弘卿謹撰

## 加藤　直

君諱直豫州新谷侯加藤長門守泰儔庶女文政四年辛巳十月二十一日生江戸之邸後歸其藩新谷府天保七年丙申四月十四日嫁備藩亜卿池田勘解由君弘化三年丙午五月二十八日卒享年二十有六葬池田氏采地津高郡大岩山先塋側生一男二女而男夭

## 蕃山継明

蕃山右七郎諱継明小名三太郎曾祖考野尻九兵衛諱重政尾州之産也初事平信長公致仕號道跡曾祖妣伊庭氏祖考野尻藤兵衛諱一利歴仕加藤左典厩山崎甲州刺史山口匠作祖妣熊澤氏父息游軒諱伯継継外祖父熊澤半右衛門諱守久之家緒故稱熊澤二郎八又改助右衛門以仕于　備前國侯羽林君為士將食禄三千石後譲禄於　羽林君之庶子八之丞而致仕及立外祖父熊澤氏之後以奉祀自以采邑為氏稱蕃山母佐久間氏其無恙明暦三年丁酉二月四日生於備前和氣郡蕃山村寛文九年己酉羽林君召出賜年給三百俵月俸二十人相継奉仕　拾遺君加賜二百俵天和三年癸亥為兒小生頭貞享二年乙丑七月十六日終于岡山葬于津高郡大岩村嘗娶松平日州太守之老臣都築太郎左衛門次氏之養女先終生長女由宇男亀太郎先夭女鶴無恙

## 参考

蕃山右七郎継明之墓誌

蕃山右七郎諱継明小名三太郎曾祖考野尻九兵衛諱重政尾州之産也初事平信長公致仕號道跡七十三歳而終曾祖妣伊庭氏祖考野尻藤兵衛諱一利播州高野郡稗村産也歴仕加藤左典厩山崎甲州刺史山口匠作後致仕號一丁九十一歳而終祖妣熊澤氏父息游軒諱伯継京師之産也継外祖父熊澤半右衛門諱守久之家緒故稱熊澤二郎八又改助右衛門以仕于備前國侯羽林君為士將食禄三千石後譲禄於羽林君之庶子八之丞而致仕及立外祖父熊澤氏之後以奉祀自以采邑名為氏稱蕃山母佐久間氏其無恙明暦三年丁酉二月四日生於備前和氣郡蕃山村寛文九年己酉羽林君召出賜年給三百俵月俸二十人相継奉仕拾遺君加賜二百俵天和三年癸亥為兒小生頭貞享二年乙丑七月十六日終于岡山享年二十九葬于津高郡大岩村嘗娶松平日州太守之老臣都築太郎左衛門次氏之養女先終生長女由宇男亀太郎先夭季女鶴無恙

「小原大丈軒文集」所載

三世其間恩例賞賜不遑枚擧　君娶於津山侯
大夫安藤矩之女有四男三女男其一先夭其二
憲章克其家其三出續日置氏家先卒其四猶在
家女其一嫁下方負陳其二嫁池田信兄其三先
夭　君續家緒之後弟二人其一森興出續作大
夫安藤氏家其二森矩出續丹羽氏之家妹嫁作
大夫安藤次保　君爲人明敏純實篤好聖学深
尊古道右文左武斃而後己勘解由君命休記
君之生卒與履歷知愛之深義不可辞遂爲誌云
万波俊休謹識

## 池田憲章

亜卿池田勘解由君墓

君諱憲章字伯丈幼名久之介稱勘解由姓池田
其先　大雲公者　國清公第四子也封於播之
郡六万五千石爲従四位下侍従兼石見権守賜
姓松平氏有故封除　大雲公季子諱武憲　烈
公客遇之而後臣之食邑四千石其卒也無嗣
曹源公揮其可以爲後者而立焉未幾更継支族
凡四人武憲之不享殆二十四年矣及　保國公
之時命日置氏之子諱森臻主武憲之祀是實君
之祖也官自騎将累遷為國老禄至五千石考諱
森英食四千石爲亜卿妣安藤氏君以明和元年
甲申九月三日生天明三年命爲太祝六年考以
病致事君襲禄爲騎将七年祇役江戸明年春自
江戸至寛政二年使江戸拝鶴賜也八年與聞國
政兼総裁出納之事蓋特旨也冬之江戸至之日
君見擢爲亜卿攝職如故明年從　公帰十一年
之江戸六月
東朝有浚川之役徴庸徒於我　公命君董其役
役畢
大君賞其功賜葵章時衣五外套一與白金五十
枚十二年夏至自江戸其明免攝職享和三年六
月二十九日以病卒享年四十葬于大巌山之先
塋君性資温厚頗有志千學行陣帥師之法至射
御剣槍之技莫本學焉尤長于兵學配土肥氏有
四男一女長憲成承家次作介為池田信兄義子
次英三夭次武四郎

## 池田憲成

故中老池田君就卿墓誌銘

池田君諱憲成字就卿称志津摩幼
名久之介
國清相公之季子為大雲公諱輝澄
是君之五世祖也高祖諱武憲曽祖
諱森臻祖諱森英考諱憲章妣土肥
氏君寛政甲寅十一月望生享和癸
亥承家緒準番頭食禄如故文化戊
辰為番頭壬申祇役江戸癸酉帰丙
子使京丁丑三月賜絹二匹勞使京
也文政辛巳為中老己酉祇役江戸
與聞政事丙戌帰己丑二月三日卒
年三十六葬大岩山先塋之墓左配
因大夫之昌女池田氏無子養姉丈
池田政輔次子政矩為嗣君性資敦
厚謹慎謙恭持己信義接物自幼為
學遵乎家訓假之以年則德業之成
其可量乎銘曰
敬以恭　信而孚
非外鑠　德之符
天奪年　命也夫
帰窀穸　與化俱

## 池田政矩

君姓池田諱政矩小字鏻之進父池
田政輔母祖父憲章女君以文化十
有四年丁巳正月二十有九日誕文
政十有二年己丑三月十有三日父
憲成告官以為義子五月四日賜秩
四千石以故而為番頭格十有三年
正月十有一日為番頭上席改称勘
解由天保十有一年庚子正月十有
四日為中老嘉永三年庚戌六月十
有五日卒享年三十有四葬津高郡
大岩山先塋次室豫州新谷侯加藤
泰儔女生一男二女先卒而男亡夭
初君疾病告官以池田博忠次子森
寺忠輔為嗣今襲其家緒云

## 熊澤　載

池田武憲之妻熊澤氏之墓誌

熊澤氏名載父熊澤助右衛門伯継安
夫部氏明暦元乙未年十二月二十四
日生於備前國和氣郡蕃山縣十五歳
適池田三郎左衛門武憲延寶四丙辰
年六月二十一日卒同國御野郡岡山
府葬於同國津高郡大岩縣亥子方山
頂三本松山寅方去大岩縣百十間餘
去三本松山九十間許有五女第一女
名從夭死第二女名八千第三女名鹿
第四女名長第五女名通

## 池田森臻

故公族大夫観海老君墓誌銘

君諱森臻稱勘解由初諱俊明稱久之介観海浮屠氏之所謚也　國清公第四男曰石見侯兼拾遺松平輝澄是爲君先石見侯第六男諱武憲幼稱萬之介後稱池田三郎左衛門又稱兵庫又稱内膳　芳烈公以其爲庶孽而處家召爲臣食禄一千石爲騎将授加食一千石累進爲大夫又加食禄二千石與前所食禄爲四千石以正保三年生以元禄八年卒娶熊澤氏唯生五女無男嗣其家者　曹源公命曰宗之子□使嗣其家者有四其一曰内膳諱政矩其二曰善太郎諱某其三曰長千代諱某其四曰亀次郎諱軌重俱初嗣其家更出嗣其同宗之無子者是以内膳君之家中絶故　空山公憂之以享保三年戊戌正月十一日以君継之食禄三千石爲騎将以君班在於諸騎将首改稱三郎左衛門君實　藩大夫日置忠明之四男也以嗣内膳君之家改爲池田氏母為岩直氏忠明之妾也以元禄九年丙子七月五日生於岡山享保十四年己酉七月十六日　命爲亞卿改賜勘解由之稱出入乗輿元文二年丁巳十一月二十五日　命爲大夫班後於世爲大之者加食禄一千石免聞政四年己未十月十九日　命聞政二十四日別食一千石以供職事之費五年庚申三月十六日　公命依内膳君故事賜以銃猟會獣於大岩都邑寛保二年壬戌関東大水決堤諸渠爲之壅塞　懸官命　藩與浚之　公以君総董之役是以有上州川俟之役功成　懸官賜衣及白銀　公賜刀寛延元年戊辰朝鮮聘□東朝舟次牛窓君奉　命應接之於客館寶暦元年辛未十二月二十五日　公以別食千石所供職事之費賜之以合本禄於是食禄併賜五千石二年壬申君在東都十月二十五日　公命賜乗轝以過都下先是　公爲君乞於　懸官而　懸官聽之也十二月六日　懸官命　公退位而老　壽國公嗣立十二日　公朝　闕謝恩君同伊木上卿及公族大夫大學從焉特見　大君于黒書院五年己亥八月十三日　復命勞君勤勞職事右年致仕而老班後於世爲大夫者之老者明和七年庚寅三月九日以病卒享年七十有五葬于其邑大岩山先塋側君在職之日奉　命爲役於東都凡八當君之疾病也　空山公遣使者問病侍醫賜藥　今公亦遣使者問病及卒賜賻君歴仕於藩二世致仕至子　今公猶無恙其間恩例賞賜不遑枚擧君娶福山侯大夫阿部氏義之女先君卒生一男一女女名竹早夭男名森英稱志津摩克其家食禄四千石妾生六男四女男其一名某早夭其二名長喜出嗣因幡侯臣乾氏少死其三名某早夭其四名永明亦出嗣因幡侯臣香河氏其五名森興其六名森矩女其一未名而夭其二名喜野未嫁卒其三名槌其四名釣配中村正徑君爲人明敏過絶人故能練達官事方物出謀發慮夙夜匪懈愛好人物喜下士爲故舊賙窮卹匱恩義懇篤志津摩君石誌其墓命篤記君之生卒與在職所謀及志行履歴梗既係以銘篤也辱愛於君不爲不深雖以篤之不敏不得固締遂爲誌及銘銘曰　君族出類其所以興君克勤事　近藤篤謹誌

## 池田森英

亜卿池田志津摩源森英君之墓誌

君諱　森英稱志津摩幼名甚内享保乙卯閏三月八日生于本府　父勘解由森臻母福山侯大夫阿部正義之女也寛保壬戌初奉謁空山公寶暦乙亥續家緒食禄四千石首於騎将同年卒九月三日

壽国公命賜志津摩之稱九年巳卯爲亜卿與聞國政出入乗輿明和庚寅九月廿一日

今公娶於姫路侯御将之際周旋其事明和辛卯建立祠堂改浮屠之禮八月朔日置　主祠堂自是時祭忌日之薦朔望俗節之儀略從儒禮安永乙未十二月朔日男憲章初奉謁今

公天明丙午三月九日致仕男憲章續家緒食禄四千石首於騎将命賜勘解由之称八年戊申六月十三日以病卒年五十四葬大巖山先塋之側

君在職之日奉　命祇役東都凡四歴仕　藩

# 紀　　要

第２号

令和４年３月18日　印刷

令和４年３月18日　発行

発　行　岡山県古代吉備文化財センター
岡山市北区西花尻1325-3

印　刷　株式会社印刷工房フジワラ
岡山市北区丸の内2－11－18